

宮城県文化財調査報告書 第88集

# 仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書Ⅱ

植 田 前 遺 跡  
松 田 遺 跡  
青 木 遺 跡

昭和 57 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会  
宮 城 県 企 業 局

## 序 文

豊かな自然に恵まれた宮城県には数多くの有形無形の文化財があります。しかし、近年の急激な都市化現象によって消滅の危機に瀕しているものもあります。とくに約 5300 箇所を数える遺跡の保護と開発の調整は大きな課題であります。

埋蔵文化財を包蔵する地域の開発に当たっては、関係者に対しつとめて遺跡の現状保存の措置をとられるよう協力を要請し、止むを得ず現状保存のできないものについては、記録保存するための発掘調査を実施するようしております。

仙南仙塩広域水道事業は、七ヶ宿ダムと白石川に水源を求め仙南・仙塩 8 市 11 町、1843 千人に「生命の水」を供給する事業であり、事業の公共性と文化財の重要性から関係者間で十分な協議を重ね、昭和 54 年から 55 年まで 6 遺跡の発掘調査をし、昭和 56 年度は植田前遺跡、松田遺跡と青木遺跡の発掘調査を実施しました。とくに松田遺跡からは縄文時代早期の竪穴住居跡とこれに伴う多量の遺物の発見があり、類例の少ない貴重な資料を得ております。

本報告書は、その調査結果をとりまとめたもので、学術研究上は勿論のこと社会教育の資料としても広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一層深められるよう願うものであります。

最後に、本報告書の刊行に当たり御協力をいただいた関係者の方々に深く感謝を申し上げます。

昭和 57 年 3 月

宮城県教育委員会 教育長 北 村 潮

## 序 文

宮城県は、未来に向けて発展する「新しいふるさとづくり」を推進しておりますが、その一翼を担う公営企業の責務は大きいものがあります。その中で県土の発展につながる基礎条件の一環として広域的水道整備計画が策定され、水資源の総合供給体制の確立が図られております。この計画に基づき大崎に次いで県営広域水道の第2号として、仙南・仙塩広域水道用水供給事業を進めております。

本事業は、仙南・仙塩地域19市町の増大する水需要に対処するため、七ヶ宿ダムに水源を求め、昭和71年度を計画目標年次に1日最大553,300立方メートルと水道用水を供給するものであります。この地域は、本県人口の約60%が集中しており、また、県土面積の約30%を占め、仙台市を中心に急速に都市化が進み、人口の増加と相まって、その生活基盤となる水需要も増加の一途をたどっています。

事業は、昭和52年度に送水施設から着工し、導水・浄水施設など全施設の完成を昭和67年度に予定しておりますが、動脈となる送水管は延々180キロメートルに及ぶものであり、布設に当たってその管路敷周辺の自然環境などの保全には特に留意して進めております。

このたびの発掘調査区は経路上、技術上やむなく選定いたしましたものであり、発掘調査については事前に県教育委員会と十分協議を行い実施いたしましたものであります。その結果、数々の貴重な資料が発見されました。殊に、松田遺跡については全国的にみても発見例の少ない縄文時代の資料が発見され、高い成果をおさめました。

ここにその成果がまとめられ、報告書1として発刊されることになりました。

この調査記録が学術・教育上にも大きく役立つことを切に願っております。

最後に、この調査に当たり長期間ご協力をいただいた地区住民の方々をはじめ、  
県教育委員会及び関係者の方々に深く感謝申し上げます。

昭和57年3月

宮城県公営企業管理者 羽 田 光 雄

## 目 次

序 文

序 文

調査に至る経過	1
各遺跡の位置と環境	2
Ⅰ. 植田前遺跡	5
Ⅱ. 松 田遺跡	13
Ⅲ. 青 木遺跡	99

## 例 言

1. 本書は仙南・仙塩広域水道関係遺跡発掘調査報告書第2分冊として、3遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は北から順に行なった。
3. 調査の主体者は宮城県教育委員会、宮城県企業局である。
4. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、白石市教育委員会に御協力をいただいた。
5. 石器の材質同定は東北大学教授蟹沢聡史氏にお願いした。
6. 土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
7. 地形図は建設省国土地理院発行の1/25000（白石、大河原）地形図を使用し、複製したものである。
8. 整理、報告書は作成は文化財保護課調査係が行なった。「調査に至る経過」は平沢英二郎「各遺跡の位置と環境」は土岐山武が担当し、その他、各遺跡の整理、執筆分担は次のとおりである。

植田前遺跡	——	土岐山武
松田遺跡	——	土岐山武
青木遺跡	——	菊地逸夫
9. 上記遺跡の出土遺物、実測図、写真等の記録は宮城県教育委員会に保管している。
10. 今回の報告書執筆にあたり加藤稔、馬目順一氏、岡村道雄氏、手塚弘氏から御助言をいただき、貴重な資料を見せていただいた。

## 調査に至る経過

仙南仙塩広域水道に係る水道用水供給事業は、昭和 56 年になって工事に着手した七ヶ宿ダム並びに白石川水源を求め、1 日当たり最大 600,000 m<sup>3</sup>を取水し、仙南 3 市 6 町、仙塩 5 市 5 町、1843 千人を対象 553,300 m<sup>3</sup>の「生命の水」を供給するものであり、昭和 60 年に一部給水を開始し、昭和 71 年度一切の工事が完了することを目途に計画された。

最大径 2400φの送水管理埋設工事計画に当たり、そのルート上に埋蔵文化財の所在することが判かり宮城県企業局と宮城県教育委員会の間で遺跡の保存をめぐり再三にわたり協議が行われた。

3 回にわたる遺跡分布調査と日本道路公団との協議などを経て、調査対象遺跡及び発掘面積を確定した。第 1 次発掘調査は昭和 54 年 9 月 10 日から 10 月 9 日まで欠・持長地遺跡（蔵王町）を対象に実施した。第 2 次発掘調査は昭和 55 年 6 月 2 日から 7 月 18 日まで下原田遺跡、宮城館跡（以上蔵王町）を家老内遺跡、明神脇遺跡、御所内遺跡（以上白石市）を対象に実施した。これらの遺跡の調査成果については「宮城県文化財調査報告書第 79 集『仙南仙塩広域水道関係遺跡発掘調査報告書 I』」にとりまとめている。また、この年二屋敷遺跡（蔵王町）は東北自動車道発掘調査の際出土遺物が県内の自動車道全路線の半分に当る約 1000 箱の出土があり遺跡の重要性を十分考慮してシールド工法により現状保存をはかることになった。

本年度の調査は第 3 次発掘調査であり、4 月 7 日から 6 月 3 日まで植田前遺跡、松田遺跡と青木遺跡（以上白石市）を対象とし、あげ土処理のための借地の可能な時期の調整を行い実施した。

その結果、松田遺跡では、自動車道関連遺跡発掘時に注目を集めた押型土器が多量に出土ししかも同時代の竪穴住居跡 2 棟の検出と併わせ成果をあげることができた。

押型文土器出土地は分布が少ないうえ同時代の発掘調査の例はあまりなかった。東北各地方に比較資料を求めながら遺物整理作業に入ったのは 11 月中旬であった。

## 各遺跡の位置と環境

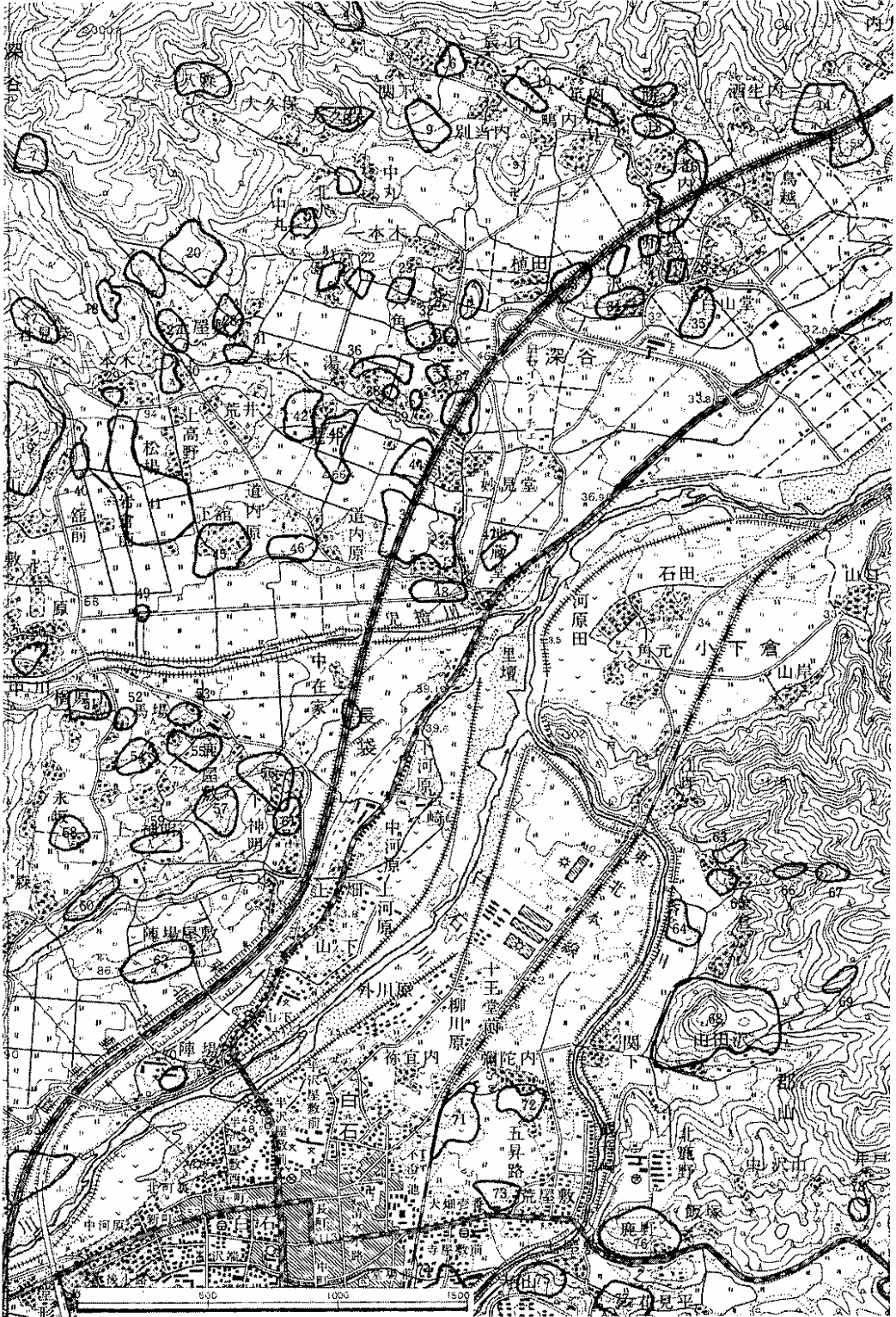
植田前、松田、青木遺跡は白石市福岡深谷地区に所在し、白石市役所の北方 3.5～4.5km の地点に位置している。

深谷地区は白石市の北西部にあり、青麻山の南東側に位置している。本遺跡が位置している白石市を中心とした宮城県南部の地形を概観すると、東側に阿武隈山系の北端である東部丘陵帯、西側に白石市の大部分を占める西部山地（奥羽山脈と蔵王火山群）とがあり、その間に、南南西―北北東にかけて幅約 4km、長さ約 20km の細長い低地（白石盆地）が広がっている。その低地間を小原方面から北流し、戸沢川、青沢、斉が川、高田川などの支流をあつめた白石川が流れている。白石川は蔵本付近で流路をかえ、さらに小下倉で八宮方面から流れてくる兎捨川を、宮で遠刈田方面から流れてくる松川を合わせ、大河原方面に流れこんでいる。

白石川、松川を境にして、西側にある青麻山、蔵王山の東麓が白石川、松川と面する原、長袋、深谷、宮、鉄砲町、曲竹などには段丘の発達が見られる。現在、二段の段丘が見られ、本遺跡は下位段丘に位置している。

植田前遺跡は標高約 47m で、東側に緩やかに傾斜している。現状は大部分が畑地である。松田遺跡は標高約 50m で、東側にゆるやかに傾斜しており、現状は大部分が畑地で一部水田となっている。青木遺跡は標高約 53m で、南東に緩やかに傾斜しており、南端は比高約 10m の崖となっている。現状は畑地である。なお、三遺跡とも一部が墓地になっている。

植田前、松田、青木遺跡が立地している白石川左岸の深谷地区には数多くの遺跡が存在している。旧石器時代の遺跡には高野遺跡、間内山遺跡（以上白石市：1976）があるが、特に縄文時代になると白石市周辺の遺跡数の $\frac{1}{4}$ 近くがこの地域に集中し、他の地域と比較にならないほど遺跡密度が高くなっている。（白石市：1976）主な遺跡として荒井遺跡（前・中期）・三本木遺跡（後・晩期）などがある。荒井遺跡は松田遺跡の西方に位置しているが、現在でも付近一帯には広い範囲にわたって多くの遺物が散布しており、当時の人々の生活が広範囲にわたって営まれていたことをうかがい知る事ができる。なお、深谷地区のさらに西方に広がる青麻山の南麓付近には縄文時代早期の遺跡が多くみられ、標高 550m 垂清川大日向川の間の大原野に営まれた白萩 B 遺跡、巻平台地の基部、標高約 470m に営まれた三住出口遺跡、標高約 300m、丘陵間の小さく開けた台地上に営まれた保原平遺跡などが知られており、分布調査または発掘調査によって出土例の少ない押型文の発見なども報告（以上白石市：1976）されている。このように青麻山の南麓を含めると、この地区一帯には縄文時代早期～晩期までの長い時期にわたって遺跡が見られ、狩猟、採集経済が生活基盤であった縄文人にとって、この地域が豊かな環境であった事が想像されるのである。



各遺跡の位置と周辺の遺跡 (白石1/25万)



深谷地区では縄文時代以後、弥生時代から奈良時代にかけては、遺跡数が減少する。平安時代になると、御所内遺跡（太田：1980）、明神脇遺跡（渋谷：1980）、家老内遺跡（佐藤1972）など数多くの遺跡がみられ、再び遺跡数が多くなる。このことはすでに東北自動車道報告書（小川：1980）等で何度も述べられている通りである。

中世には明神脇遺跡（渋谷：1980）等から青磁などの遺物が出土していることから、平坦な台地上にも中世の村落は存在したものと思われる。

この様に、植田前、松田、青木遺跡が立地している深谷地区には長い期間にわたって人々の生活の跡がみられるが、縄文時代、平安時代の遺跡が特に多い事から、主として縄文時代、平安時代を通じての生活の場であったという事ができる。

遺跡地名表

遺跡番号	登録番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	登録番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	02071	植田前遺跡	台地	包含地	奈良・平安	40	02047	杉の下前遺跡	台地	包含地	縄文(後)・奈良・平安
2	02094	松田遺跡	〃	集落地	縄文(早)・弥生・奈良・平安	41	02309	三本木前遺跡	〃	〃	縄文(後)・奈良・平安
3	02306	青木遺跡	〃	包含地	縄文(後)・弥生・奈良・平安	42	02312	高野遺跡	〃	包含地	縄文(早・前・中・後)・奈良・平安
4	02088	大鹿野遺跡	丘陵斜面	〃	縄文(中)・奈良・平安	43	02313	荒井遺跡	〃	包含地	縄文(前・中・後・晩)・弥生・奈良・平安
5	02108	八森山遺跡	〃	〃	縄文	44	02320	御所内遺跡	〃	包含地	縄文(早)・奈良・平安
6	02087	堀切遺跡	〃	〃	縄文(後)	45	02307	下館遺跡	〃	包含地	縄文(後)・奈良・平安・中世
7	02337	上大綱上遺跡	〃	〃	縄文(中)・前・中・後・晩)・弥生	46	02311	道内原遺跡	〃	包含地	奈良・平安
8	02107	大久保遺跡	〃	〃	縄文(後)・弥生	47	02305	地藏堂A遺跡	〃	〃	縄文(中)
9	02085	五輪坂遺跡	〃	〃	縄文(中)・奈良・平安	48	02328	大畑B遺跡	〃	〃	奈良・平安
10	02081	堰下遺跡	〃	〃	縄文(中)・奈良・平安	49	02046	堂田庵寺跡	〃	寺跡	平安
11	02080	沢内遺跡	〃	〃	奈良・平安	50	02050	馬場先遺跡	〃	包含地	縄文(中)
12	02079	崑山遺跡	〃	〃	奈良・平安	51	02380	久保遺跡	丘陵	〃	縄文
13	02077	大黒天遺跡	台地	〃	縄文(前)・奈良・平安	52	02384	田子屋敷遺跡	〃	〃	縄文
14	02024	大仏上遺跡	丘陵斜面	〃	縄文・平安	53	02381	馬場A遺跡	〃	〃	縄文
15	02106	台遺跡	台地	〃	縄文(中)	54	02338	上神明遺跡	台地	〃	縄文・奈良・平安
16	02075	家老内遺跡	〃	集落地	縄文(前・中)・奈良・平安	55	02037	馬場B遺跡	〃	〃	縄文
17	02317	岩見柴遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)	56	02294	鹿ノ館跡	〃	城館	中世
18	02242	大塚遺跡	丘陵中腹	〃	縄文(後)	57	02039	下神明遺跡	〃	包含地	縄文(中)・奈良・平安
19	02198	八宮館跡	丘陵	城館	中世	58	02040	長坂前遺跡	〃	〃	奈良・平安
20	02315	関内山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(前・中・後)・弥生	59	02325	三部山遺跡	〃	〃	縄文
21	02220	北原遺跡	台地	〃	縄文(中)	60	02043	田上遺跡	〃	〃	縄文(前・中)
22	02104	北畑遺跡	〃	〃	縄文	61	02382	鹿野屋敷遺跡	丘陵麓	〃	縄文・奈良・平安
23	02229	高野原遺跡	〃	〃	縄文(中)・奈良・平安	62	02385	陣場A遺跡	丘陵	〃	縄文
24	02068	沢遺跡	〃	〃	奈良・平安	63	02001	郡山横六古墳群	丘陵斜面	横六古墳	古墳(後)・奈良
25	02072	明神脇遺跡	〃	集落地	奈良・平安	64	02375	金倉遺跡	台地	包含地	奈良・平安
26	02067	白山堂A遺跡	〃	包含地	奈良・平安	65	02279	穴前遺跡	丘陵麓	〃	縄文・奈良・平安
27	02314	白畑遺跡	丘陵麓	〃	縄文(早・前・後)・弥生(中)・奈良・平安	66	02003	郡山寺入遺跡	丘陵斜面	横六古墳	古墳(後)・奈良
28	02316	上屋敷遺跡	丘陵中腹	〃	縄文(後・晩)・奈良・平安	67	02004	郡山寺入遺跡	〃	〃	古墳(後)・奈良
29	02308	三本木遺跡	台地	〃	縄文(早・前・後・晩)	68	02147	郡山遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安・中世
30	02310	上高野遺跡	自然堤防	〃	縄文(早・前)・奈良・平安	69	02002	郡山金倉古墳群	丘陵斜面	横六古墳	古墳(後)・奈良
31	02386	上屋敷C遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早)	70	02201	陣場山館跡	台地	城館	中世・近世
32	02100	六角遺跡	台地	〃	奈良・平安	71	02328	大畑B遺跡	〃	〃	奈良・平安
33	02069	引檜遺跡	〃	〃	縄文(中・晩)	72	02263	弥陀内遺跡	〃	〃	弥生・奈良・平安
34	02066	馬越遺跡	〃	〃	奈良・平安	73	02262	大畑遺跡	〃	〃	弥生・奈良・平安
35	02374	白山堂B遺跡	丘陵	〃	縄文	74	02121	本郷遺跡	〃	〃	奈良・平安
36	02097	湯ノ口遺跡	台地	〃	縄文(前・後)・奈良・平安	75	02278	七屋敷遺跡	丘陵斜面	〃	奈良・平安
37	02102	齋毛遺跡	〃	〃	縄文(早)・奈良・平安	76	02146	鹿島山遺跡	〃	包含地	縄文・奈良・平安・中世
38	02096	下見前遺跡	〃	〃	縄文(前)	77	02349	雨ヶ作	丘陵	包含地	奈良・平安
39	02065	前原北遺跡	〃	〃	縄文(中)	78	02148	上蟹沢古墳	丘陵中腹	円墳	古墳(後)

# I. うえ 植 だ 田 まえ 前 遺 跡

# 目 次

I. 調査の方法と経過	9
II. 出土遺物	9
III. ま と め	10

## 調査要項

遺跡所在地：宮城県白石市深谷字植田前

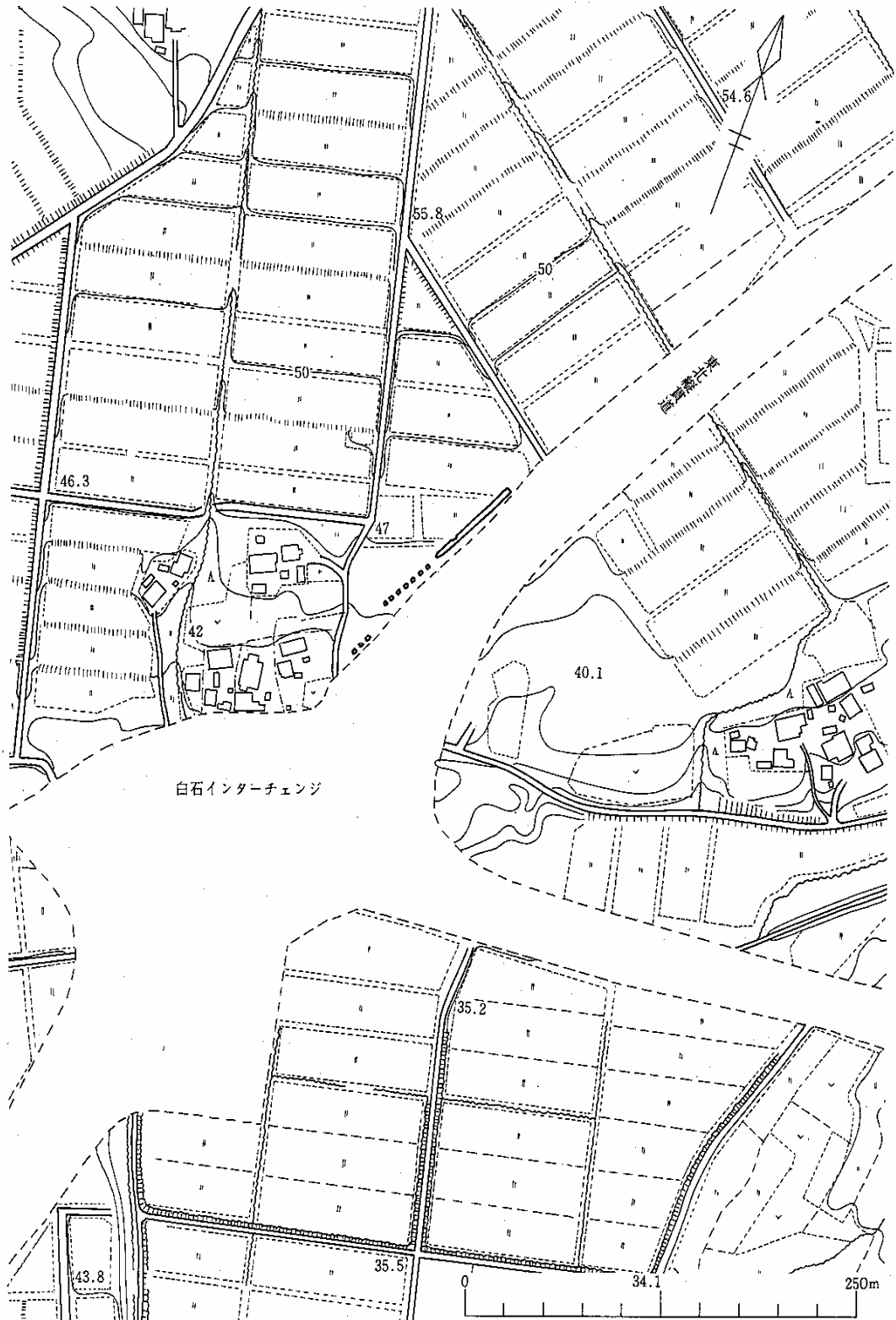
遺跡記号：UD（宮城県遺跡地名表登載番号：02071）

調査期間：昭和55年4月6日～4月9日

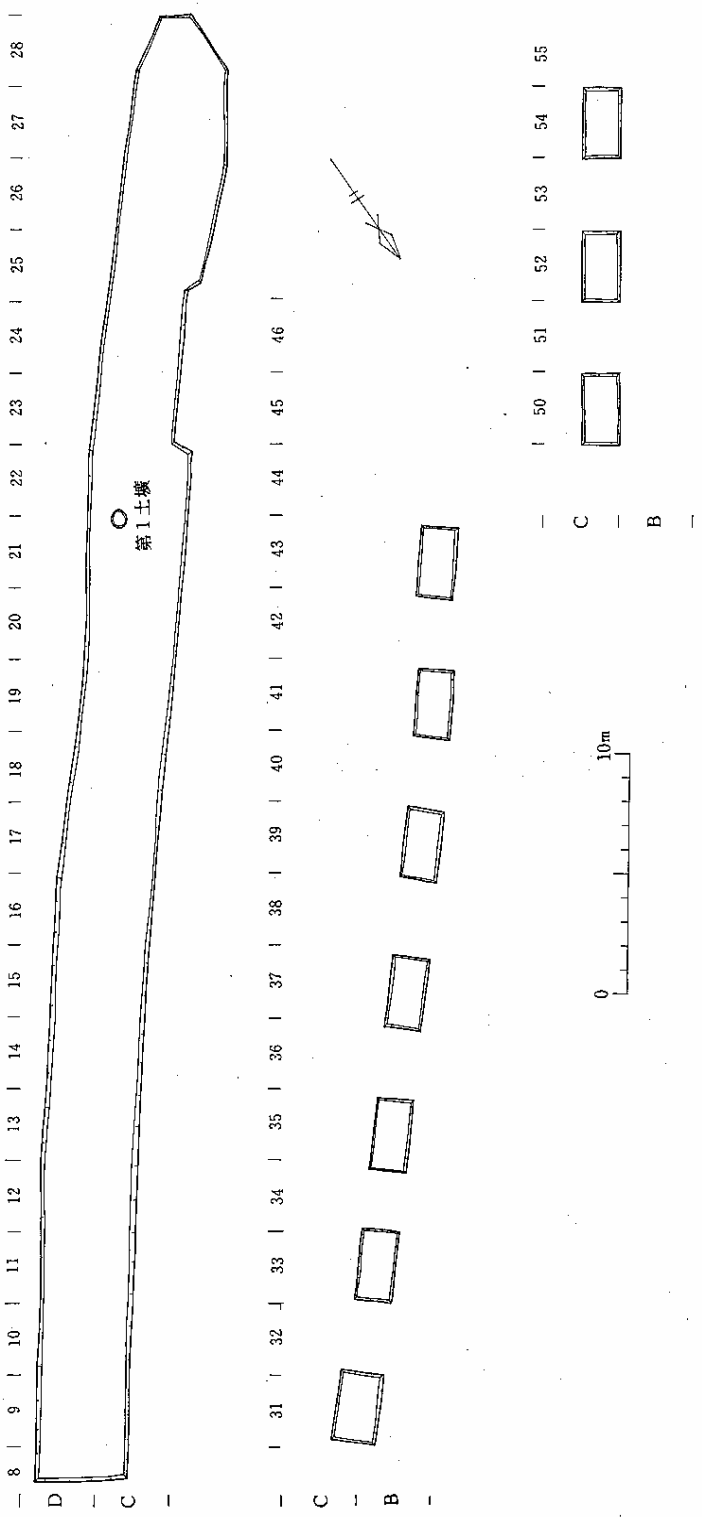
調査面積：約450 m<sup>2</sup>

発掘面積：約304 m<sup>2</sup>

調査員：真山悟、土岐山武、渋谷正三、菊地逸夫、古川一明



第1図 調査区と周辺の地形



第2図 遺構配置図

## I. 調査の方法と経過

調査は水道管理設工事が行なわれる約 450 m<sup>2</sup>を対象として、4月6日から行なわれた。調査は遺構、遺物の有無、およびその性格の把握を目的として行なわれた。地区設定にあたっては基準線を任意 (N-35° - E) に設定し、それを基にして、対象区全体に 3 × 3mを1とするグリッドを設定した。なお、グリッド名は東西をアルファベット南北をアラビア数字で示した。

調査は北側の調査区から行なわれた。その結果、調査区内は地山面まですでに水田を畑地にする際攪乱されており、遺構は存在せず、遺物も攪乱層中に数十片含まれていただけである。

なお、基本的な層位は次の通りである。

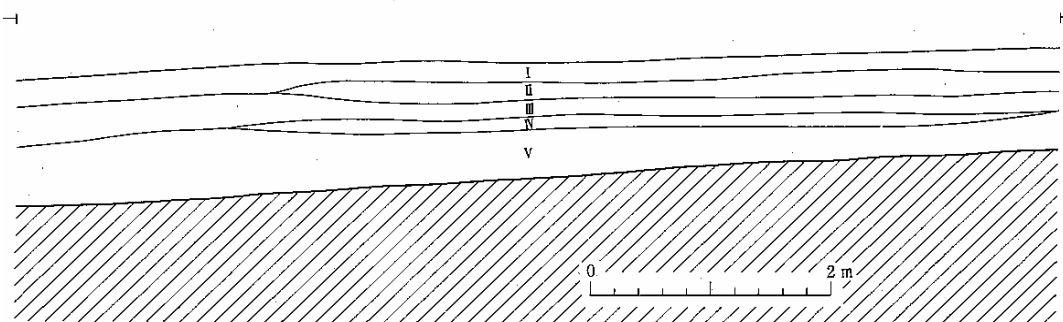
第 1・2層：暗褐色土層（厚さ 20～40cm）耕作土である。

第 3層：黒褐色土層（厚さ 10～30cm）水田耕作土である。

第 4層：褐色土層（厚さ 0～10cm）水田の床土である。酸化鉄分を多く含んでいる。

第 5層：暗褐色土層（厚さ 30～60cm）しまりがある。

調査面積は 344 m<sup>2</sup>で、調査は4月9日に終了した。



層位	土色	土性	備考
I	1 暗褐色 (10Y R 3/4)	シルト	耕作土
	2 暗褐色 (10Y R 3/4)	シルト	耕作土
	3 黒褐色 (10Y R 3/4)	シルト	酸化鉄分を含む
	4 褐色 (10Y R 3/4)	シルト	酸化鉄分を含む
	5 暗褐色 (10Y R 3/4)	シルト	しまっている

第3図 基本層位

## II. 出土遺物

堆積土層中から数十片の土師器と十片近くの須恵器、赤焼土器とが出土している。すべて小破片であり内外面とも摩滅が激しい。土師には坏と甕がある。ロクロを使用しており、坏は内面黒色処理が施されている。須恵器には甕がある。器面調整には格子タタキ目、平行タタキ目とがある。

### Ⅲ. ま と め

1. 本遺跡は白石川やその支流によって形成された河岸段丘上に位置している。
2. 今回の調査では遺構は発見されず、遺物も土師器、須恵器、赤焼土器がわずかに出土した  
だけである。

図版 1

遺跡遠景 (北西方面から)



遺跡近景 (発掘前)



調査終了後



(いずれも北東方向から)



## Ⅱ. <sup>まつ</sup>松 <sup>だ</sup>田 遺 跡

# 目 次

I 調査の方法と経過	16
II 発見された遺構と遺物	20
1. 竪穴住居跡とその出土遺物	20
2. 竪穴状遺構とその出土遺物	35
3. 表土および堆積層出土遺物	49
III 遺物と遺構に関する考察と問題点	68
1. 遺物	68
(1) 遺構からの出土遺物	68
(2) 表土および堆積層からの出土遺物	74
2. 遺構	75
IV まとめ	76

## 調査要項

遺跡所在地：宮城県白石市福岡深谷字松田

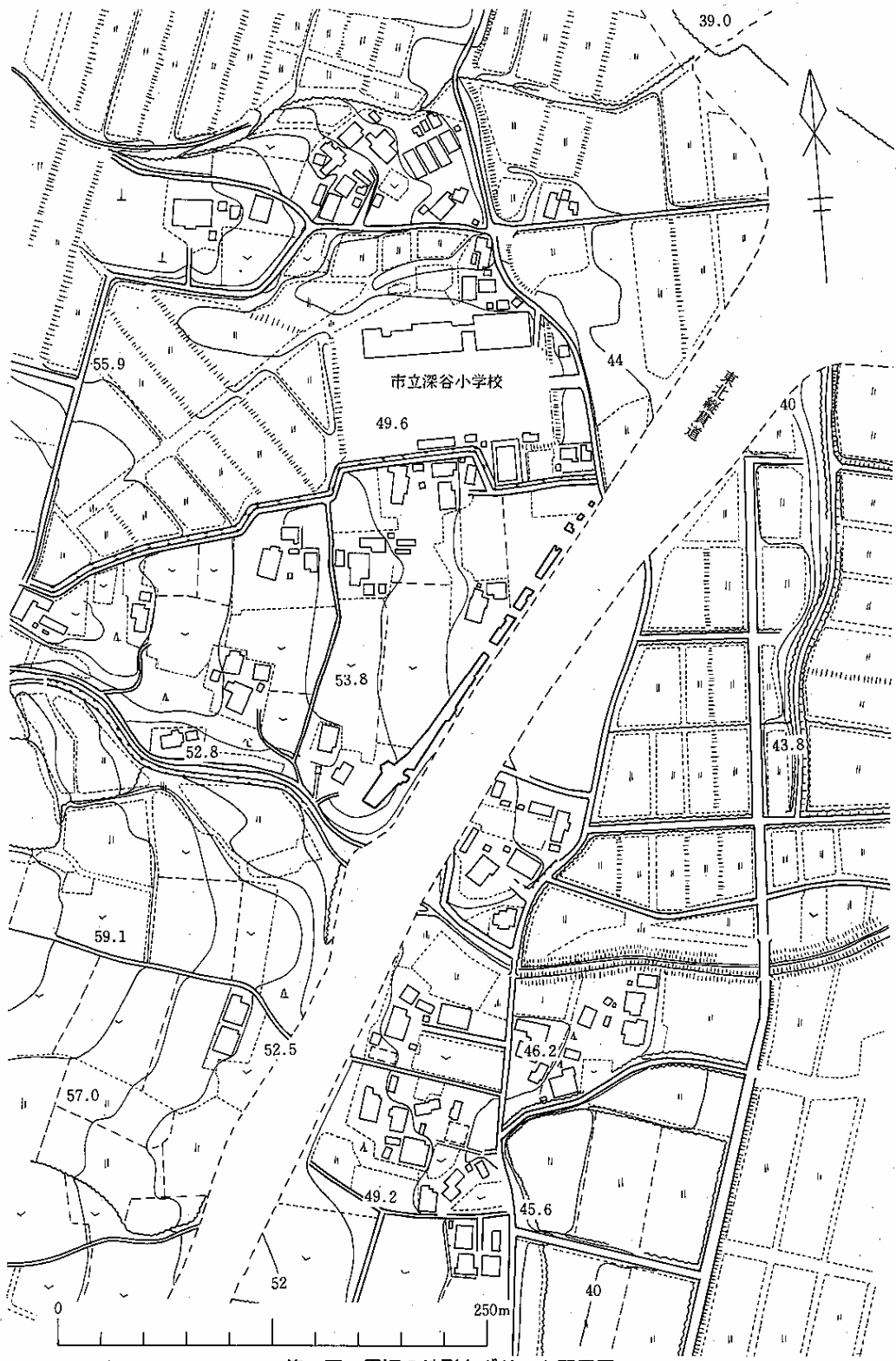
遺跡記号：MD（宮城県遺跡地名表登載番号：02094）

調査期間：昭和56年4月6日～6月3日

調査面積：1,210 m<sup>2</sup>

発掘面積：1,118 m<sup>2</sup>

調査員：狩野正昭 土岐山武 澁谷正三 菊地逸夫 古川一明



第1図 周辺の地形とグリッド配置図

## I. 調査の方法と経過

調査は水道管理設工事が行なわれる約1,210 m<sup>2</sup>を対象として、4月6日から実施した。調査は遺構、遺物の有無、およびその性格の把握を目的として行なわれた。地区設定にあたっては基準線を任意に(N-32° -W)設定し、それを基にして、対象区全体に3×3mを1とするグリッドを設定した。なお、グリッド名は東西をアルファベット、南北をアラビア数字で示した。

調査は北側の調査区から実施した。1～38区では表土除去後、第Ia層下を掘り進めたが、遺物は7-K区第Ib層中から須恵器が1片出土しただけであった。遺構としては、6・7-K区で70×60cmの楕円形の土壌が、24・25～I～K区で東西に延びる幅約2mの溝が検出されたが、これらはいずれも断面観察の結果、掘り込み面が表土中であり、遺物も全く出土しなかった。いずれも近世以降のものと思われる。

39～55区では表土下20～25cmですぐ第III層となり、堆積土中には全く遺物が含まれていなかった。遺構としては39～52区にかけて表土上面から掘り込まれている1.0×1.2m程の楕円形の土壌が10基近くと、長径30～60cmの楕円形および不定形のピットが多数検出された。ピットには柱痕の存在するものが2～3存在したが、位置関係に規則性はみられなかった。

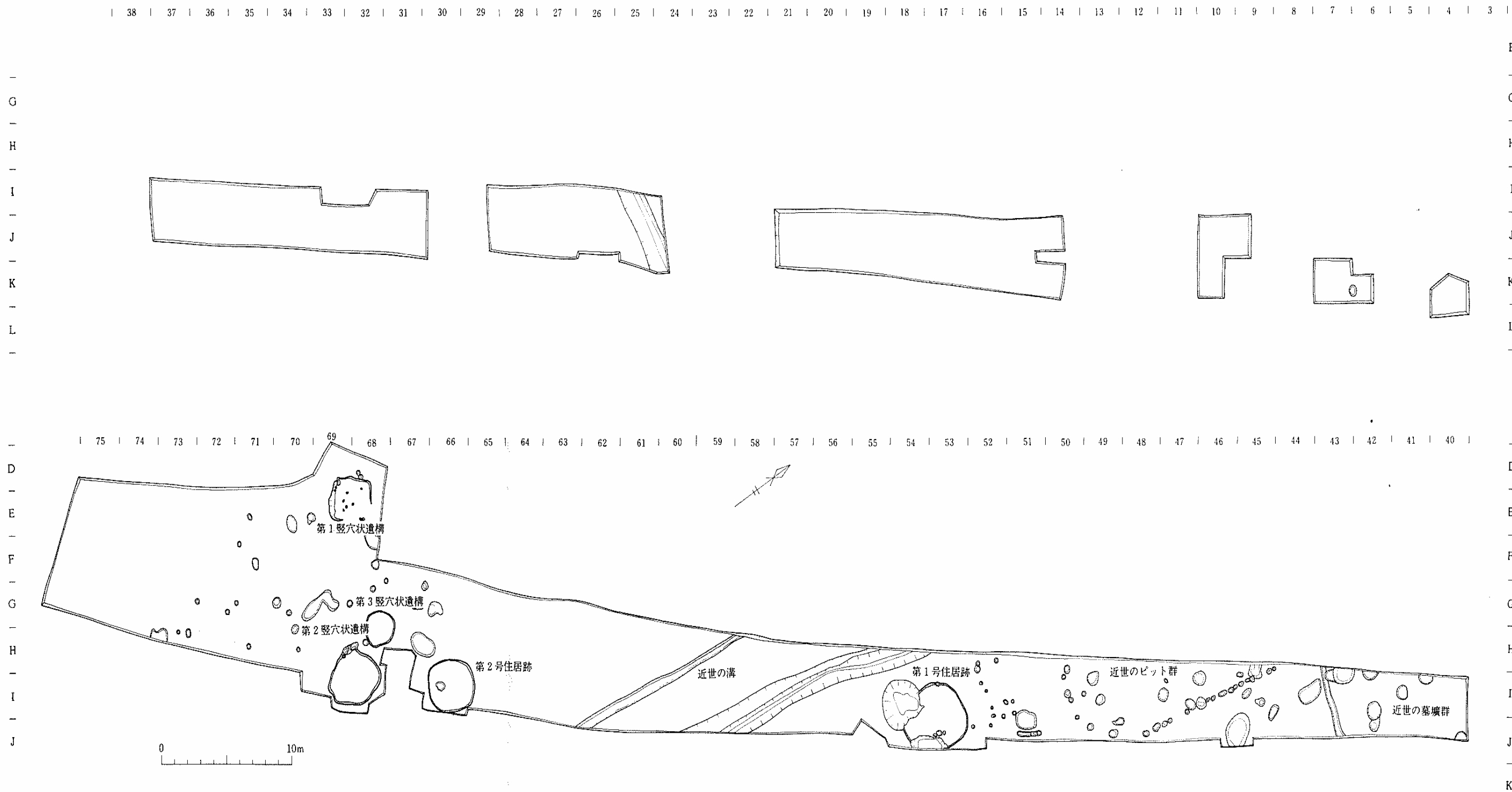
これらはいずれも近世以降のものと思われる。なお、土壌については底面近くから人骨が出土しているものがあり、他の土壌もほぼ形態が類似していることから、これらは墓塚と思われる。

表土除去作業をさらに南側にむかって進めていくと、53、54-I・J区の第III層上面で一辺が約4mの方形の落ち込みが確認され、精査の結果住居跡である事がわかり、これを第1号住居跡とした。他の遺構としては55～62区にほぼ南北に平行に走る大小二本の溝が検出されたが、断面観察の結果、表土上面から掘り込まれており、近世以降の溝であることがわかった。

この溝を境に南側にいくにしたがって、表土から第III層上面までの深さがしだいに深くなり67区で一番深く約1mとなる。いままでほとんど出土しなかった遺物も61区から南側に向け出土数が多くなり、特に67～69-F～H区からは比較的多く出土した。遺物が出土した範囲は61～73区までの南北幅約40mの範囲に限られており、この範囲内の第III層上面で大小4つの落ち込みが確認された。落ち込みは精査の結果、住居跡と竪穴状の遺構である事がわかり、それぞれ第2号住居跡、第1～3竪穴状遺構とした。また、以上の遺構の周辺には長径0.2～1.2mのピットが多数みられるが、位置関係、形状に規則性がみられず、埋土も第II層の黒褐色土であることから、新しい時期の落ち込みであることがわかった。

なお、基本的な層位をまとめると次の様になる。

第Ia、b層：黒褐色土層で層の厚さは20～50cmである。表土および耕作土である。調査区



第2図 遺構配置図

全体に広がっており、層中からは縄文土器、須恵器、石器とが出土している。

第 II 層：黒褐色土層で厚さは0～20cmである。火山灰層でいわゆる黒ボク土である。特に63区から南側にかけて堆積している。部分的に攪乱を受けており、攪乱部から古銭、中世陶器が、層中からは縄文土器と石器とが出土している。

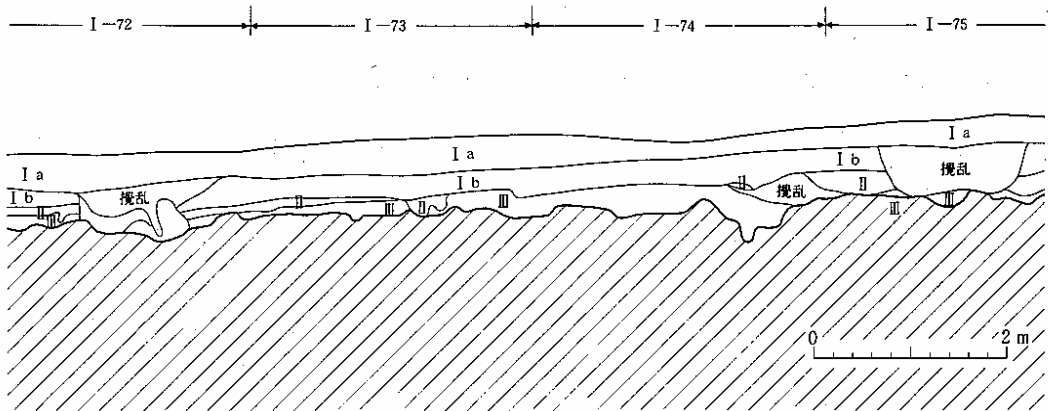
第 III 層：褐色土層で厚さは10～30cmである。調査区全体にみられ、この層上面から縄文土器と石器とが多く出土した。部分的に攪乱を受けている。遺構はすべてこの層上面で確認された。

第 IV 層：ローム層である。

調査面積は約1,118 m<sup>2</sup>で、調査は6月3日に終了した。

発見された遺構には竪穴住居跡と竪穴状遺構とがある。遺物には各遺構から出土した縄文土器、石器、遺構以外から出土した縄文土器、石器および若干の須恵器、中世陶器、古銭等がある。出土遺物の中で最も多いのは縄文土器で、約1,200点を数える。しかしすべて小破片であり、全体の器形の判明する土器はない。なお、記述にあたっては、磨滅が著しいため、文様構成が不明なものを除いた約700点を対象に行ない、他のものは破片集計表として巻末に一括した。また、口縁部形態の判明する土器については主として器形、口唇部形態、刻目の有無について、体部については文様を中心として記述を行なった。

本遺跡からは押型文が多数出土しているが、押型文の原体名称については研究者によってさまざまな使い方がされているため、本報告書では第41図のように名称を統一して使用した。



層位	土色	土性	備考
I	a 黒褐色 (10 Y R 5/6)	シルト	表土である。
	b 黒褐色 (5 Y R 3/1)	シルト	遺物を含んでいる。
II	黒褐色 (10 Y R 5/6)	シルト	遺物を含んでいる。
III	褐色 (10 Y R 5/6)	シルト	遺構確認面である。
IV	ローム	シルト	

第3図 基本層位

## II. 発見された遺構と遺物

### 1. 竪穴住居跡とその出土遺物

#### 第1号住居跡 (第4図)

〔遺構の確認〕 I・J-53・54区、基本層位第Ⅲ層上面で確認された。

〔平面形・規模・重複〕 住居跡の東南隅と北壁の一部が風倒木により失なわれているが、残存する壁の状況から平面形は隅丸の長方形と思われる。長軸約4.8m、短軸約4.4mで、長軸の方向はほぼ磁北と一致する。

〔堆積土〕 3層認められた。第1層は暗褐色土で住居中央部にみられ、床面近くまで厚く堆積している。炭化物を含んでおり、やややわらかい。第2層は褐色土で住居壁近くから中央部にかけて堆積している。しまりがあり堅い。第3層は黄褐色土で住居壁崩壊土を含み、住居壁沿いに堆積している。非常にしまりがあり堅い。いずれの堆積層も将棋倒し状を呈している。

遺物は第1層から縄文土器が約100点、石器17点、第2層から縄文土器が約40点、石器が2点、第3層から縄文土器が約10点、床面から縄文土器が約10点、石器が1点出土している。遺物はほとんどが第1層からの出土であり、石皿3点、凹石3点が住居東側中央付近に集中してみられたが、縄文土器、石器は、住居内に散在していた。いずれも堆積土の傾斜にそって出土しており、このことは第2、3層出土遺物についても同様である。床面出土遺物も床面に散在していた。

〔壁〕 東南隅と北壁の一部が失なわれている。北壁と残存している東西壁は比較的急に立ち上がる。残存壁高は最も保存のよい北壁で20～25cmである。

〔床面〕 地山を床面としており、床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕 西壁と重複して1個のピットが検出されたが、これは堆積土上面から掘り込まれたものであり、本遺構に伴うピットは検出されなかった。

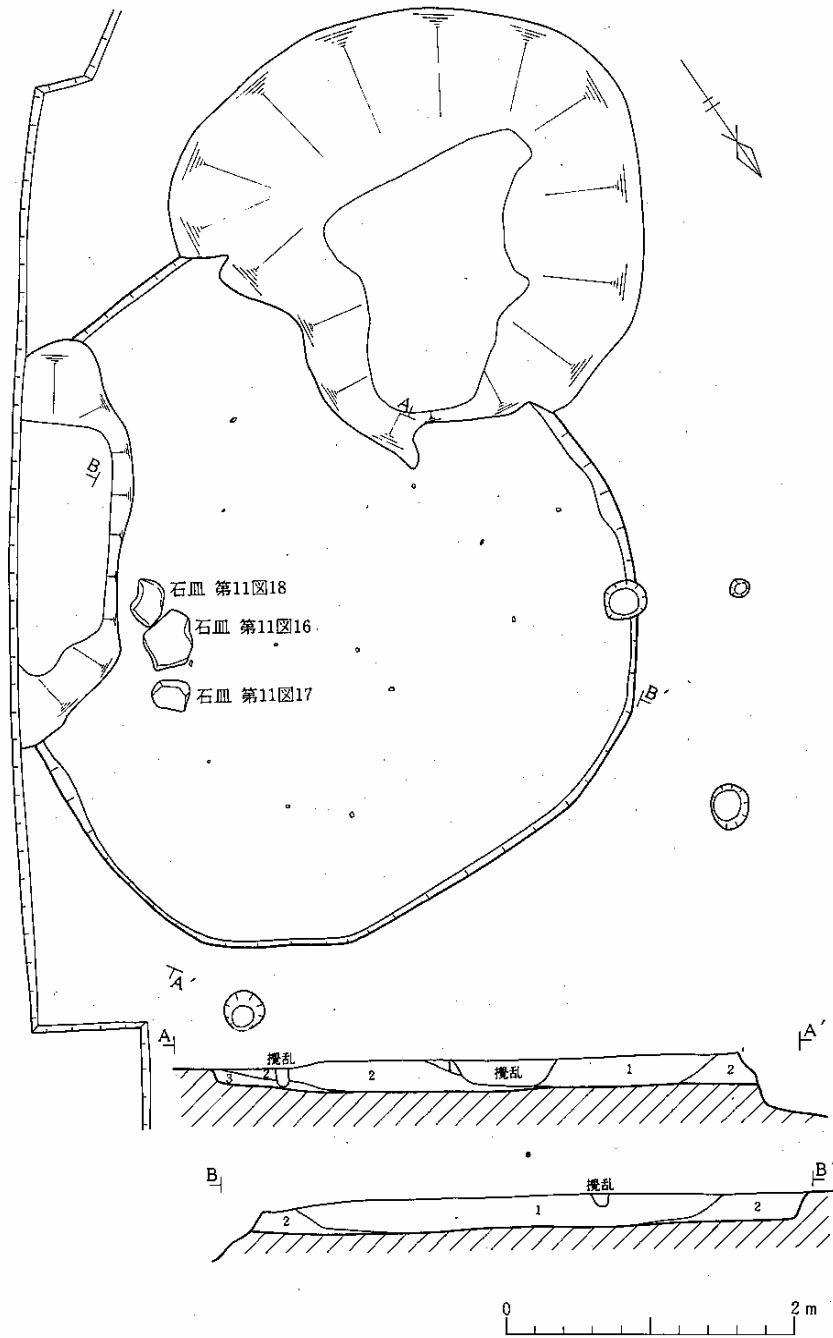
〔炉〕 認められない。

〔出土遺物〕

(床面出土遺物)

#### 縄文土器 (第5図1～9)

すべて体部破片である。1～2は縄文が施文されている土器である。1は縄文だけが、2は縄文施文後沈線が加えられている。いずれも横位回転による斜行縄文が施文されており、原体はLRである。2の沈線は幅約3mmでやや太く、横位に2条以上平行に施文されており、断面はU字形である。1、2は器厚約6mm、胎土は2だけがわずかに細礫を含んでいる。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。2の内面には縦方向のミガキがみられる。



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR 2/5)	シルト	炭化物を含む、やわらかい
2	褐色 (10YR 5/5)	シルト	暗褐色土を斑点状に含む、しまりがある
3	黄褐色 (10YR 6/5)	シルト	しまりがあり、堅い

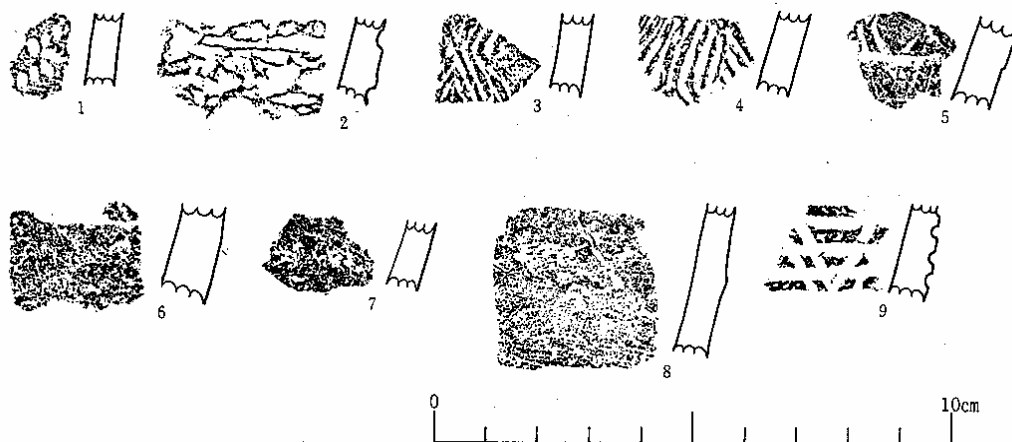
第4図 第1号住居跡



3～5は押型文が施文されている土器である。3～4の施文原体は重層菱形文、5は不明である。5には原体の末端部がみられる。すべて横位回転によるものである。器厚は約6mmで、胎土には細礫をほとんど含まない。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。4の内面には炭化物が付着している。

5～8は底部近くの無文部の土器である。外面に削りの際生じた擦痕がみられる。外面にわずかに凹凸がある。器厚は6が約8mm、7・8が6～7mmで、胎土は8だけがわずかに細礫を含んでいる。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色である。6の内面には炭化物が付着している。

9は沈線だけが施文されている土器である。沈線は幅2～3mmでやや太く、横位に4条以上平行施文されており、さらにこの沈線に斜めに交わる重層山形状の沈線が施文されている。断面はU字形である。器厚は約6mm、胎土はわずかに細礫を含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色である。1～9とも繊維を含んでいる。



第5図 第1号住居跡床面出土遺物(1)

### 石器 (第6図1～3)

#### 不定形石器

1点出土している。b面下縁に片面加工による刃部が作り出されている。

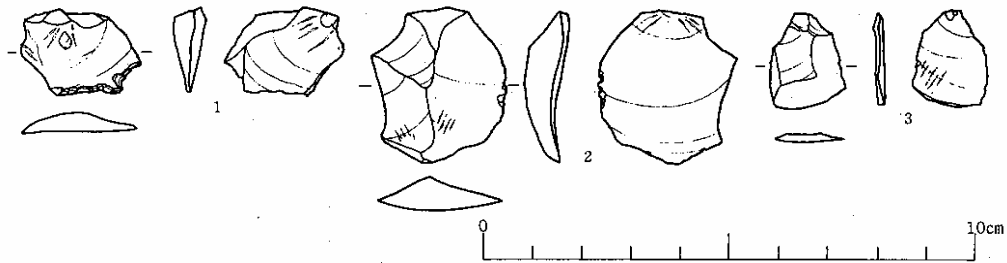
#### 剥片 (2・3)

2点出土している。2はb面左縁に微細剥離痕がみられる。

(堆積土出土遺物)

### 縄文土器 (10～94)

10～26は縄文が施文されている土器である。すべて体部破片である。10～23は縄文だけが施

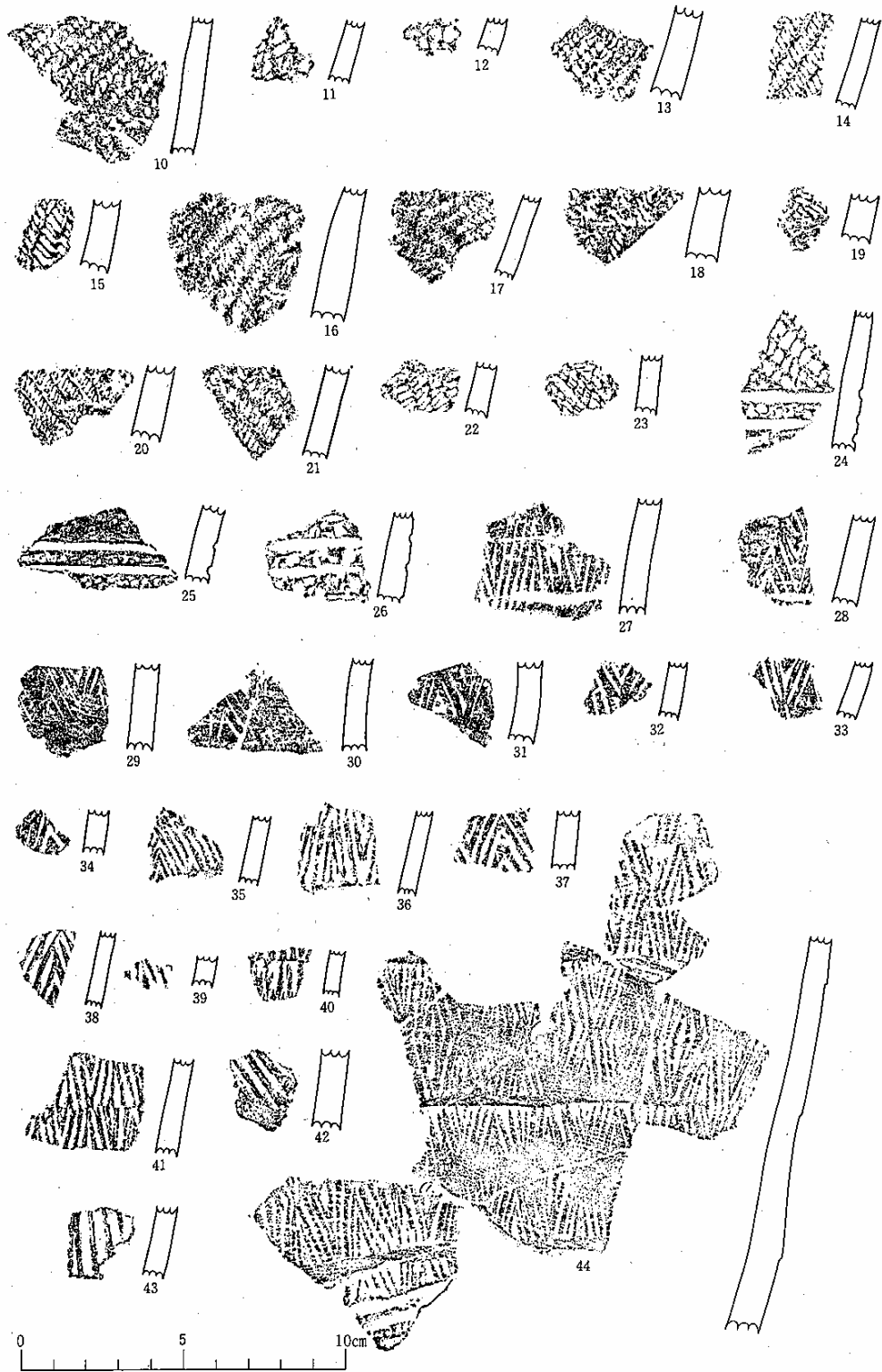


番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
1	不定形石器	床面	20	25	7	0.5	珪質頁岩
2	剝片	床面	35	23	7	1.3	珪質頁岩
3	剝片	床面	23	16	2	0.2	珪質頁岩

第6図 第1号住居跡床面出土遺物(2)

文されている。いずれも横位回転によるものである。11~20、22~23 は斜行縄文で、原体はLR、RL、RLR、10、21 は羽状縄文で原体はLR→RLである。14~23 は0段多条のものである。24~26 は縄文施文後沈線が加えられている。縄文は斜行縄文で、原体はLR、RLである。沈線は幅2~3mm でやや太く、横位に2~4条以上平行施文されており、断面はU字形である。10~26 は器厚6~11mm、胎土は20 がわずかに細礫を含むが、他はほとんど含んでいない。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色・橙色である。

27~82 は押型文が施文されている土器である。46~49、72~75 が口縁部破片で他は体部破片である。27~70 は押型文だけが施文されている。施文原体は27~43 が重層山形文、45 が重層菱形文、46~59 が平行線状文、60 が平行線状文内蔵重層菱形文である。44、61~70 は同一器面に2種の原体が施文されている。これらをさらに見てみると、27~43 はすべて横位回転施文である。原体の掘り込み部と残部の幅に違いがみられるものがあり、27~31 は掘り込み部の幅が、42・43 は残部の幅が広がっている。他は大きな違いがみられない。小破片のため原体が2段にわたって施文されているのは4点だけであるが、いずれも密接して施文されている。なお、27 は原体推定長約4.2cm、38 は約4.1cm である。45 も横位回転施文である。菱形の区画にはゆがみがみられ、内部には相対する一組の辺に平行な直線が4~5本充填されている。46~59 の平行線状文施文のものには口縁部破片(46~49) がみられる。器形は内弯または外弯ぎみに外傾する。口唇部形態は外削ぎ状のもの(46、48、49) と内削ぎ状のもの(47) とがある。口唇部には、刻目が比較的密に施文され小波状を呈している。平行線状文は口縁直下に施文されている。口縁部、体部破片とも横位回転施文であるが、46、59 はさらにこの上に一部重ねて斜位回転施文が行なわれている。60 の平行線内蔵重層菱形文は本遺跡から1点だけ出土している。菱形の区画はX状に交差させた掘り込み部を連続させて区画したのではなく、直接菱形を掘り込んで作り出している。内蔵された平行線状文は上下に存在した可能性もあるが、下部が欠損しているので不明である。菱形の区画にはゆがみがみられず整っている。なお、菱形区画外側に

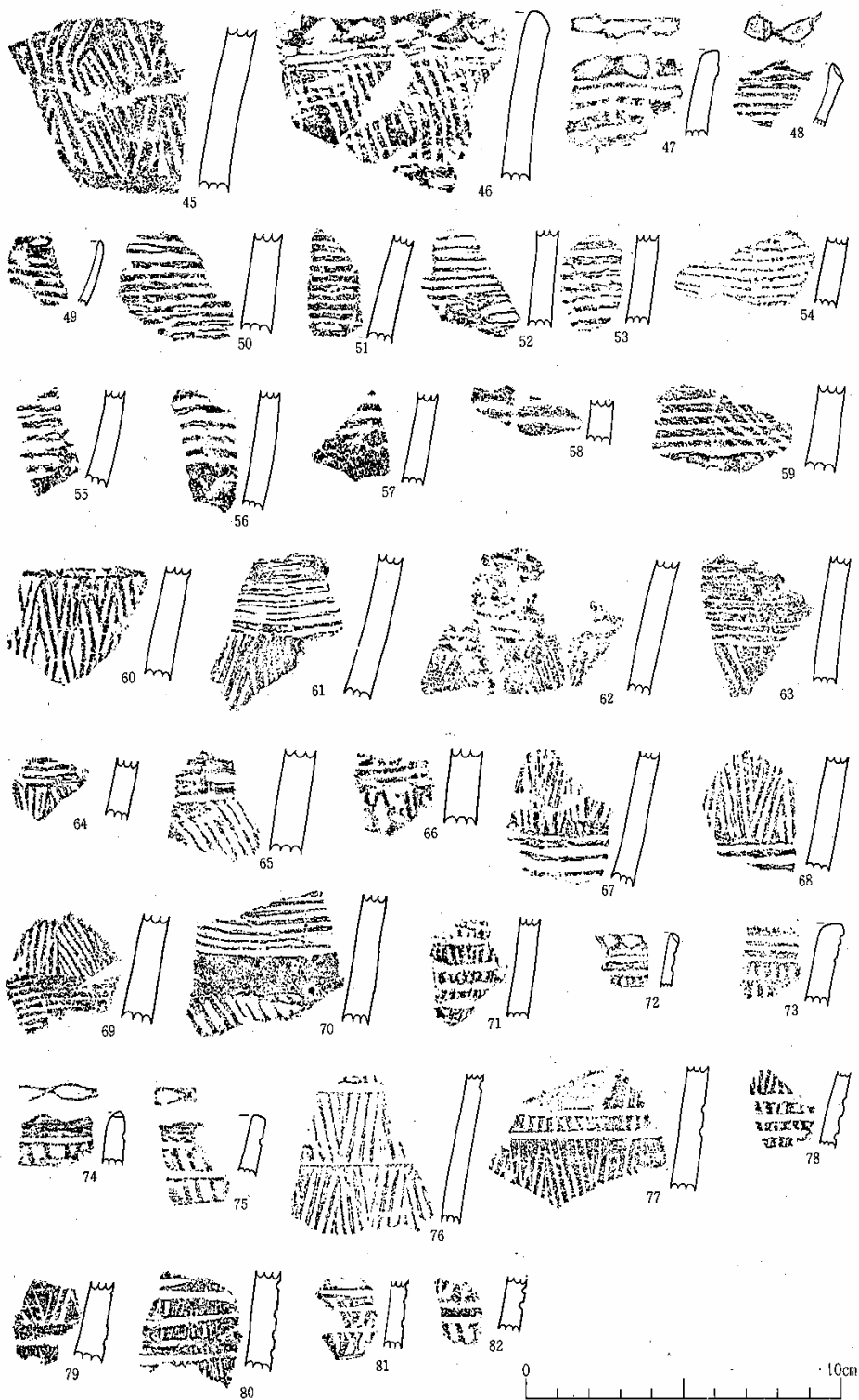


第7图 第1号住居跡堆積土出土遺物(1)

施文されているVが4つみられ、これに繰り返しがみられないことから菱形の区画が原体に4以上掘り込まれていたものと思われる。(もし、4だとすると直径は約1.2cmになる。) 原体の長さは約4.2cmである。61~70は重層山形文施文後、平行線状文がいずれも横位回転施文されている。平行線状文は口縁部に近い方に施文されているものが多いが、器厚や上下の弯曲の違いから上下関係を調べてみると、平行線状文施文部位が重層山形文よりも下位に施文されたと考えられるものも存在している。44は重層菱形文施文後平行線状文がいずれも横位回転施文されている。本遺跡出土押型文施文の土器で最も大きな体部破片である。四段にわたって施文されている。菱形の区画は整っており、内部は区画に合わせて菱形が掘り込まれている。これも、器厚、上下の弯曲の違いから上下関係を調べてみると、平行線状文は下位の四段目に施文されていることになる。なお、44は菱形区画の繰り返しが2つごとにみられる。このことから原体は直径約1.2cm、長さ約4.2cmと思われる。71~82は押型文施文後沈線が加えられている。72~75が口縁部破片で、他はすべて体部破片である。72~75は器形はほぼ外傾する。口唇部形態は尖頭状のもの(74)、角頭状のもの(75)、内削ぎ状のもの(73)とがあり、73を除き口唇部には刻目が比較的密に施文され小波状を呈している。口縁部、体部破片とも、重層山形文または重層菱形文を横位回転施文後、幅2~3mmのやや太い沈線が横位に2~5条以上平行施文されている。断面はU字形で27~82は器厚5~9mmで、胎土には細礫をほとんど含まず、焼成は良好である。色調は橙色・にぶい黄褐色である。

83~85、96は底部および底部近くの無文部の土器である。96は本遺跡出土ただ一つの底部破片である。砲弾状の尖底で尖底部がわずかに膨らんでいる。83~85、96は外面に削りの際生じた擦痕がみられる。外面にわずかに凹凸があり、内面は丁寧にみがかれている。96は尖底部厚が約13mm、器厚は約5mm、83~85は器厚7~10mmである。胎土は83がわずかに細礫を含んでいる。焼成は良好で色調はにぶい黄褐色である。

86~95は沈線だけが施文されている土器である。86、87が口縁部破片で、他はすべて体部破片である。86、87は器形はほぼ外反し、口唇部形態は尖頭状で、口唇部に刻目を有し、小波状縁を呈している。沈線は86、87、91が幅2~3mmでやや太く、横位に1~4条以上平行施文されている。88~90は幅1mm前後でやや細く、横位に4~15条平行施文されている。88は平行沈線下にさらに斜線を交差させた格子状の沈線が施文されている。93~95は幅2~4mmでやや太く、斜めに重層山形状の沈線を施文した後、横位に1~2条平行施文している。断面は88~90がやや鋭くなっているが、他はU字形である。器厚は6~8mmで、胎土には93だけがわずかに細礫を含んでいるが、他はほとんど含んでいない。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色・赤褐色である。なお、本遺構出土土器はすべて繊維を含んでいる。



第8图 第1号住居跡堆積土出土遺物(2)



第9図 第1号住居跡堆積土出土遺物(3)

### 石器 (第10、11図4～22)

石鏃・筒状石器・不定形石器などの剥片石器、およびその素材となる石核・剥石、石皿・凹石・磨石などの礫石器とがある。

#### 石鏃(4)

1点出土している。先端と基部の一部を欠損している。基部にえぐりを入れた凹基のものである。基部のえぐりは比較的深い。尖頭部側縁は膨らんでおり、左右ほぼ対象である。

#### 筒状石器(5・6)

2点出土している。ほぼ左右対象の細長い石器で最大幅が刃部にある。いずれも刃部片面加工である。5は最大長約5cm、最大幅約4.5cm、6は最大長約5.1cm、最大幅約4.5cmで、いずれも大きめのものである。6は撥形、5は長方形に近い形を呈する。いずれも刃部は弧状を呈し、刃角は5が約70°、6が約80°である。側縁は5がa面右縁が自然面で、左縁は5、6とも調整剥離が施されている。断面はいずれも蒲鉾形である。

#### 不定形石器(7～13)

7点出土している。7はa面左縁に両面加工による刃部を有しているが、他はすべて片面加工により刃部が作り出されている。8～10はa面に、11～13はb面に施されている。7～10、13の側縁の一部に自然面がみられる。

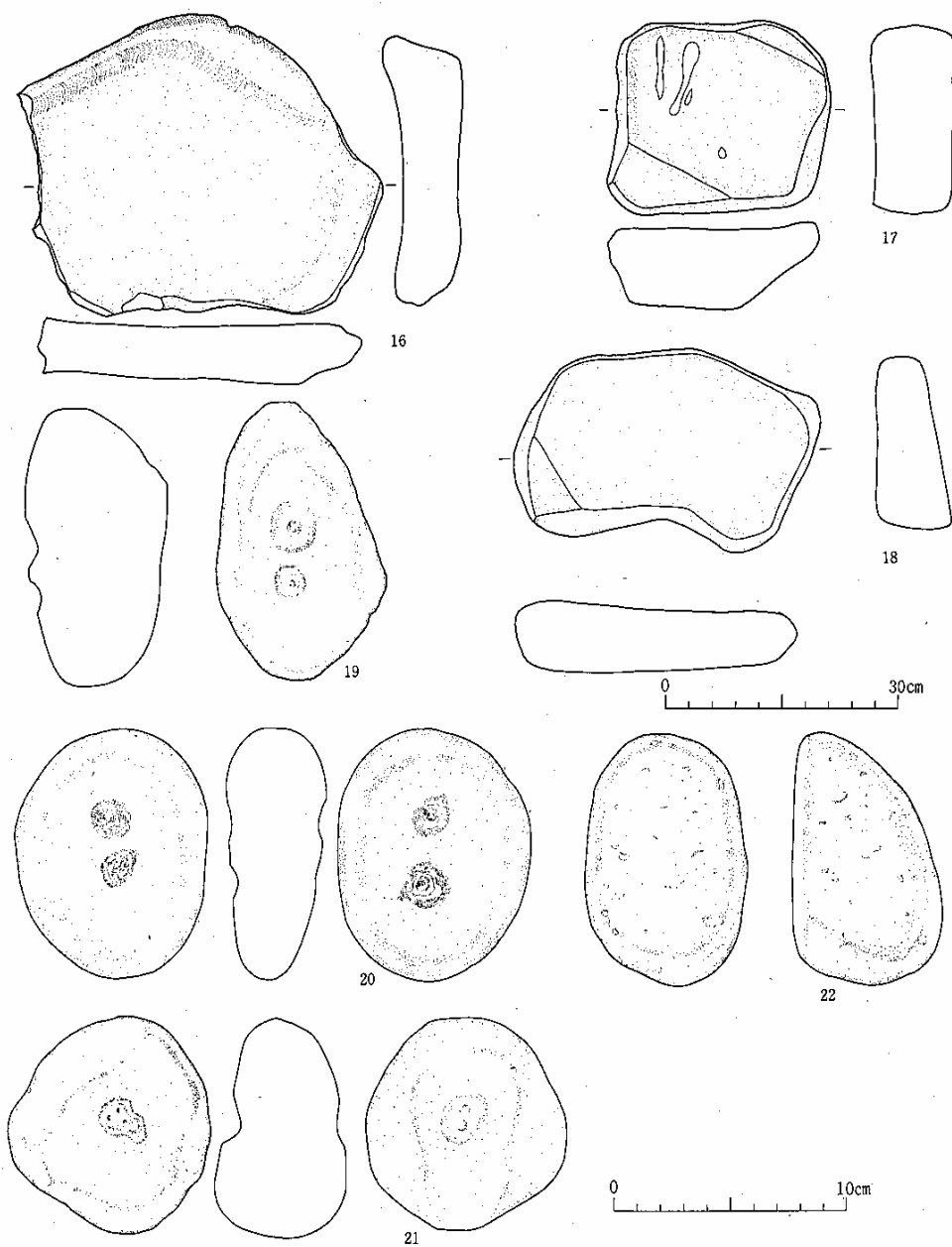
#### 石核(14)

7点出土している。a面に数ヶ所の剥離面がみられる。打撃はa面右斜め上方から行なわれ



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
4	石	鎌	33	22	5	2.1	珉質頁岩
5	腕状石器	1層	50	45	14	43.4	珉質頁岩
6	腕状石器	2層	51	45	15	34.2	珉質頁岩
7	不定形石器	1層	40	22	7	6.6	珉質頁岩
8	不定形石器	1層	46	45	5	7.8	石英安山岩質凝灰岩(珉化)
9	不定形石器	2層	37	45	10	9.6	珉質頁岩
10	不定形石器	1層	23	20	5	2.4	珉質頁岩
11	不定形石器	1層	46	25	9	9.1	珉質頁岩
12	不定形石器	1層	28	29	5	3.8	珉質頁岩
13	不定形石器	1層	28	42	9	7.6	珉質頁岩
14	石核	1層	42	33	25	35.1	珉質頁岩
15	剝片	1層	60	34	16	17.3	珉質頁岩

第10図 第1号住居跡堆積土出土遺物(4)



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
16	石皿	1層	375	474	102	19500	輝石安山岩
17	石皿	1層	240	279	99	10500	輝石安山岩
18	石皿	1層	245	402	98	13000	輝石安山岩
19	凹石	1層	116	73	61	490	石英安山岩
20	凹石	1層	105	83	43	520	石英内縁岩
21	凹石	1層	91	86	56	480	石英安山岩
22	磨石	1層	106	69	65	520	安山岩

第11図 第1号住居跡堆積土出土遺物(5)



た後、90度の範囲内で打面を転位し行なわれている。

〔剥片〕 (15)

73点の剥片が出土した。このうち、周縁の一部に微細剥離痕のあるものは20点である。

〔石皿〕 (16～18)

3点出土している。16だけが一部欠損している。16、18は片面だけに磨面を有し、17は両面に磨面を有している。表面が偏平な不定形の河原石で、磨面以外は自然面のままである。磨面はいずれも凹んでいるが、わずかで無縁のものである。17は3～4箇所溝状の傷がみられる。

〔凹石〕 (19～21)

3点出土している。19は不定形、20は楕円形、21はほぼ円形の礫で、20と21は上下両面に、19は上面に、それぞれ1～2個のくぼみがみられる。くぼみはいずれも直径約2cm程の円または楕円形のものであるが、21をのぞいてあまり深くはない。なお、19には礫の一端に離打痕が認められ、敲石としても使用されたものと思われる。

〔磨石〕 (22)

一面だけに磨面がみられる。他の面はすべて自然面のままである。

## 第2号住居跡 (第12図)

〔遺構の確認〕 H・I-65、66区において基本層位第Ⅲ層上面で確認された。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈する規模は一辺約3.5mである。南北長の方向はN-20°-Wである。

〔堆積土〕 2層認められた。第1層は住居壁近くから中央部にかけて、第2層は住居壁沿いから中央部にかけて堆積している。いずれも褐色土であり堅くしまっている。堆積層は凸レンズ状に堆積している。

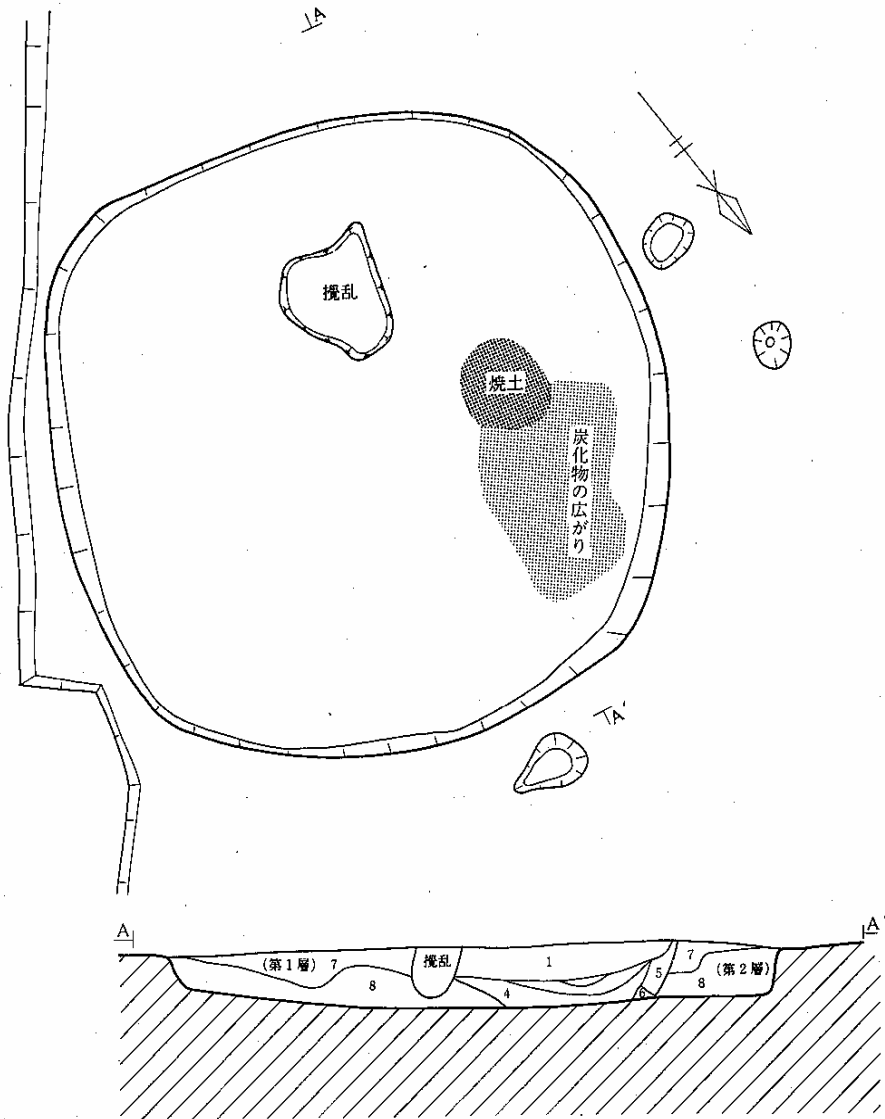
遺物は第1層から縄文土器約20点、石器3点、第2層から縄文土器30片、石器3点、床面から縄文土器が約10点出土している。遺物はいずれも層中に散在していた。

〔壁〕 4辺とも残存している。いずれの壁も比較的急に立ち上がる。残存壁高は最も保存の良い西壁で約30cmである。

〔床面〕 床面はほぼ平坦である。なお住居跡西側中央付近に約45×55cmの範囲に焼土が、この焼土に一部接して北側に約70×110cmの木炭の広がりがみられた。焼土、木炭とも非常に薄く、床面には焼面は認められなかった。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔炉〕 認められない。



層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	風倒木による攪乱
2	黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	〃
3	黒色 (10YR 2/1)	シルト	〃
4	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	〃
5	黒色 (10YR 2/1)	シルト	〃
6	黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	〃
7	褐色 (10YR 4/2)	シルト	堅くしまっている
8	褐色 (10YR 4/2)	シルト	堅くしまっている

第12図 第2号住居跡

〔出土遺物〕

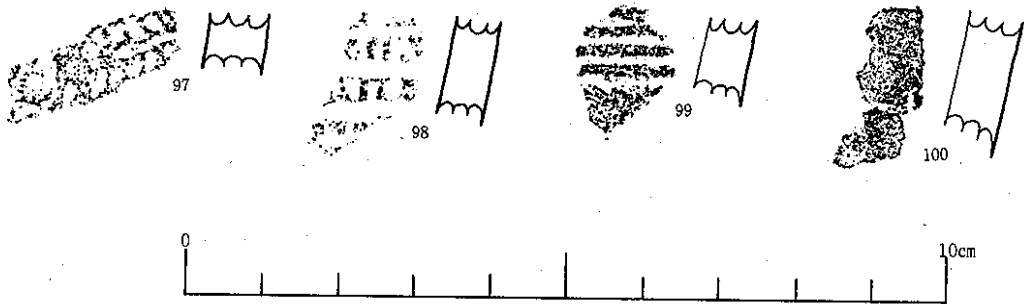
(床面出土遺物)

**縄文土器** (第13図 97~100)

すべて体部破片である。97は縄文が施されている土器である。横位回転によるものである。斜行縄文で原体はLRである。

98、99は押型文が施されている土器である。99は押型文だけが施文されており、施文原体は平行線状文で、横位回転施文されている。98は押型文施文後沈線が施文されており、施文原体は重層山形文で、横位回転施文後、幅2~3mmのやや太い沈線が横位に4条以上平行施文されている。断面形はU字形である。

100は無文部の土器である。97~100は器厚は6~8mm、胎土には細礫を含んでおらず、焼成は良好である。色調はいずれもにぶい橙色で繊維を含んでいる。

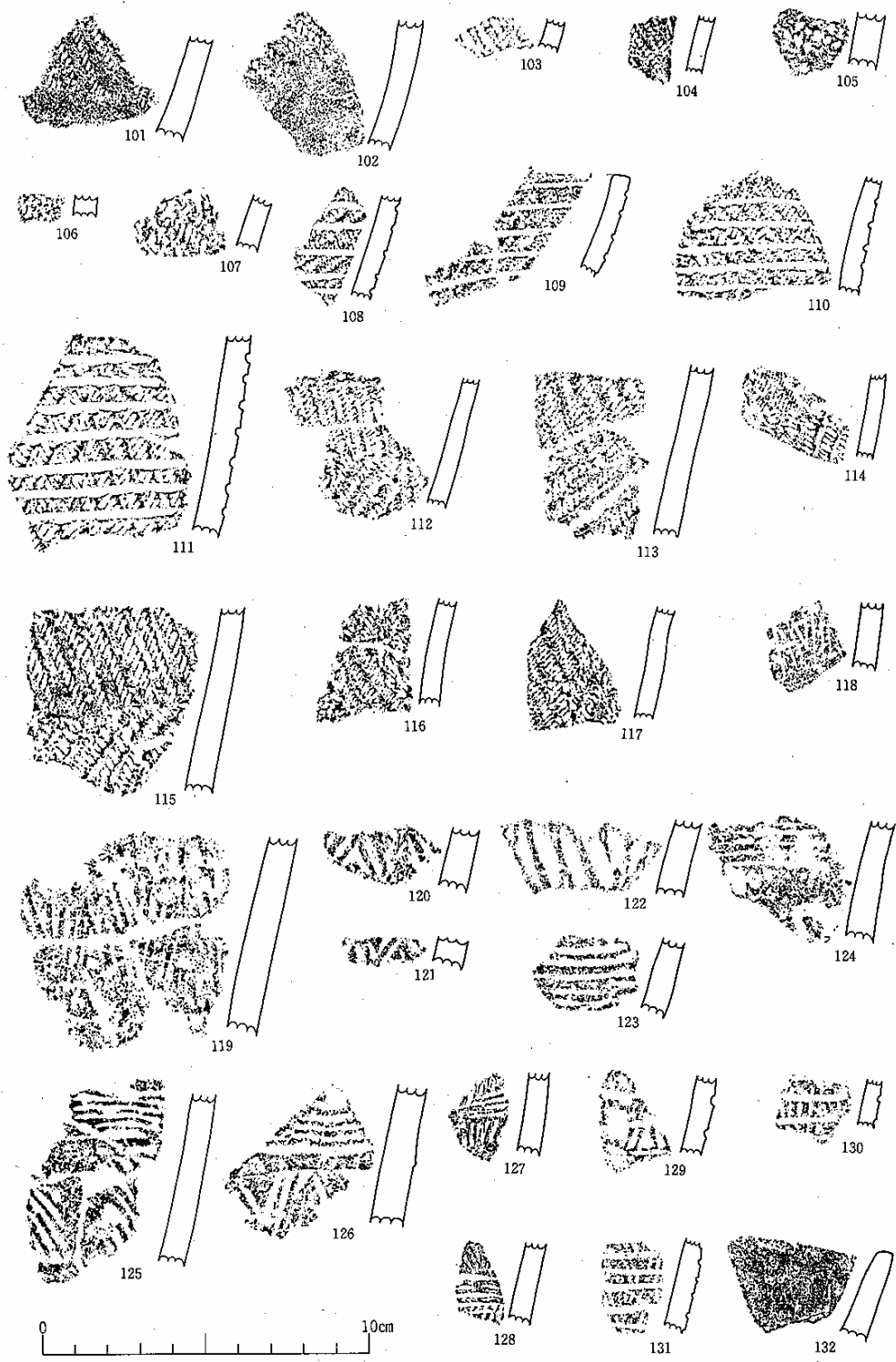


第13図 第2号住居跡床面出土遺物

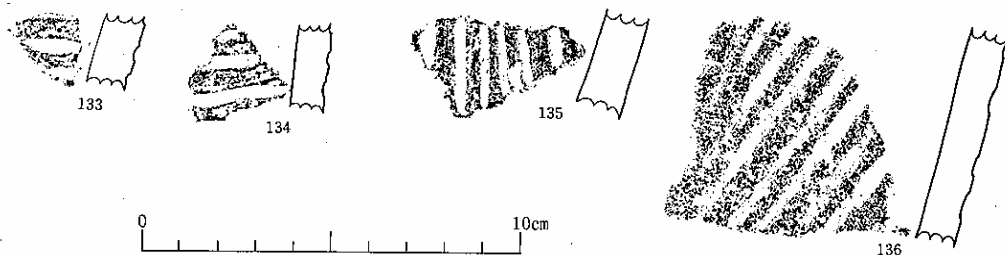
(堆積土出土遺物)

**縄文土器** (第14図 101~136)

101~117は縄文が施文されている土器である。109が口縁部破片で他はすべて体部破片である。いずれも横位回転によるものである。101~107、112~117は縄文だけが施文されている。101~107は斜行縄文で原体はLR、RL、112~117は羽状縄文で原体はLR→RLである。103、104、106、107、111~117は0段多条のものである。116は上段は原体をLR→RL、下段はRL→LRに横位回転しており、菱形状の羽状縄文が施されている。108~111は縄文施文後沈線が加えられている。108~110は斜行縄文で原体はLR、RL、111は羽状縄文で原体はLR→RLである。いずれも0段多条のものである。沈線は幅2~3mmでやや太く、横位に5~7条以上平行施文されている。断面はU字形である。口縁部破片が1点あり(109)器形はわずかに内湾ぎみに外傾、口唇部形態は角頭状で平縁である。101~117は器厚6~9mm、胎土には105、107、110、113がわずかに細礫を含むが、他はほとんど含まない。焼成は良好で、色調は橙色・暗灰黄色・



第14图 第2号住居跡堆積土出土遺物(1)



第15図 第2号住居跡堆積土出土遺物(2)

にぶい黄褐色である。いずれも内面に丁寧なミガキが施されている。

118～131は押型文が施されているが土器である。すべて体部破片である。118～128は押型文だけが施されている。施文原体は118～122の重層山形文、123、124の平行線状文だけである。125～129は同一器面に重層山形文施文後、平行線状文が施文されている。いずれも横位回転施文である。118～123では118、122の原体の掘り込み部と残部の幅に違いがみられ、118は掘り込み部の幅が広く、122は残部の幅が広がっている。他は大きな違いはみられない。129～131は押型文施文後沈線が加えられている。重層山形文施文後、幅約2mmのやや細め沈線が横位に3～5条以上平行施文されている。断面はU字形である。118～131は器厚5～9mm、胎土は129、131がわずかに細礫を含むが、他はほとんど含まれていない。焼成は良好で、色調は橙色・にぶい赤褐色・黄橙色・にぶい橙色である。

132は無文の土器で口縁部破片である。器形はほぼ外傾、口唇部形態はわずかに内削ぎ状で、平縁である。器厚は約8mm、胎土に細礫を含まない。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。133～136の土器は沈線だけが施文されている土器である。沈線は非常に太く斜位に施文されており、断面がやや鋭くなっている。器厚9～13mmと非常に厚く、胎土には細礫を多く含んでいる。焼成はやや良で、色調は褐灰色である。繊維をまったく含んでいない。

### 石器 (第16図23～30)

筥状石器、不定形石器などの剥片石器、およびその素材となる剥片とがある。

#### 筥状石器(23)

1点出土している。左右がわずかに非対称で、細長く、刃部より基部の方がわずかに広がっている。刃部は片面加工である。最大長約5.9cm、最大幅約4cmの大きめのものである。刃部は大きく弯曲しており、刃角は約60°である。a面右縁に調整剥離が施されている。断面は蒲鉾形に近い形を呈する。

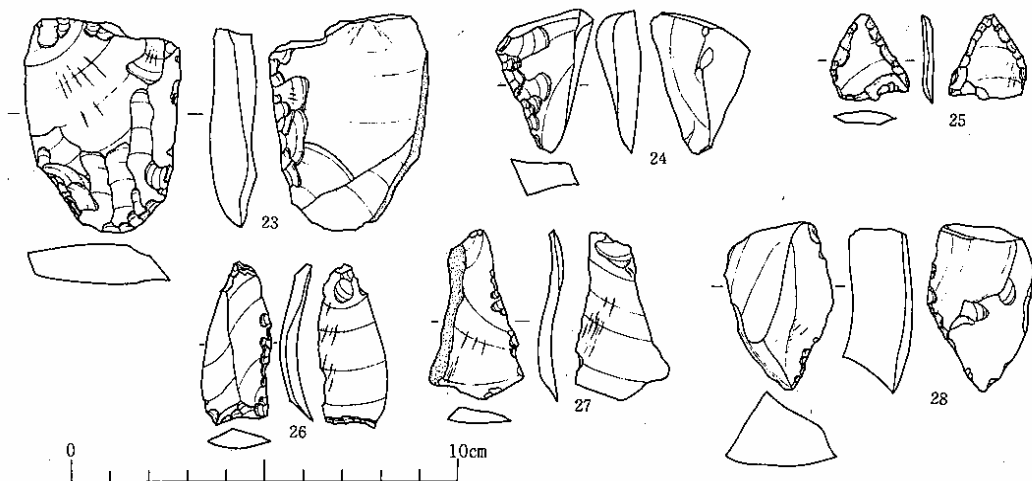
#### 不定形石器(24～29)

5点出土している。25、26は両面加工により剥片の一部が尖頭状に作り出されたものである。

いずれも尖頭部をわずかに欠損している。27は細長い剥片の下縁に両面加工による刃部が、28、29は片面加工により刃部が作り出されたものである。

剥片

21点の剥片が出土した。このうち、周縁の一部に微細剥離痕のあるものは3点である。



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
23	碗状石器	2	59	40	11	30.8	珪質頁岩
24	不定形石器	1	38	24	11	7.4	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
25	不定形石器	2	22	19	3	1.4	珪質頁岩
26	不定形石器	1	43	18	9	2.9	珪質頁岩
27	不定形石器	2	45	24	4	2.6	珪質頁岩
28	不定形石器	1	45	28	15	14.9	珪質頁岩

第16図 第2号住居跡堆積土出土遺物(3)

## 2. 竪穴状遺構とその出土遺物

### 第1竪穴状遺構(第17図)

〔遺構の確認〕 D・E-68、69区において基本層位第Ⅲ層上面にて確認された。

〔平面形・規模〕 東壁・北壁の一部が確認できなかったが、残存する壁の状況から平面形は長方形と思われる。規模は長軸約3.2m、短軸約2.8mで、長軸の方向はN-40°-Wである。

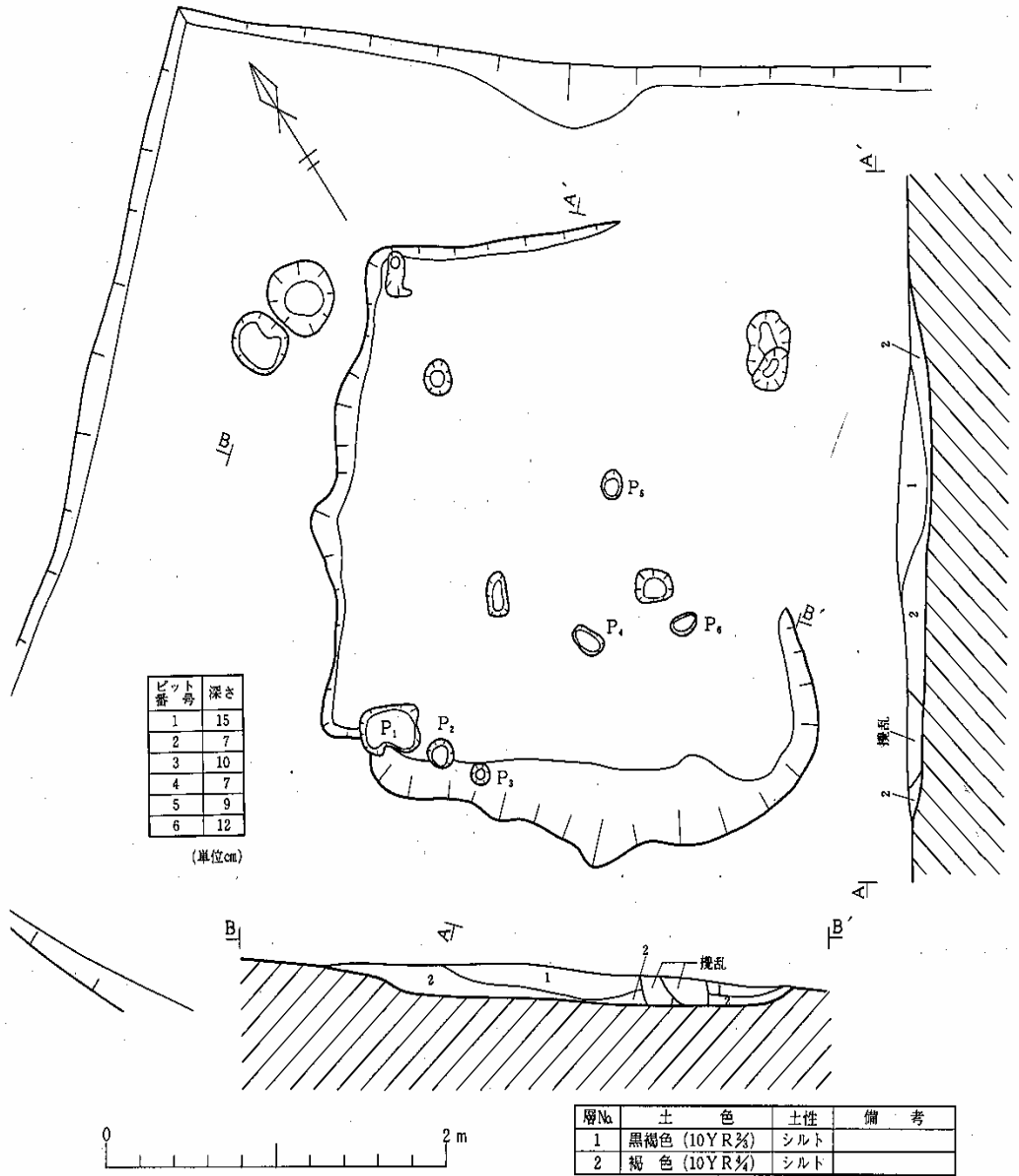
〔堆積土〕 2層認められた。第1層は黒褐色土で住居中央部にみられる。第2層は褐色土で住居壁沿いから中央部にかけて堆積している。いずれもあまりしまりがみられない。堆積層は凸レンズ状に堆積している。

遺物は第1層から縄文土器が約35点、石器が3点、第2層から縄文土器約40点、石器が9点出土している。遺物はいずれも層中に散在していた。

〔壁〕 東壁・北壁の一部が確認できなかった。残存する壁はいずれもゆるやかに立ち上がる。残存壁高は最も保存の良い南壁で約20cmである。

〔底面〕 底面には凹凸がみられる。

〔その他の施設〕 遺構内からは右側のピットが検出されたが、すべて堆積土上面から掘り込まれており、本遺構に伴うピットは検出されなかった。



第17図 第1竪穴状遺構

(堆積土出土遺物)

**縄文土器** (第18図 137~184)

137~151 は縄文が施文されている土器である。147 が口縁部破片で他は体部破片である。

137～146 は縄文だけが施文されている。145、146 以外は横位回転によるものである。137～142 は斜行縄文で原体はLR、RL、143、144 は羽状縄文で原体はLR→RL、RL→LRである。139～142・144 は0段多条のものである。145、146 は撚糸文（R）が施文されている。147～151 は縄文施文後沈線が加えられている。147 は口縁部破片で、器形はわずかに内湾ぎみに外傾する。口唇部形態はわずかに外削ぎ状で平縁である。沈線は口縁直下に施文されている。147～151 の沈線は幅約2mm でやや細く、横位に2～5条以上平行に施文されており、断面はU字形である。器厚は6～7mm で胎土は137、144 だけがわずかに細礫を含むが他はほとんど含まない。

焼成は良好で、色調は橙色・にぶい黄橙色・にぶい褐色である。

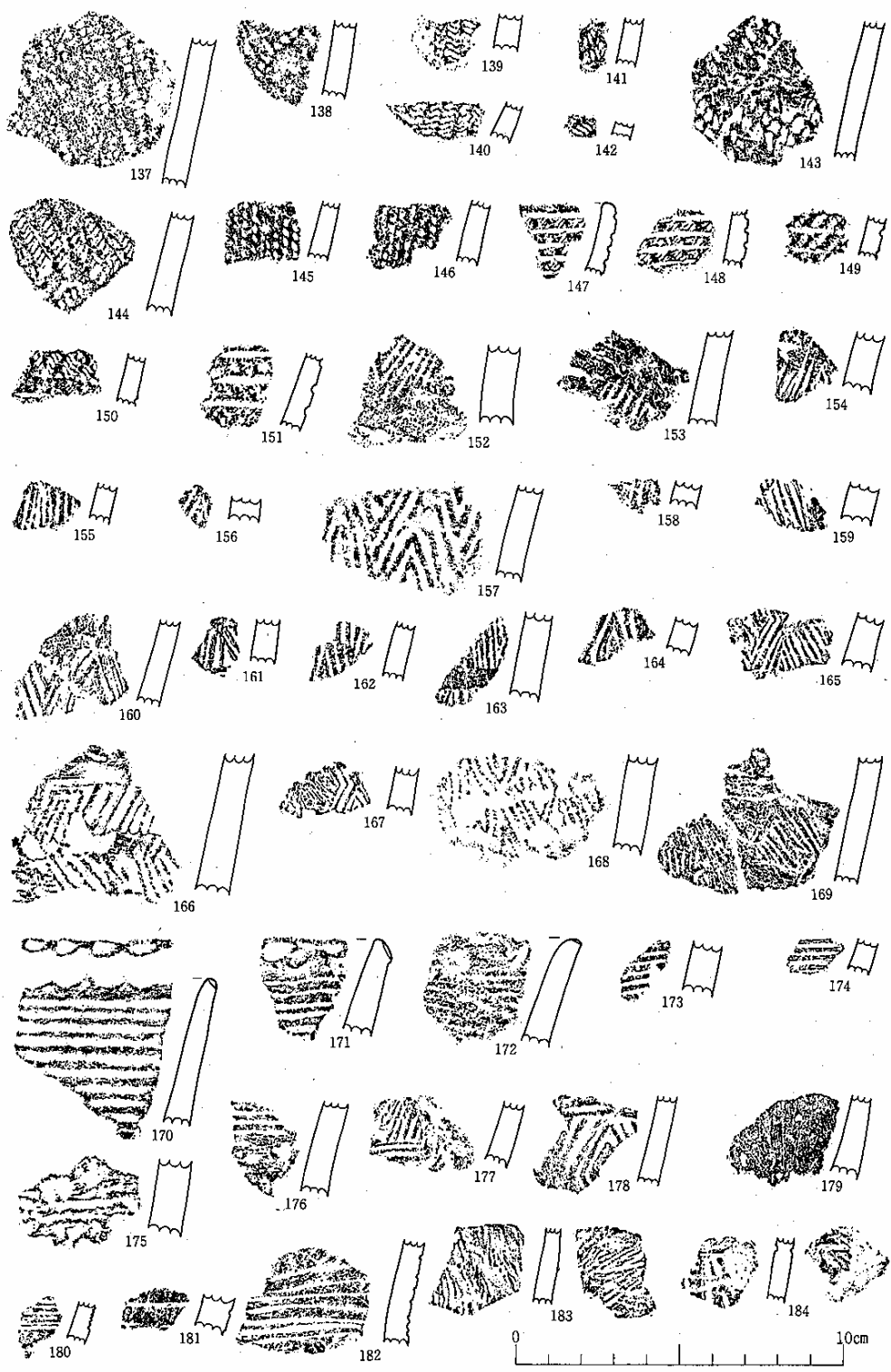
152～178 は押型文が施文されている土器である。170～172 が口縁部破片で他は体部破片である。施文原体は152～163 が重層山形文、164～169 が重層菱形文、170～176 が平行線条文である。177、178 は同一器面に2種の原体が施文されている。すべて横位回転施文である。162・163 は原体が2段にわたって施文されており、162 は密接して施文されており、163 は約6mm の間隔がみられる。重層菱形文施文の164～169 は菱形の区画は比較的整っており、内部には168 は区画に合わせて菱形が掘り込まれており、169 は相対する一組の辺に平行な直線が4～5本充填されている。170～176 の平行線状文施文には口縁部破片（170～172）がみられる。器形はほぼ外傾、口唇部形態は丸頭状のもの（170）、外削ぎ状のもの（171）、内削ぎ状のもの（172）とがあり、すべて口唇部に刻目を有している。平行線状文は口縁直下に施文されている。177 は重層山形文（?）、178 は重層菱形文施文後平行線状文が施文されている。152～178 は器厚は6～10mm で、胎土には167 がわずかに細礫を含むが、他はほとんど含んでいない。焼成は良好で、色調は橙色・にぶい赤褐色・にぶい褐色・にぶい黄橙色・褐灰色である。

179 は底部近くの無文部の土器である。外面に削りの際生じた擦痕がみられる。外面にはわずかに凹凸がある。器厚は約7mm、胎土にはわずかに細礫を含んでいる。焼成は良好で、色調は、にぶい黄褐色である。

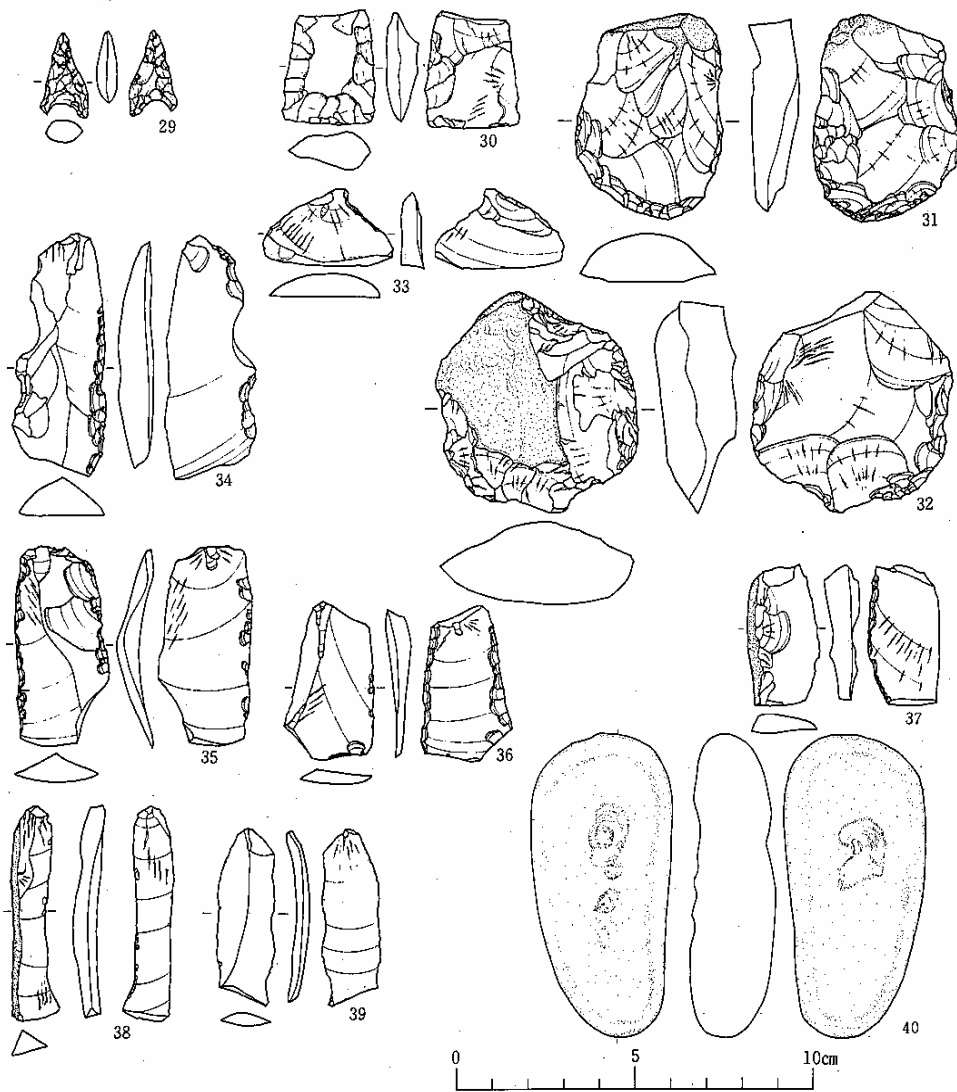
180～182 は沈線だけが施文されている土器である。すべて体部破片である。沈線の幅は約1mm で細く、横位または斜めに2～7条平行施文されている。器厚は6～9mm、胎土には細礫は含まれていない。焼成は良好で、色調は浅黄橙色・にぶい赤褐色である。なお137～182 にはすべて繊維が含まれている。

183、184 は条痕が施文されている土器である。183 は条間が非常に狭く、器内外には凹凸がみられる。器厚は4～5mm、胎土には細礫をわずかに含み、非常に堅くしまっている。色調は黄褐色で、繊維は全く含んでいない。





第18図 第1豎穴状遺構堆積土出土遺物(1)



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
29	石	鐵	23	13	6	0.7	珪質頁岩
30	匱状石器	2層	30	26	10	6.4	珪質頁岩
31	匱状石器	1層	57	41	14	38.1	珪質頁岩
32	不定形石器	1層	62	56	23	76.0	珪質頁岩
33	不定形石器	2層	21	36	7	3.8	珪質頁岩
34	不定形石器	2層	67	27	12	15.9	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
35	不定形石器	2層	55	30	7	8.1	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
36	不定形石器	2層	42	25	6	5.5	珪質頁岩
37	不定形石器	2層	38	20	9	6.7	珪質頁岩
38	剝片	2層	(59)	13	5.5	4.4	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
39	剝片	2層	(49)	16	4	2.7	珪質頁岩
40	凹石	2層	185	59	35	460	内縁岩

第19図 第1 豎穴状遺構出土遺物(2)

## 石器 (第19図 29~40)

石鏃・筥状石器・不定形石器などの剥片石器、およびその素材となる剥片、礫石器として凹石とがある。

### 石鏃(29)

1点出土している。完形である。基部にえぐりを入れた凹基のものである。基部のえぐりはやや深い。尖頭部側縁はa面左側はほぼ直線だが、右側は大きくふくらんでいる。b面中央に一次剥離面を残している。基部も左右非対象である。

### 筥状石器(30・31)

2点出土している。いずれも刃部片面加工である。30は最大長約3.0cm、最大幅約2.6cmの小さめのもので、31は最大長約5.7cm、最大幅4.1cmの大きめのものである。30は刃部がほぼ直線的で、全体の形状はほぼ台形状を呈する。31は刃部が大きく彎曲している。刃角は30・31とも60°である。いずれも両縁に調整剥離が施されている。断面は30が凸レンズ形、31が溝鋸形を呈する。

### 不定形石器(32~37)

6点出土している。32は円形に近い形をしており、粗い調整剥離が周縁にみられる。ラウンド・スクレーパーの未製品の可能性がある。34はa・b面右側縁に、35はa面側縁に、36はb面両側縁に、33はb面右側縁に、37は左側縁にそれぞれ調整剥離が施されている。37のa面左側縁には自然面がみられる。

### 剥片(38・39)

114点の剥片が出土した。このうち周縁に微細剥離痕のあるものは10点である。38・39は縦長の細長い剥片に一側縁または両側縁の一部に微細剥離痕のみられるものである。

### 凹石(40)

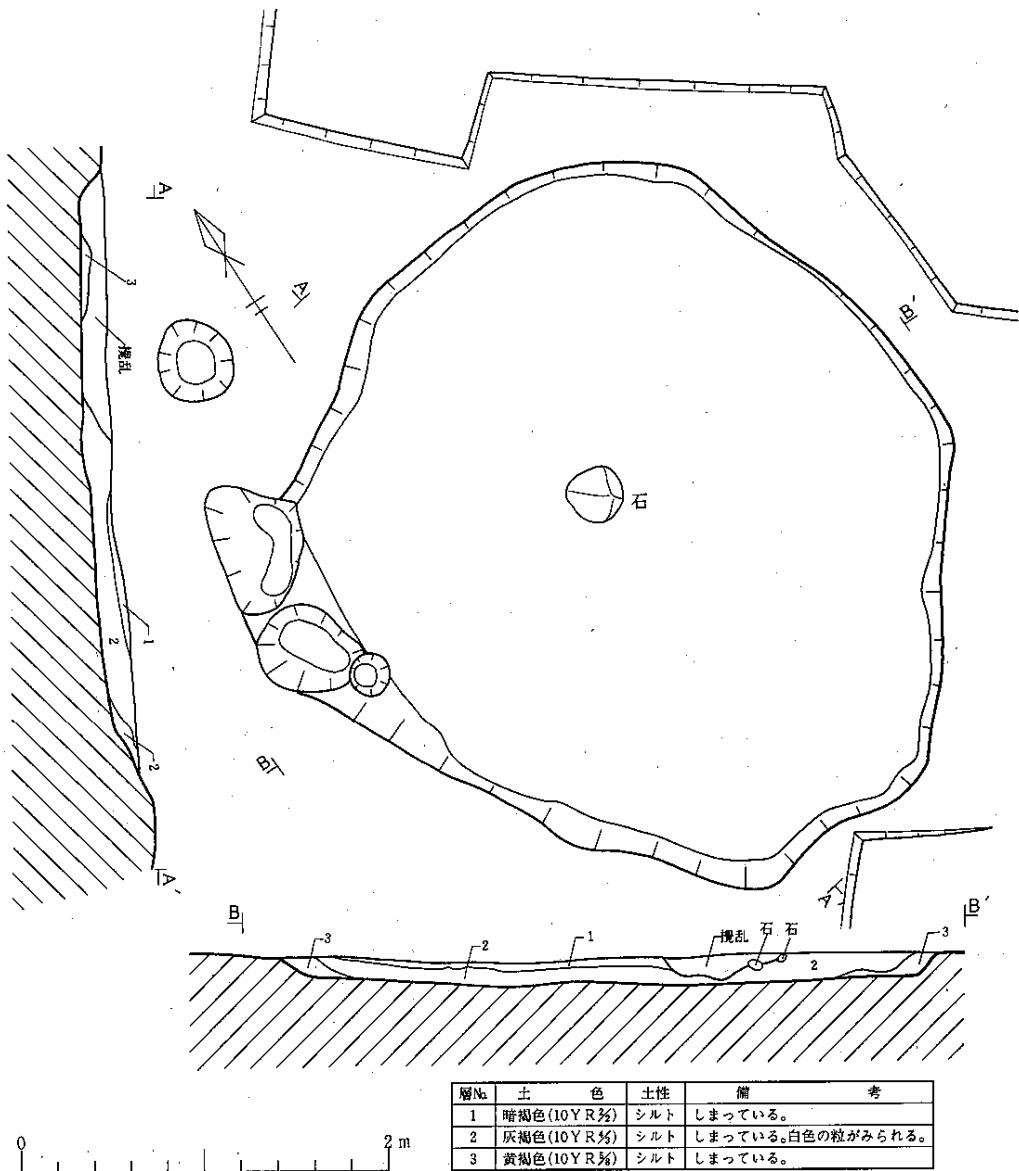
1点出土している。長楕円形の礫で、上面に1個、下面に数個のくぼみがみられる。くぼみはいずれも浅い。なお、礫の一端に敲打痕がみとめられ、敲石としても使用されたものと思われる。

## 第2 竪穴状遺構 (第20図)

〔遺構の確認〕 H・I-68・69区において基本層位第Ⅲ層上面にて確認された。

〔平面形・規模〕 ややゆがんだ長方形を呈する。規模は長軸約4m、短軸約3.5mで長軸の方向はN-12°-Eである。

〔堆積土〕 3層認められた。第1層は暗褐色土で住居北側から中央部にかけてみられる。第2層は灰褐色土で住居壁近くから中央部にかけて堆積している。第3層は住居壁沿いに堆積している。いずれもやや堅くしまっている。堆積層は凸レンズ状に堆積している。



第20図 第2 罎穴状遺構

遺物は第1層から縄文土器約5点、第2層から縄文土器が約75点、石器5点、第3層から縄文土器が約20点出土している。遺物はほとんどが第2層からの出土であり、石器もすべて第2層から出土している。遺物はいずれも層中に散在していた。

〔壁〕 4辺とも残存している。いずれの壁もややゆるやかに立ち上がる。残存壁高は最も保存のよい南壁で約20cmである。

〔底面〕 底面には凹凸がみられる。

〔その他の施設〕 南壁を重複して1個のピットが検出されたが、これは堆積土上面から掘り込まれており、本遺構に伴うピットは検出されなかった。

(堆積土出土遺物)

### 縄文土器 (185～252)

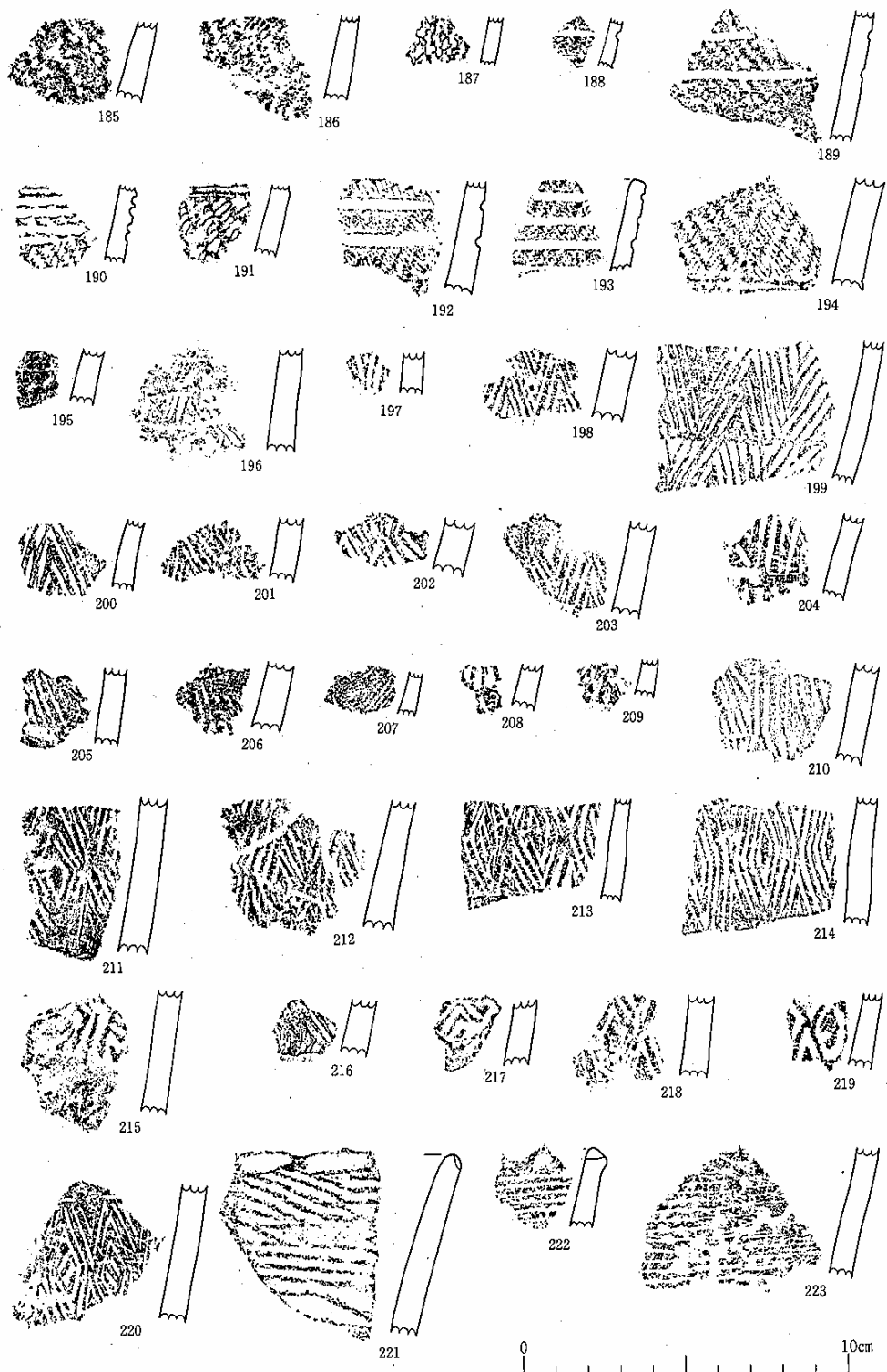
185～195は縄文が施文されている土器である。193が口縁部破片で他はすべて体部破片である。185～187、195は縄文だけが施文されている。いずれも横位回転によるものである。185～187は斜行縄文で原体はLR、RLである。195は撚糸文で原体は(R)である。188～194は縄文施文後沈線が加えられている。188～193は斜行縄文で原体はRL、LR、194は羽状縄文で原体はRL→LRである。191～194は0段多条のものである。口縁部破片(193)の器形は外傾、口唇部形態は角頭状で平縁である。

188～194の沈線は幅約3mmでやや太く、横位に2～4条以上平行施文されている。断面はU字形である。器厚は6～9mm、胎土にはほとんど細礫を含まない。焼成は良好で、色調は橙色・にぶい赤褐色・にぶい褐色・浅黄色である。

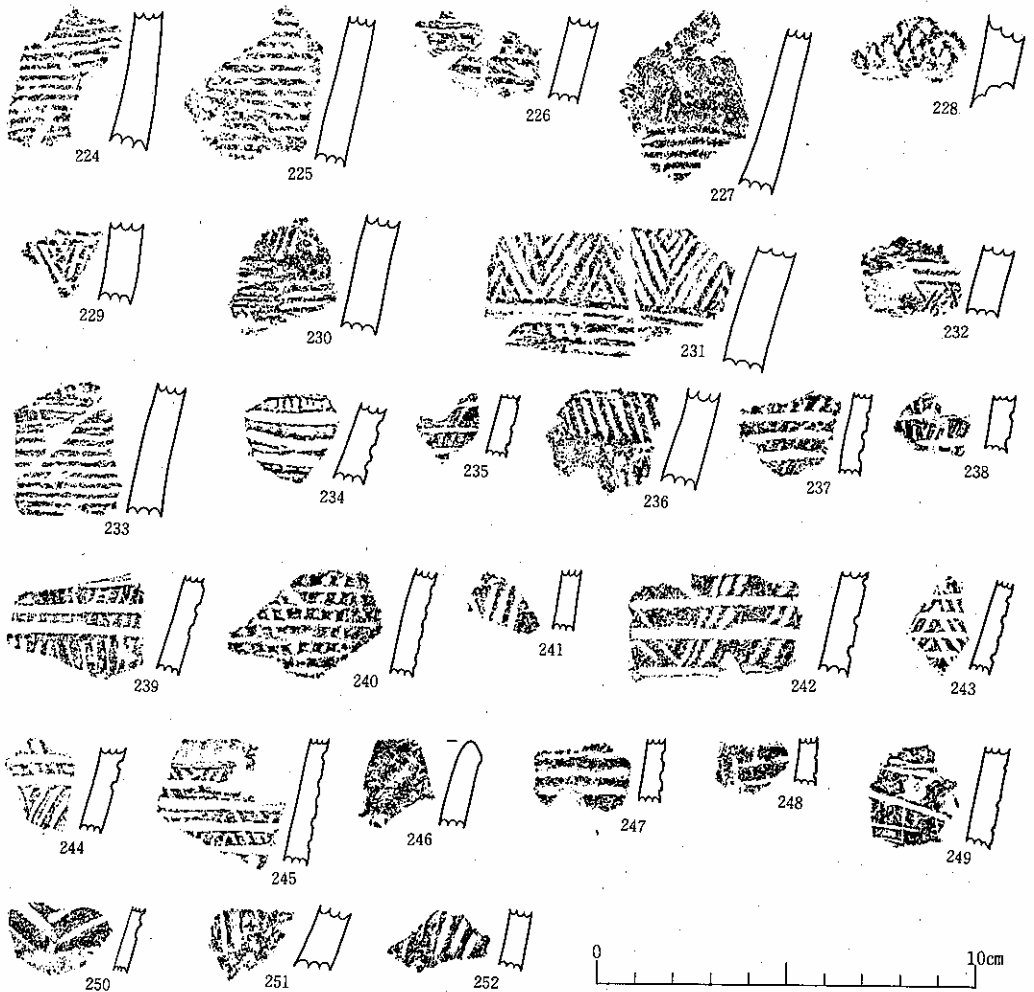
196～245は押型文が施文されている土器である。196～233は押型文だけが施文されている。施文原体は196～210が重層山形文、211～219が重層菱形文、221～227が平行線状文、228が菱形格子目文である。229～233は同一器面に重層山形文と平行線状文が施文されている。201を除きすべて横位回転施文である。これらをさらに見てみると196～210では原体が2段にわたって施文されているのが4点あり、204に幅約2mmの間隔がみられるだけで、他はいずれも密接して施文されており、一部原体が大きく重なっているものもみられる。211～220は重層菱形文の菱形区画は比較的整っており、内部はほとんどが区画に合わせて菱形が掘り込まれているが217は相対する一組の辺に平行な直線が充填されている。原体長は推定で211が約4.2cm、213が約4cmである。221～227の平行線状文施文のものには口縁部破片(221、222)がみられる。器形は外傾する。口唇部形態は丸頭状(221)、外削ぎ状(222)で口唇部にはいずれも刻目がみられる。221だけが平行線状文が斜めに回転されている。228は菱形格子目文が施文されているもので、遺構から出土したのは1点だけである。菱形格子目の掘り込み部の幅は約1mm、格子目の大きさは対角線長で6×3mmである。220・234～245は押型文施文後沈線が加えられている。施文原体は239～244が重層山形文で、220・245が重層菱形文である。いずれも重層山形文または重層菱形文施文後、幅2～3mmのやや太い沈線が横位に1～6条以上平行に施文されている。

196～245は器厚6～10mmで、胎土には234・243・244がわずかに細礫を含むが、他はほとんど含まない。焼成は良好で、色調は橙色・にぶい橙色・にぶい褐色・にぶい赤褐色である。

246は無文の土器で口縁部破片である。器形はほぼ外傾し、口唇部形態は外削ぎ状で平縁である。器厚は約6mmで、胎土には細礫は含まれない。焼成は良好で、色調は橙色である。



第21图 第2竖穴状遺構堆積土出土遺物(1)



第22図 第2 豎穴状遺構堆積土出土遺物(2)

247～252 は沈線だけが施文されている土器である。すべて体部破片である。沈線は247 が幅2～3mm でやや太く、横位に3条以上平行施文されている。248・249 は幅1～2mm でやや細く、横位および斜位に2～5条以上平行施文されている。249 は格子状の沈線になっている。250～252 は幅2～3mm でやや太く、斜位または縦位に2～3条平行施文されている。断面は248、249 がやや鋭くなっているが、他は断面U字形である。

器厚は6～8mm で、胎土は252 がわずかに細礫を含んでいるが、他はほとんど含んでいない。焼成は良好で、色調は浅黄橙・にぶい赤褐色・橙色である。185～252 はすべて繊維を含んでいる。

**石器** (第23図 41~45)

錐・不定形石器などの剥片石器、およびその素材となる剥片とがある。

**錐(41~43)**

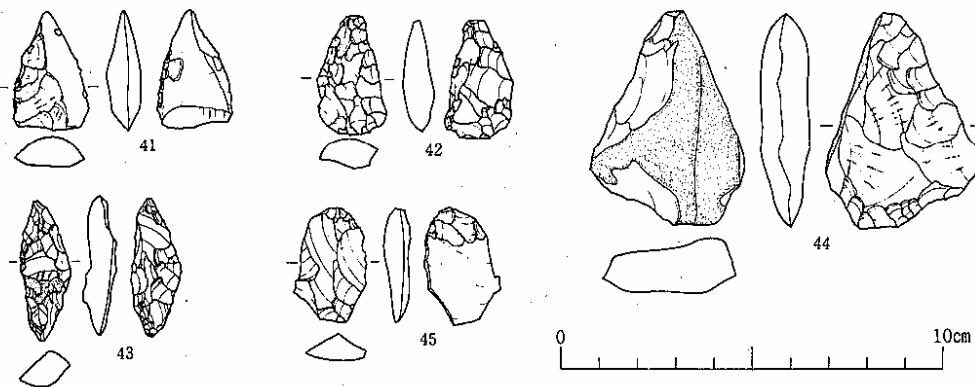
3点出土している。41、43は完形であり、42は先端部が欠損している。41はa・b面左縁に調整剥離が施され、尖頭部が作り出されている。尖頭部両側縁はわずかにふくらんでいる。42、43は両面加工により、42は一端が、43は両端が尖頭部に作り出されている。41、43の錐部上半は著しい磨耗がみられ、特に錐部先端は磨耗のため丸味をおびている。

**不定形石器(44、45)**

2点出土している。44、45はb面に調整剥離がみられるものである。44はa面に自然面がみられる。

**剥片**

117点の剥片が出土した。このうち周縁の一部に微細剥離痕のみられるものは5点である。



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
41	錐	2層	(33)	17	4	3.7	珪質頁岩
42	錐	2層	(31)	17	9	3.4	珪質頁岩
43	錐	2層	36	13	8	2.1	珪質頁岩
44	不定形石器	2層	57	40	14	2.6	珪質頁岩
45	不定形石器	2層	30	(19)	7	2.9	珪質頁岩

第23図 第2豎穴状遺構堆積土出土遺物

**第3豎穴状遺構** (第24図)

〔遺構の確認〕 G・H-68区において基本層位Ⅲ層上面にて確認された。

〔平面形・規模〕 ややゆがんだ方形を呈する。規模は一辺2.1~2.2mである。南北長の方向はN-18°-Eである。

〔堆積土〕 2層認められた。第1層は暗褐色土で住居中央部にみられる。あまりしまりが少ない。第2層は褐色土で住居壁沿いに堆積している。わずかにしまりがみられる。堆積層は将棋倒し状に堆積している。



遺物は第1層から縄文土器が約25点、石器が2点、第2層から縄文土器が約5点、石器が1点出土している。遺物はほとんどが第1層からの出土である。遺物はいずれも層中に散在していた。

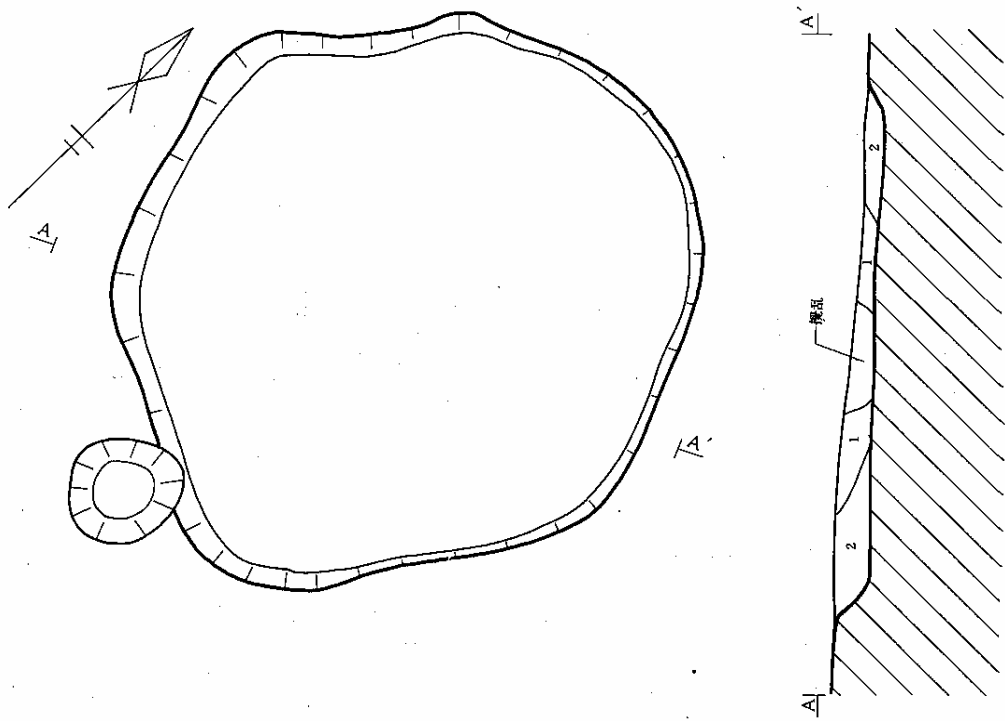
〔壁〕 4辺とも残存している。いずれの壁もややゆるやかに立ち上がる。残存壁高は最も保存のよい東、南壁で10～15cmである。

〔底面〕 底面には凹凸がみられる。

(堆積土出土遺物)

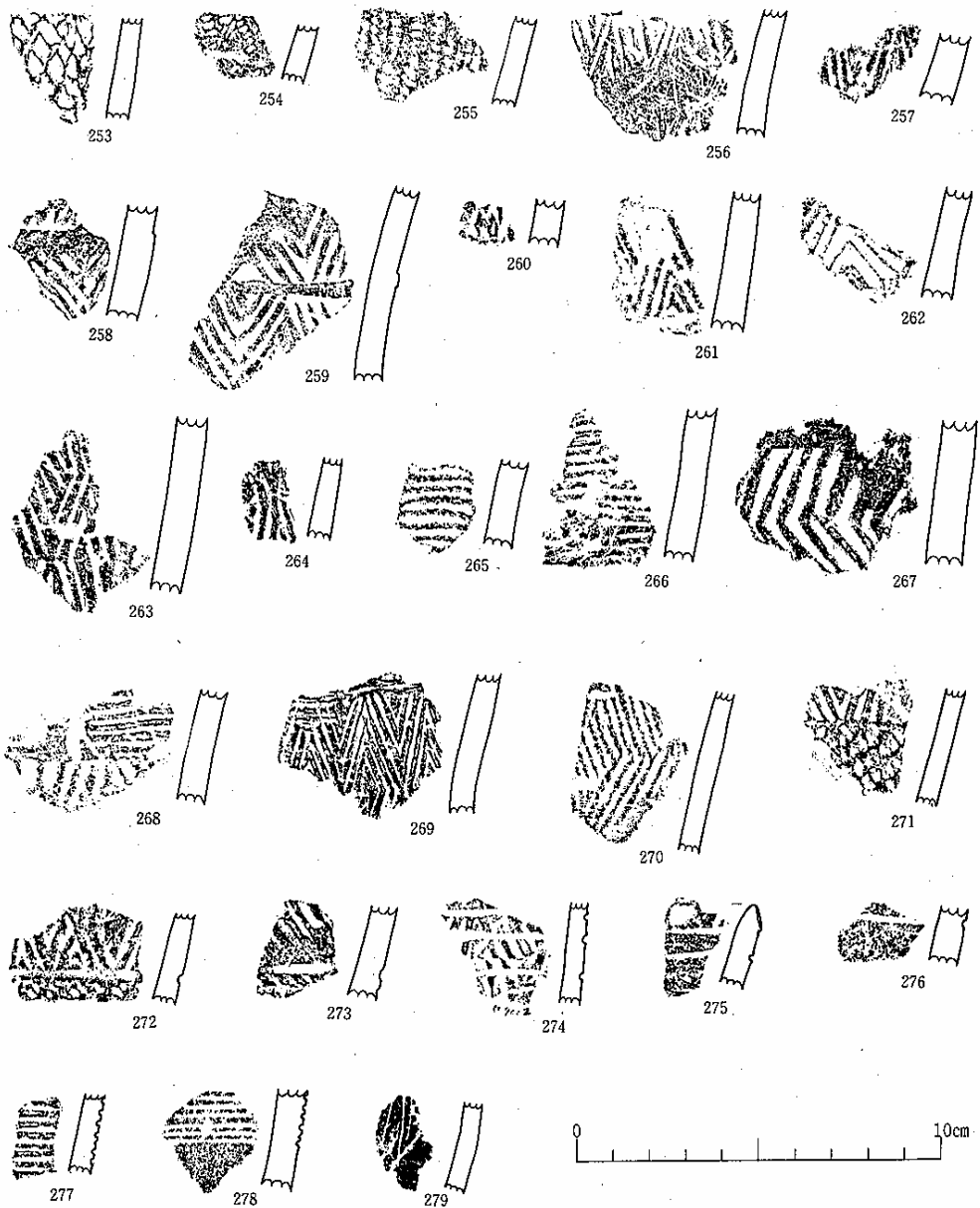
**縄文土器** (253～279)

253～255 は縄文が施文されている土器である。体部破片である。縄文だけが施文されており、



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	
2	褐色 (10YR 4/4)	シルト	しまりがある。

第24図 第3 竪穴状遺構



第25図 第3豎穴状遺構出土堆積土遺物(1)

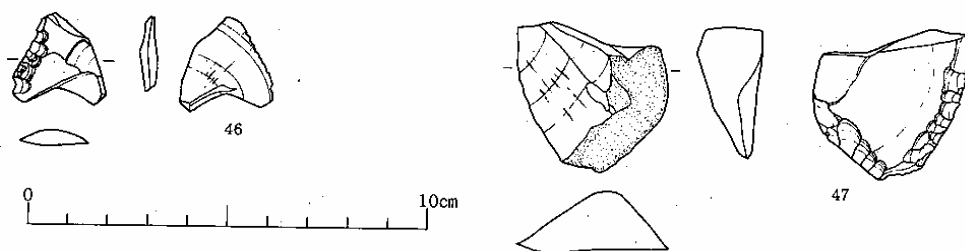
いずれも横位回転によるものである。斜行縄文で原体はLR、RLである。器厚は約6mm、胎土には細礫がほとんどみられず、焼成は良好である。色調はにぶい褐色である。

256～274 は押型文が施文されている土器である。すべて体部破片である。256～270 は押型文だけが施文されている。施文原体は256～262 は重層山形文、263、264 は重層菱形文、265、266 は平行線状文、267 は矢羽状文である。268～270 は同一器面に2種の原体が施文されている。す

べて横位回転施文である。258、259の重層山形文、263の重層菱形文施文のものは2段にわたって施文されているが、258、259には3～7mmの間隔がみられ、263は密接して施文されている。263の重層菱形文は菱形区画が比較的整っており、区画の内部は目の字状に充填されている。267の矢羽状文は掘り込み部から次の掘り込み部までの間隔が広がっている。原体の推定長は約4.2cmである。268～270は重層山形文(?)または重層菱形文施文後平行線状文が上位に施文されている。269の重層菱形文の原体推定長は約5.2cmである。271は押型文と縄文が施文されている。272は押型文と縄文が施文された後、その境に沈線が施文されている。いずれも縄文は斜行縄文で原体はLRである。横位回転施文されている。272の押型文施文原体は重層菱形文で、沈線は幅約3mmでやや太く、横位に1条以上施文されており、断面はU字形である。273、274は押型文施文後線が加えられている。施文原体は重層山形文で、沈線の幅は約2mmでやや細く、横位に1～4条以上平行施文されている。

256～274は器厚6～10mm、胎土にはほとんど細礫を含まず、焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色・橙色・にぶい橙色である。

275～279は沈線だけが施文されている土器である。275は口縁部破片で他はすべて体部破片である。275は器形はほぼ外傾、口唇部形態は尖頭状で口唇部に刻目がみられる。沈線は275、276は幅約2mmでやや細く、横位に1～2条以上平行施文されており、277、278は幅1mm前後で細く、横位に1～7条平行施文されている。279も幅1mm前後で細く、斜位に施文されている。断面は275、276がU字形、他はやや鋭くなっている。器厚は6～8mmで、胎土には細礫をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は橙色・にぶい赤褐色・黄褐色である。253～279の土器はすべて繊維を含んでいる。



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
46	不定形石器	第3竪-4上	26.4	23.5	5.0	2.0	珪質頁岩
47	不定形石器	第3竪-1	42.2	40.8	17.2	24.5	珪質頁岩

第26図 第3竪穴状遺構堆積土出土遺物(2)

## 石器 (第26図46、47)

剥片石器として不定形石器が、およびその素材となる剥片とがある。

不定形石器(46、47)

2点出土している。46はa面左側縁に、47はb面両側縁に調整剥離がみられる。47はa面に自然面がみられる。

剥片

40点の剥片が出土した。このうち周縁の一部に微細剥離痕のみられるものは1点である。

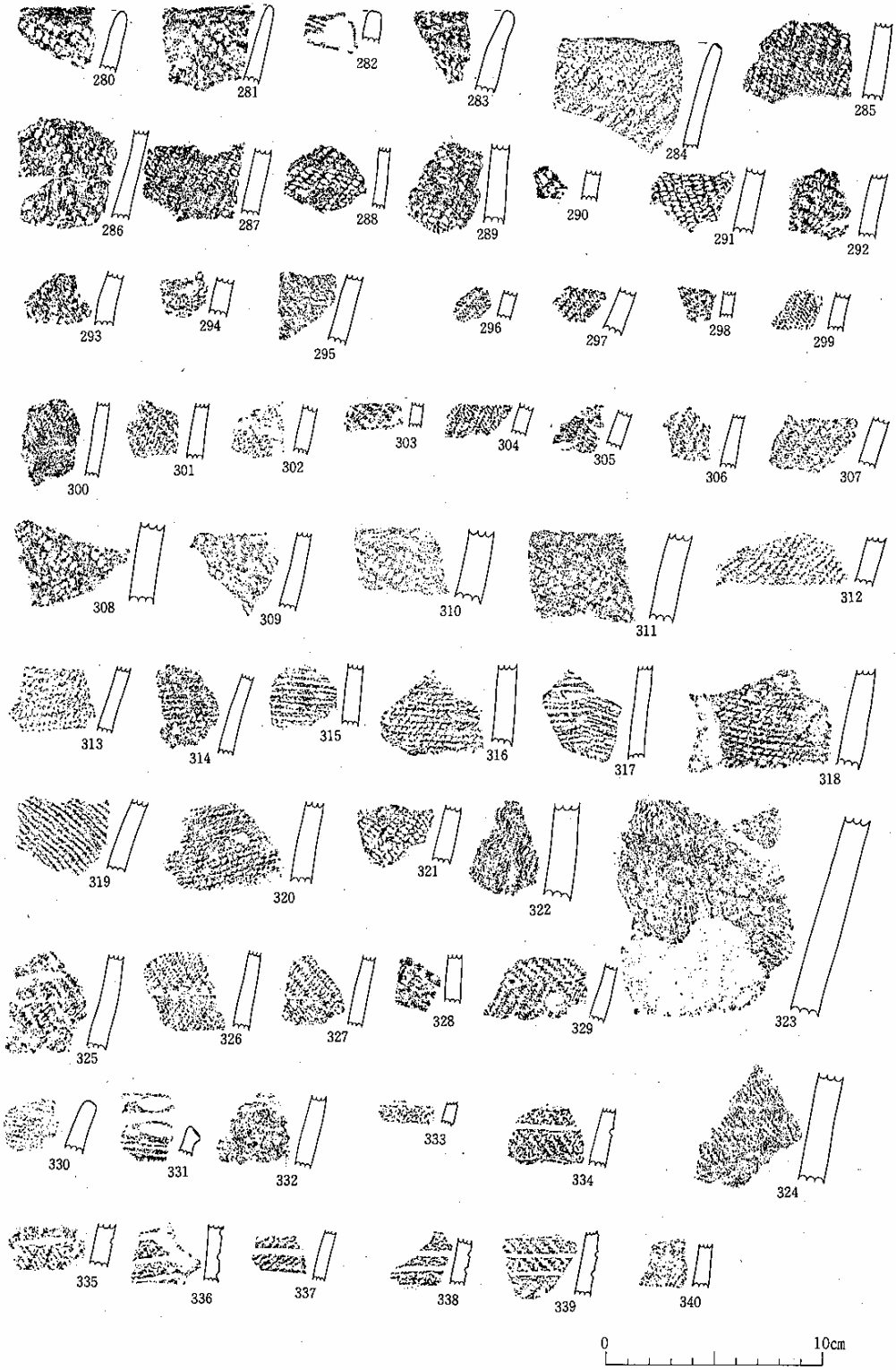
## 3. 表土および堆積層出土遺物

遺物は縄文土器が第Ⅰ、Ⅱ層が約170点、第Ⅲ層および第Ⅲ層上面が約250点、石器は第Ⅰ、Ⅱ層から約50点、第Ⅲ層および第Ⅲ層上面から約40点出土している。縄文土器は小破片であり、しかも数形式の土器が混在していることから、ここでは一括して記述を行なう。石器についても同様である。

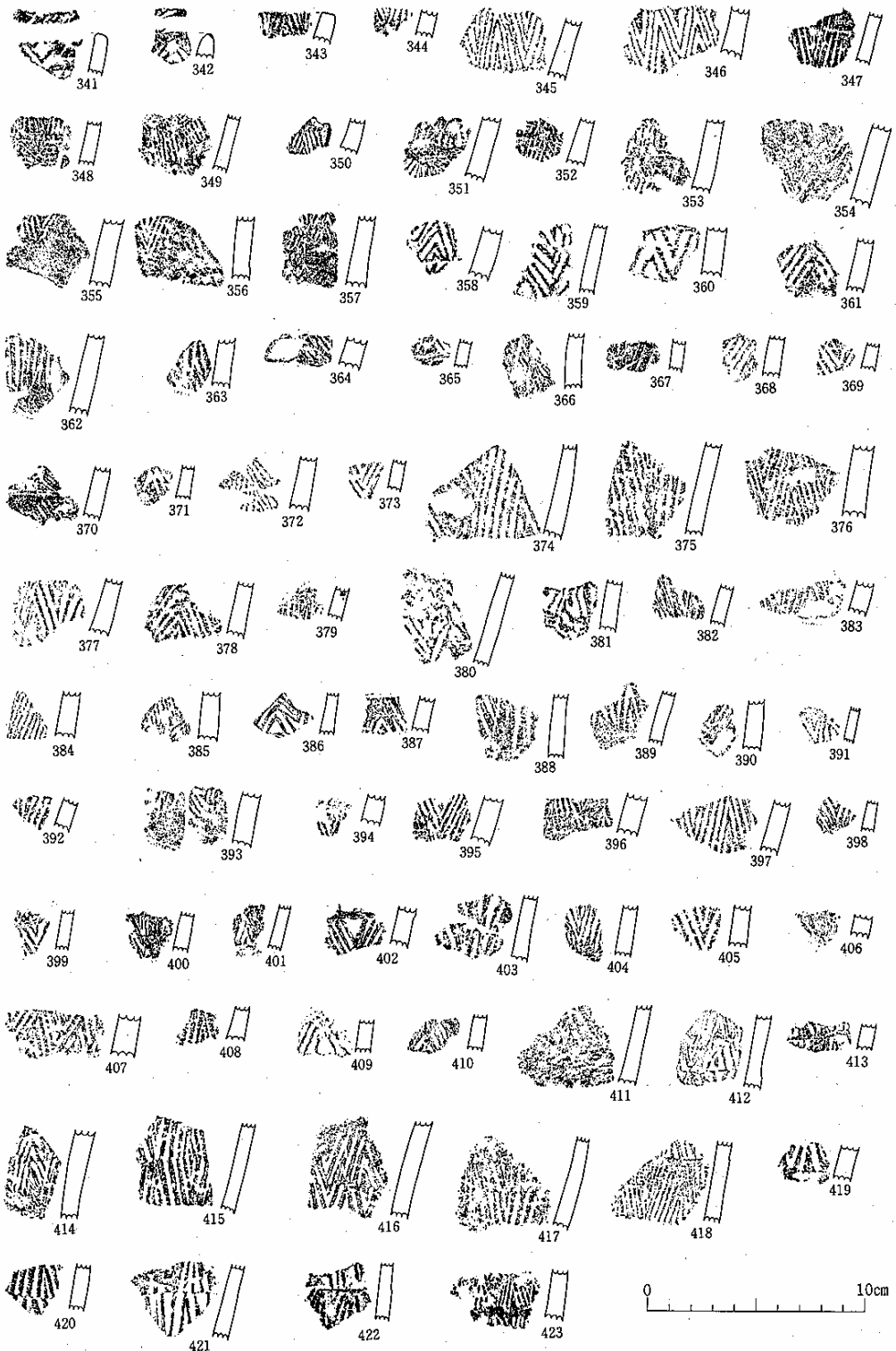
### 縄文土器 (280～340)

280～340は縄文が施文されている土器である。280～284、330、331が口縁部破片で、他はすべて体部破片である。280～332は縄文だけが施文されている。280～324は斜行縄文で原体はRL、325～329は羽状縄文で原体はRL→LR、330～332は撚糸文で原体はRである。296～307は0段多条のものである。333～340は縄文施文後沈線が加えられている。335～337は斜行縄文で原体はLR、RL、338～340は羽状縄文で原体はRL→LR、LR→RLである。ほとんどが0段多条のものである。沈線は幅2～3mmでやや太く、横位に1～3条以上平行施文されている。断面はU字形である。280～307、325～340は繊維を含んでいる。器厚5～8mmで、胎土はわずかに細礫を含むか、ほとんど含まないかである。焼成は良好で、色調は橙色・にぶい褐色・浅黄橙色・灰白色・にぶい赤褐色である。308～324は繊維を含んでいない。器厚7～12mm、胎土には細土には細礫を含んでおり、焼成はやや良で、色調は褐灰色・にぶい橙色である。

341～563は押型文が施文されている土器である。341～343、468～478が口縁部破片で他は体部破片である。341～546は押型文だけが施文されている。施文原体は341～437が重層山形文、438～467が重層菱形文、468～520が平行線状文、521が菱形格子目文である。522～546は同一器面に2種の原体が施文されている。341～563はいずれも横位回転施文である。これらをさらに見てみると、341～437には口縁部破片(341～343)がある。器形はほぼ外傾し、口唇部形態はやや外削ぎ状のもの(341)、尖頭状のもの(342)、角頭状のもの(343)とがあり、341、342の口唇部には刻目がみられる。438～467は重層菱形文施文のものであるが、菱形の区画は整っており、区画の内部は439～451は区画に合わせて菱形が掘り込まれており、454～457は菱形区画の



第27図 遺構以外出土遺物(1)



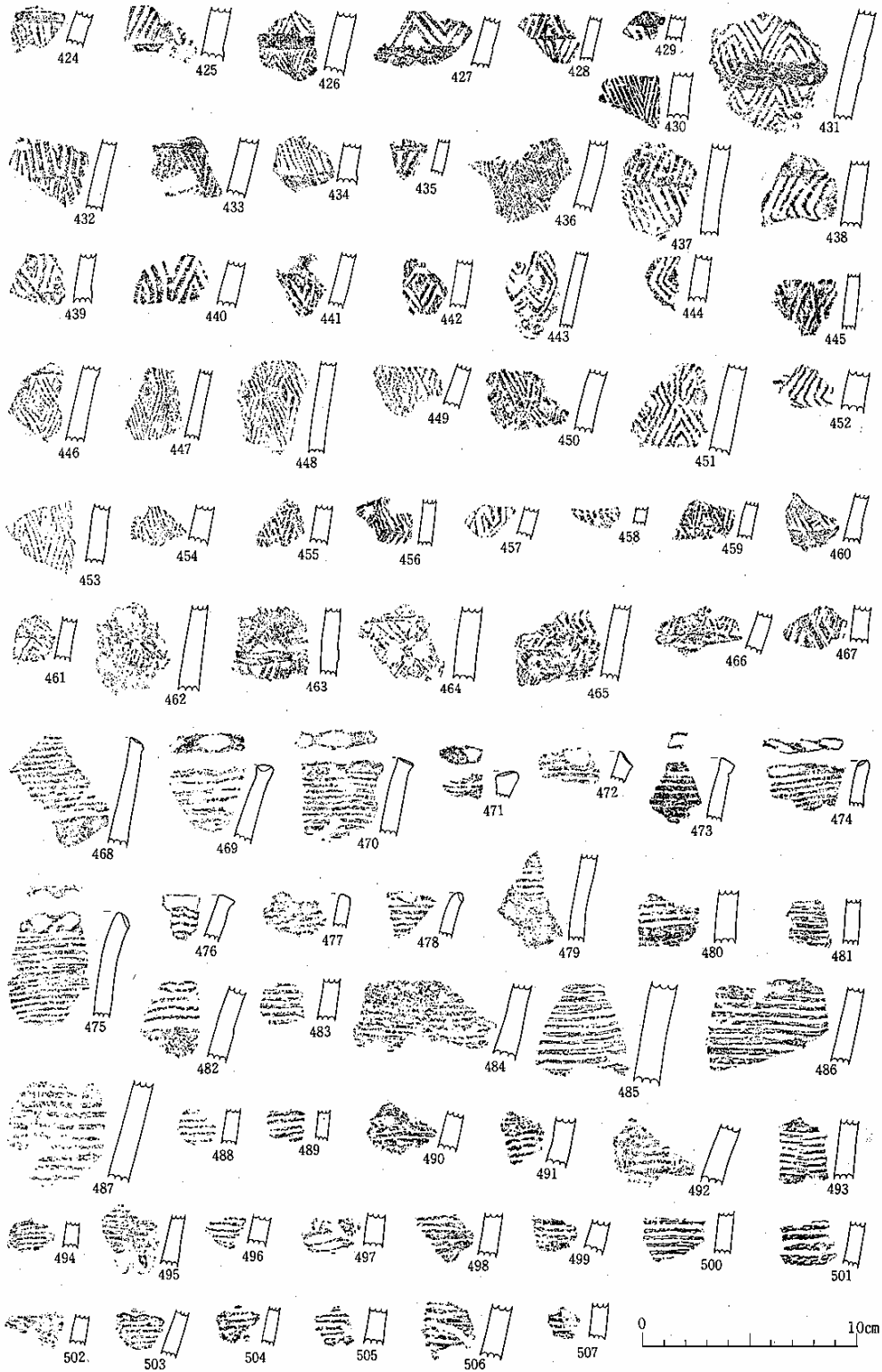
第28図 遺構以外出土遺物(2)

内部が目の字状、コの字状等に充填されている。なお、448 は原体の長さが推定約 4.8cm である。468～520 の平行線状文施文には口縁部破片 (468～478) がある。器形はわずかに外反ぎみに外傾し、口唇部形態は丸頭状のもの(469、474)、角頭状のもの(470、476)、やや尖頭状のもの(478)、内削ぎ状のもの(471)、外削ぎ状のもの(468、472、473、475、476)と多様である。476、477 以外口唇部に刻目を有している。なお、545 は両末端部がみられる。原体の長さは約 3.4cm である。521 は菱形格子目文が施文されている。施文された文様が菱形の格子目状になっており、菱形格子目の凸部の幅は約 1mm、菱形格子目の大きさは対角線長で 6 × 3mm である。547～563、603 は押型文施文後沈線が加えられている。547～549、603 が口縁部破片で他は体部破片である。547～549 は器形はほぼ外傾し、口唇部形態はわずかに内削ぎ状のもの(547)、角頭状のもの(548、549)、丸頭状のもの (603) とがある。548、603 は口唇部に刻目がみられる。沈線は 547～561、603 は重層山形文に、562、563 は重層菱形文に、横位に数条沈線を施文している。幅は 603 がやや細めだが、他はいずれも 2～3mm のやや太めで、横位に 2～6 条以上平行施文されている。断面はU字形である。341～563 は器厚 5～7mm のものが多いが、8～10mm のものもわずかにみられる。胎土はわずかに細砂を含むが、ほとんど含まないかのいずれかで、焼成は良好である。色調は橙色・にぶい褐色・黄橙色で、繊維を非常に多く含んでいる。

564～566 は無文の土器である。すべて口縁部破片である。器形は外傾し、口唇部形態は 564 が内削ぎ状、565 が丸頭状、566 が角頭状である。564、566 は口唇部に刻目を有している。外面にわずかに凹凸がみられる。器厚 5～7mm で、胎土には細礫が含まれず、焼成は良好である。色調はにぶい褐色で、繊維を含んでいる。

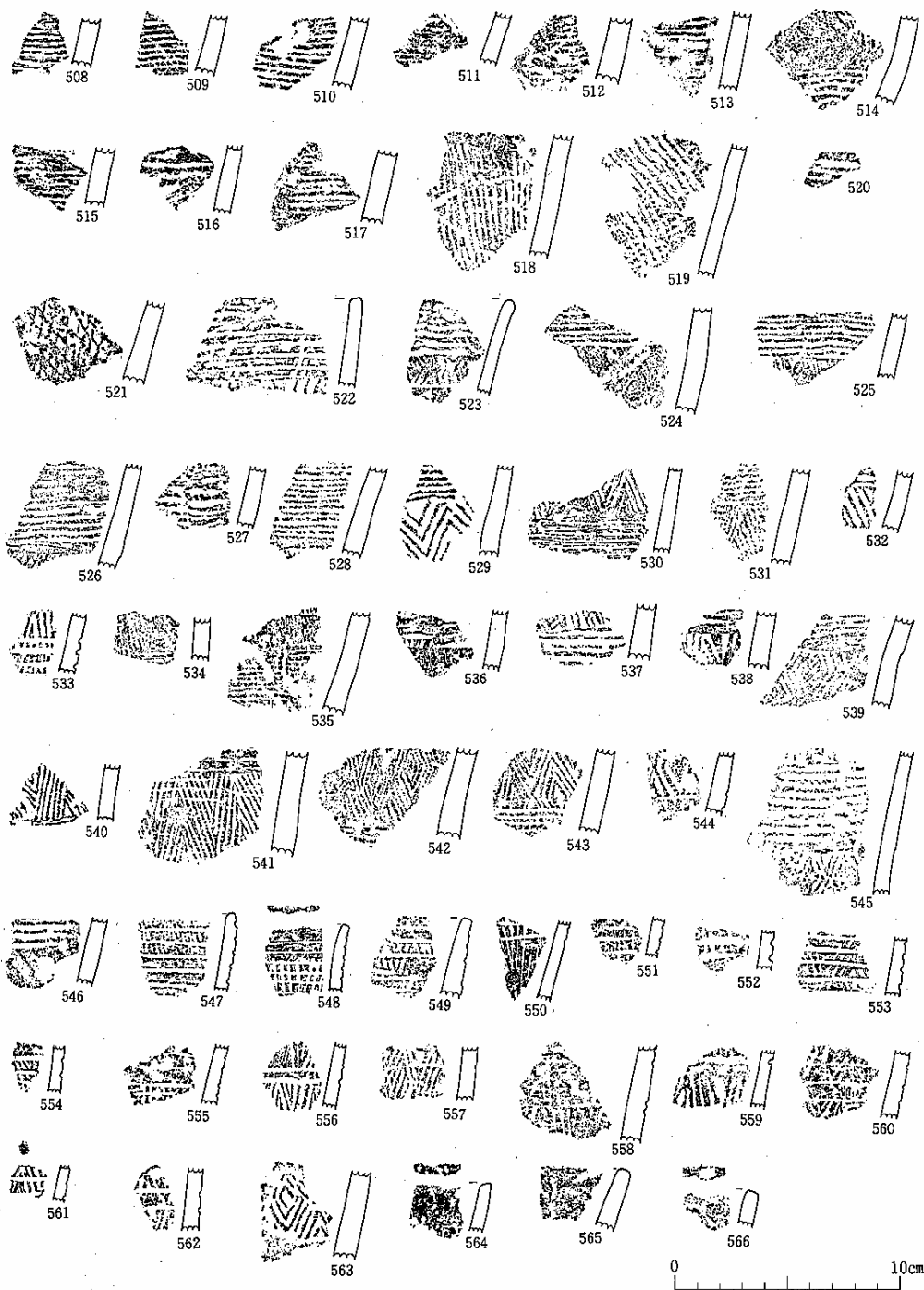
567～602、604～673 は沈線だけが施文されている土器である。567～602 は横位に沈線が平行施文されている。567～590 はやや細めの沈線で、591～602 は太い沈線が施文されている。567～573、592～594 は口縁部破片だが器形はほぼ外傾する。口縁部形態は多様であり、ほとんどが口唇部に刻目を有している。604～631 は沈線が平行または斜位に施文されているものである。604～611 は口縁部破片だが、器形はほぼ外傾する。口縁部形態は多様であり、口唇部に刻目を有するものと、有さないものがある。604 は平行沈線と斜線とが、608、612～615 は斜線が交差して格子状になっている。567～572、574～582、604～608、612～615 は繊維を含んでいる。器厚は 7～9mm、胎土はわずかに細礫を含むか、ほとんど含まないかであり、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色・浅黄橙色・にぶい赤褐色である。573、583～602、609～611、626～631 は繊維を含んでいない。器厚 5～11mm、胎土にはわずかに細礫を含む。焼成はやや良である。色調は赤褐色・橙色・にぶい黄褐色である。

632～657 は沈線の末端の接合または短沈線の充填により格子状の文様が施文されているものである。632～637 は口縁部破片であるが器形は外傾し、口唇部形態はすべて内削ぎ状、口唇部

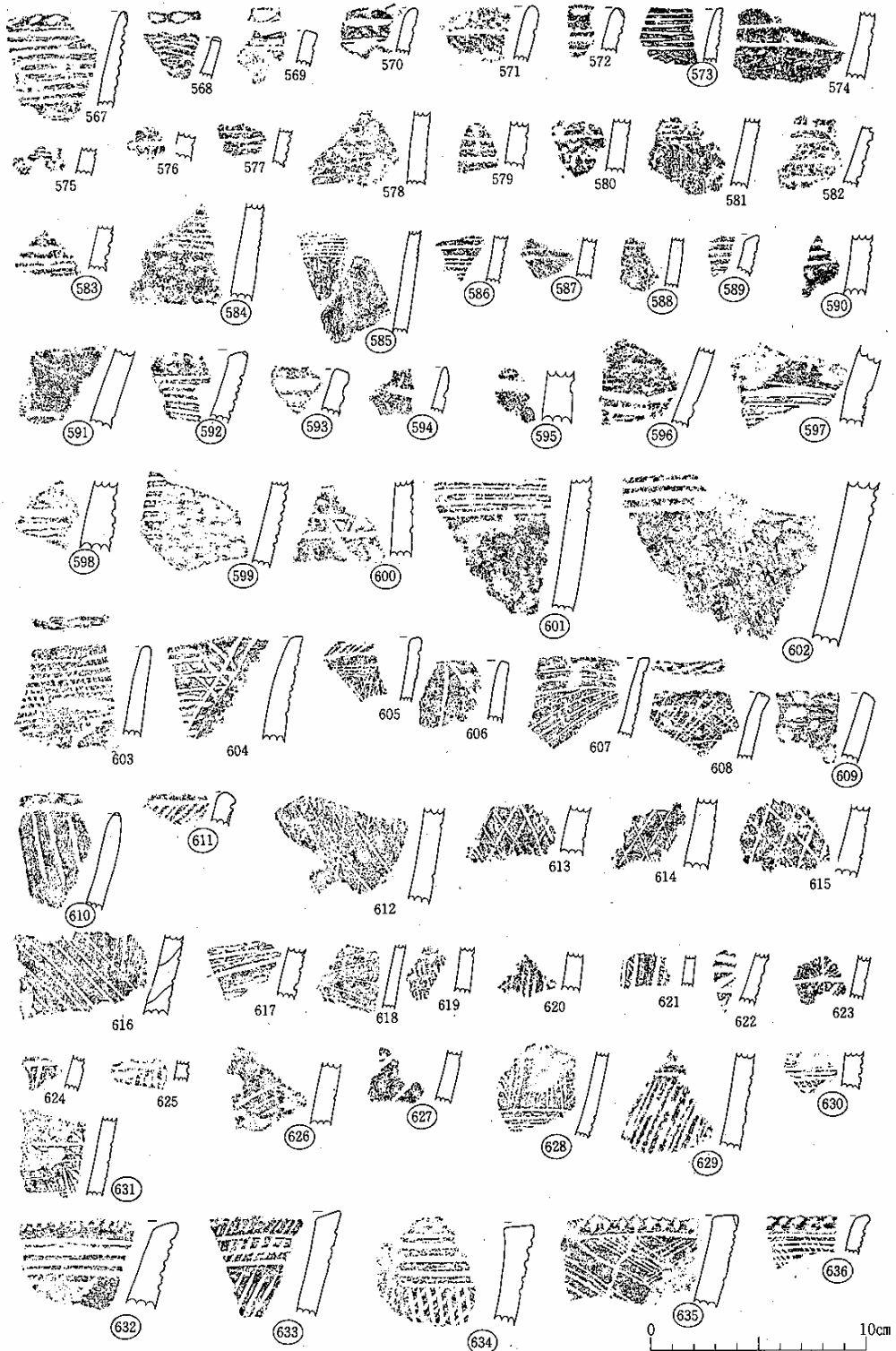


第29圖 遺構以外出土遺物(3)





第30圖 遺構以外出土遺物(4)



第31図 遺構以外出土遺物(5)

(○印は繊維を含まない)

には縦長の刻目が施文されている。632、633、636～641 は平行沈線と斜線が交わって、634・635・642～644・646・647 は斜線どうしが交わって格子状文となっており、648～657 は数条の平行沈線内に短沈線を充填して格子目になっている。格子目は短沈線の充填の仕方により、ほぼ正方形に近いものと菱形のものがある。この格子目は帯状に数本施文されており、矢羽状のもの(648)、コの字状のもの(656)などもみられる。沈線は断面U字形のものやや鋭いものとみられる。

器厚は6～13mm だが、10mm 以上のものが多い。胎土は細礫を多く含んでいる。焼成は良好で、色調は赤色・赤橙色・橙色・黄褐色・浅黄橙色・灰褐色である。繊維を含んでいない。

658～673 は非常に幅の広い沈線が斜めに施文されているものである。658 だけが口縁部破片で、他は体部破片である。器形はほぼ外傾し、口唇部形態はやや内削ぎ状で、口唇部に刻目はみられない。沈線は幅が広く、浅く施文されており、右上がりになっている。底面には擦痕状のものがみられる。器厚は6～11mm で、胎土には細礫を含み、焼成は悪い。色調は灰褐色である。繊維を含んでいない。

674～680 は刺突文が施文されている土器である。674 は口縁部破片であるが、器形は外傾し、口唇部形態は外削ぎ状になっている。674 は縦長の刺突が、675、676 は紡錘形の刺突が、それぞれ横に連続して施文されており、677、678 は先端の鋭い施文具による刺突が、679 はV字状の刺突が、それぞれ連続して斜め方向に施文されている。器厚は6～10mm、胎土には細礫を含んでおり、焼成は良好である。色調はにぶい褐色である。繊維を含まない。

681～683 は細隆起線文が施文されている土器である。器内外面が条痕によって調整されており、その上に細い粘土紐を張りつけている。器厚は4～6mm、胎土には細礫をほとんど含まない。焼成は良好で、色調は黄褐色である。繊維を含まない。

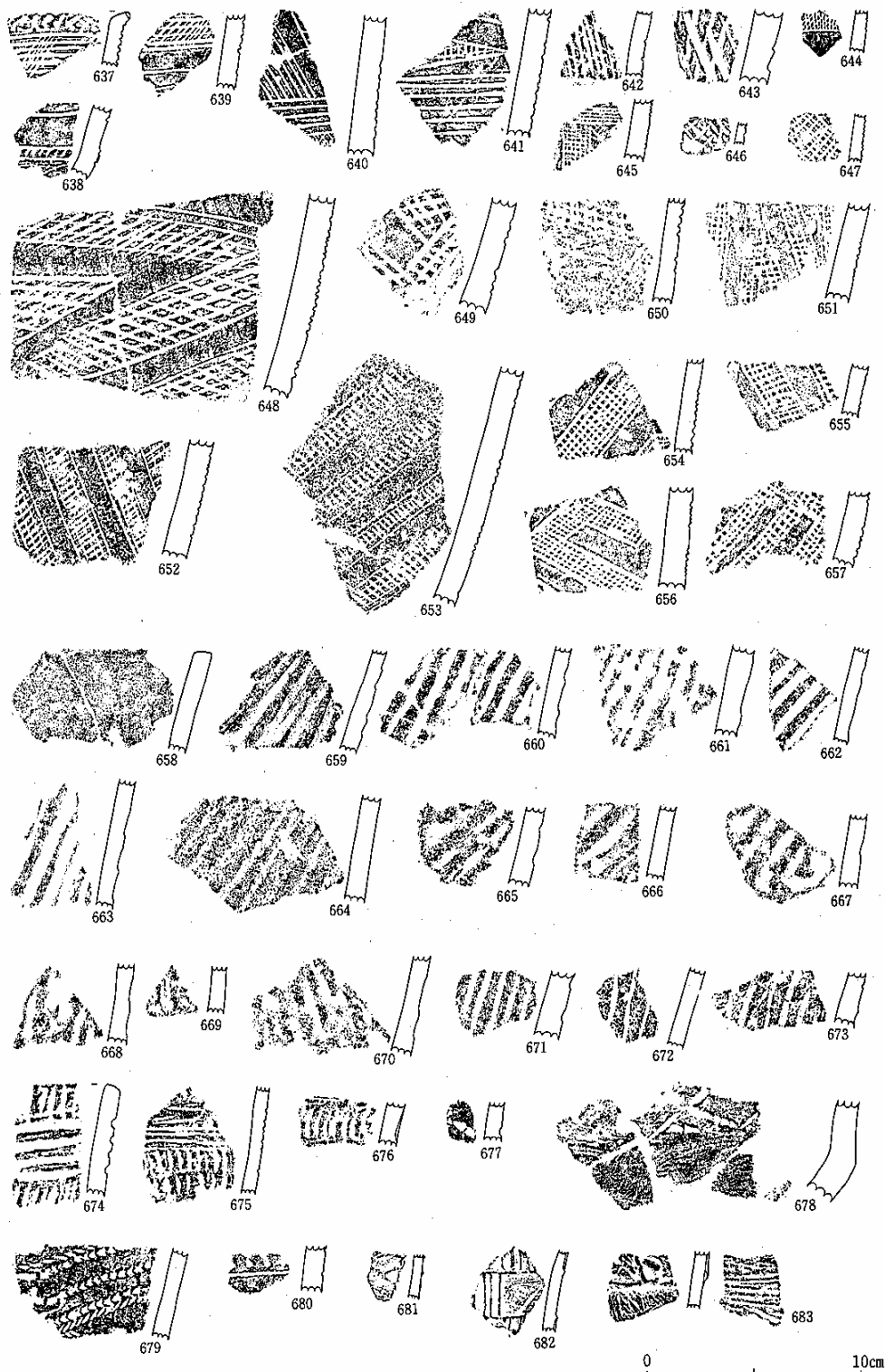
684～715 は条痕が施文されている土器である。裏面は条痕のものと縦方向のミガキのみられるものがある。器厚6～14mm だが、ほとんどは6～8mm である。胎土には細礫を含んでいる。焼成はやや良である。色調は赤橙色・黄褐色・灰褐色である。繊維を含んでいるものといないものがある。

### **須恵器** (716、717)

甕：2点出土している。いずれも甕の体部破片である。調整は外面平行叩き、内面青海波である。時期は不明である。

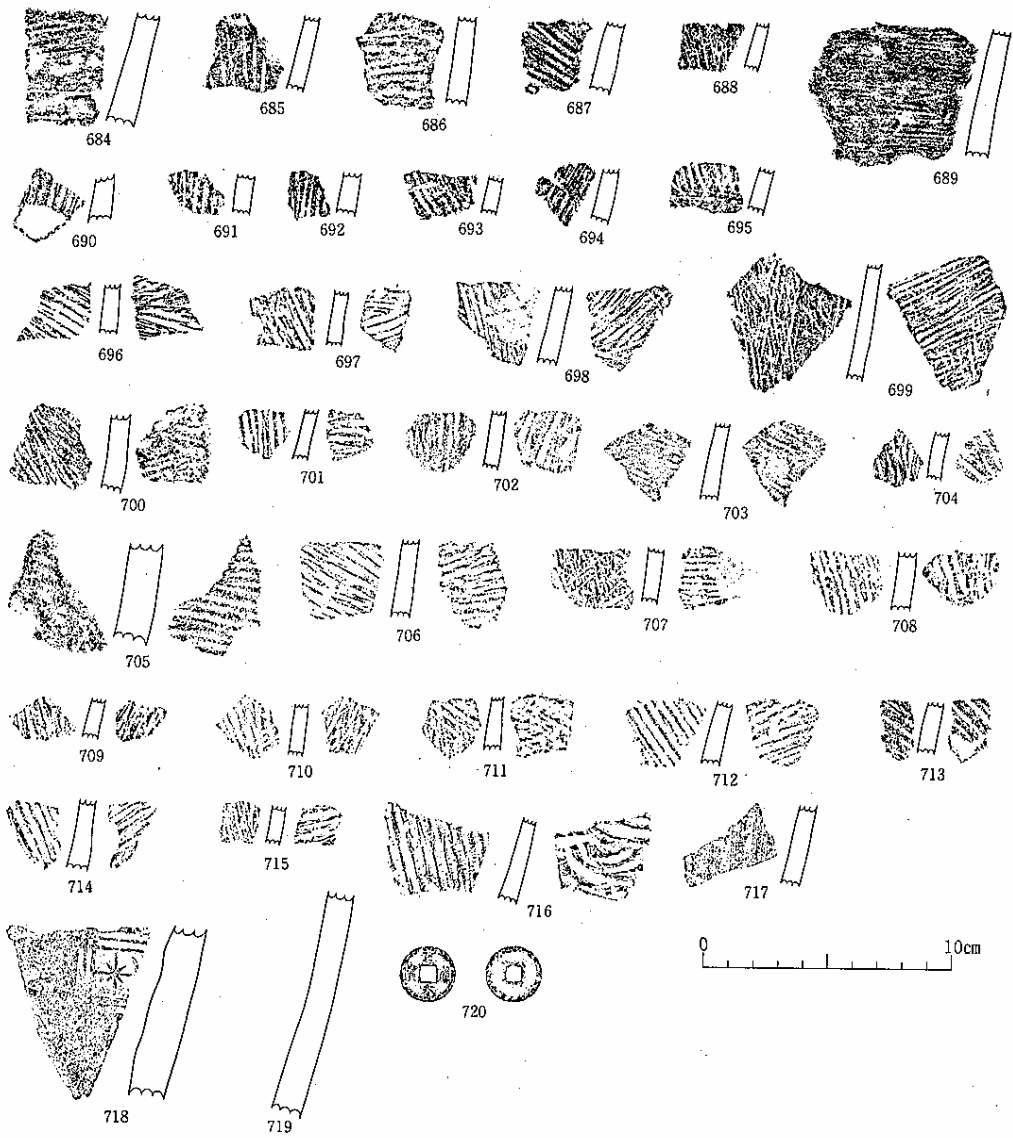
### 中世陶器(718、719)

壺・甕類：2点出土している。いずれも体部破片である。わずかに内湾ぎみに外傾する。718 は押印がみられる。時期は特定できない。



第32図 遺構以外出土遺物(6)

(すべて繊維を含まない)



第33図 遺構以外出土遺物(7)

古銭(720)

寛永通宝が1枚出土している。初鑄年代は1636年である。

## 石器 (第 34～40 図 48～133)

石鏃・錐・筥状石器・円形搔器・不定形石器などの剥片石器・ピエス・エスキュー、およびその素材となる剥片・打製石斧・石皿・凹石・磨石などの礫石器とがある。

### 石鏃(48～51)

4点出土している。いずれも先端部を欠損しており、48・49は基部の一部も欠損している。すべて基部にえぐりを入れた凹基のものである。48のえぐりが最も深く、50、51は浅い。尖頭部側縁はいずれもわずかにふくらんでいる。51はb面中央に自然面がみられる。49はa面全面に入念な二次加工が施されているが、b面は中央に一次剥離面を残している。50はa面の中央に一次剥離面を残している。48はa、b面とも中央に一次剥離面がみられる。50、51の基部は左右非対象である。

### 錐(52、53)

2点出土している。52は完形、53は錐部先端が一部欠損している。52はa面右側縁とb面右側縁に片面加工が施され、一端が尖頭状に作り出されている。52はa面両側縁に片面加工が施され、一端を尖頭状に作り上げている。52の錐部先端付近には磨耗がみられる。

### 筥状石器(54～66)

13点出土している。59～62は一部欠損しているが、他は完形である。刃部はすべて片面加工によるものだけである。最大長が5.3～6.9cm、最大幅が3.6～4.7cmの大形のもの(54、55、57)と、最大長が3.0～4.2cm、最大幅が2.4～3.3cmの小形のもの(56、58、63～66)とがある。59～62は最大長は欠損のため不明であるが、最大幅が3.7～4.1cmであることから、大形のものと思われる。刃部はほぼ直線的なもの(54～56)と大きく弯曲するもの(57～66)とがある。刃角は79°～50°で、60°前後のものが一番多い。側刃は両側または片側に調整剥離が施されている。断面は55・56が扁平な凸レンズ形、57～66が蒲鋏形に近い形のものである。

### 円形搔器(67、68)

2点出土している。完形である。刃部はいずれも片面加工によるものである。67は最大長が約3.7cm、最大幅が約3.8cmのやや小型のもので、68は最大長が約5cm、最大幅が約4.3cmの大形のものである。円形または長円形の器体のほぼ全周に急斜度調整による刃部がみられる。断面はいずれも蒲鋏形に近い形を呈する。

### 不定形石器(69～117)

50点出土している。69が両面加工による刃部を有するだけで、他はすべて片面加工である。a面の両側縁に刃部がみられるもの(70～78)、b面の両側縁に刃部がみられるもの(79～81)、a面の右側縁だけに刃部がみられるもの(82～91)、a面の左側縁にだけ刃部がみられるもの(92～99)、b面右側縁だけに刃部がみられるもの(100～102)、a面側縁とb面側縁とに刃部がみら

れるもの(103～109)、a面またはb面の下縁に刃部がみられるもの(110～117)とがある。やや急斜度調整による刃部を有するもの(72、73、84、96)、ややえぐりぎみの刃部が数回の剥離によって作り出しているもの(99、101)、などもある。剥片は素材剥片がほとんどと思われるが、中には調整剥片と思われるような剥片に刃部を作り出しているものもみられる。103などは薄くて縦長の剥片に刃部を作り出している。a面またはb面に自然面のみられるものが比較的多くみられる。

#### ピエス・エスキーユ(118)

1点出土している。最大長約5cm、最大厚約0.9cmである。四辺形で両極剥離痕を有している。刃角は40°～60°である。素材の面を大きく残している。

#### 剥片(119～124)

390点出土している。このうち周縁の一部に微細剥離痕の認められるものは38点である。

#### 打製石斧(125)

1点出土している。完形である。斧頭部と刃部幅がほぼ同じである。刃縁はわずかに丸味がみられる。a面には自然面が、b面中央には一次剥離面がみられる。側縁はわずかにふくらんでいる。

#### 石皿(126～128)

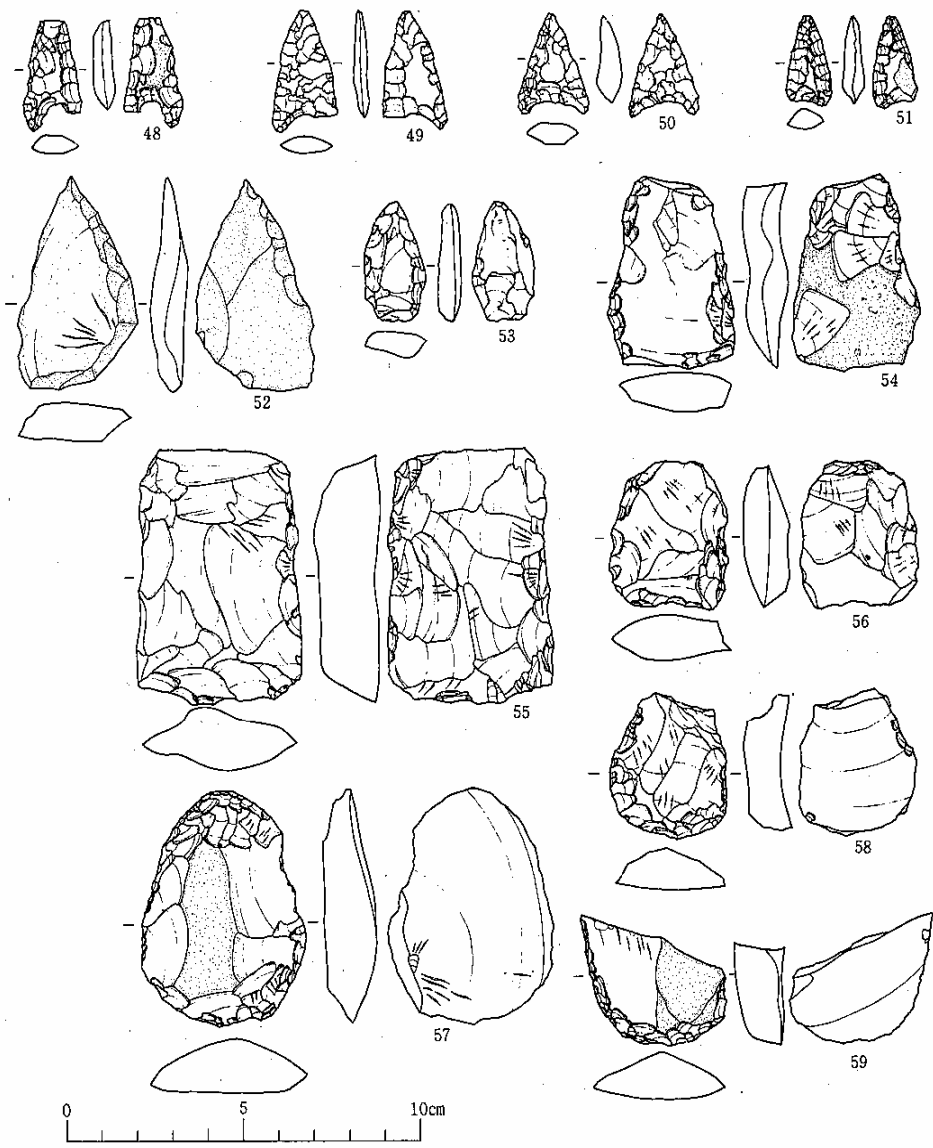
3点出土している。126は完形で、他は欠損品である。片面だけに磨面を有するものである。3点とも磨面がわずかに凹んでおり、無縁のものである。126は大形のもので、磨面には多数の細長い傷がみられる。裏面には自然面のままで、大きな凹凸がみられる。127は全体が加熱を受けており、表面が赤変している。全体に細かい<sup>ひび</sup>輝が走っており、非常にもろく、大きく2つに割れている。3点とも自然の河原石を使用している。

#### 凹石(129～132)

4点出土している。129、130は不定形、131は楕円形、132は円形の礫で、129～131は上下両面に、132は上面にそれぞれ1～3個のくぼみがみられる。くぼみは直径約1～2cm程の円または楕円形のもものがほとんどだが、132は直径約4.5cmの大きなくぼみとなっている。132は両面に多数の細長い傷がみられる。また、縁片に使用痕が認められ、磨石としても使用されていたものと思われる。

#### 磨石(133)

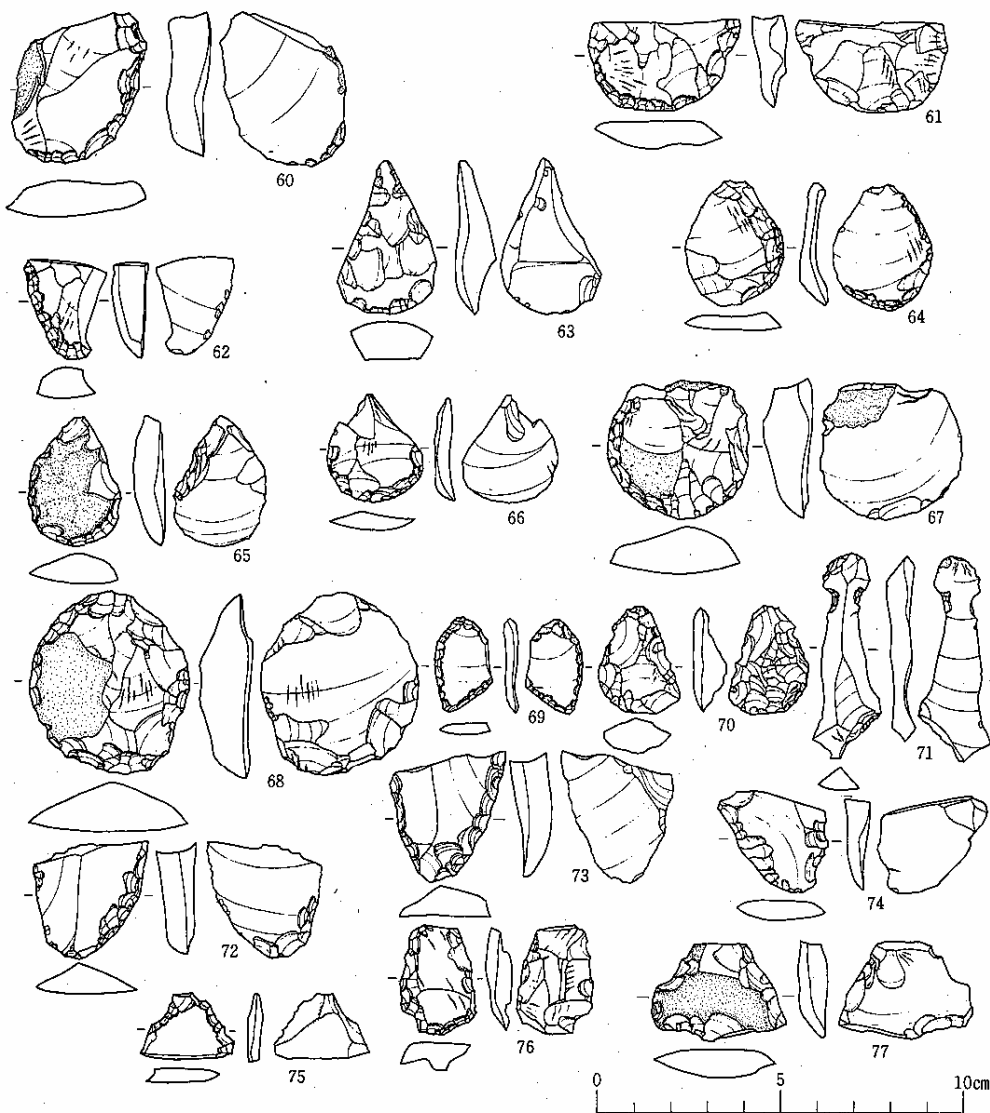
いわゆる特殊磨石と呼ばれているものである。両端が欠損している。3つの面がみられ、断面三角状を呈している。三面全部と3つの角に磨面がみられ、3つの角は長軸方向への研磨により、すべて幅約1cmにわたって平になっている。



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石	材
48	石 鏃	F・G-68-Ⅲ	(31)	(20)	6	2.1	珪 質	頁 岩
49	石 鏃	G-71-Ⅲ	(33)	(18)	4	1.7	珪 質	頁 岩
50	石 鏃	H-68-Ⅰb	28	20	7	2.1	珪 質	頁 岩
51	石 鏃	H-70-Ⅲ	(25)	12	5	0.6	珪 質	頁 岩
52	錐	G-70-Ⅲ	58	34	12	19.3	石 英	安 山 岩
53	錐	G-69-Ⅲ	(33)	18	6	3.0	珪 質	頁 岩
54	斧状石器	G-72-Ⅰb	54	36	13	23.6	石 英 安 山 岩	質 凝 灰 岩 (珪 化)
55	斧状石器	G-71-Ⅲ	69	47	19	74.5	珪 質	頁 岩
56	斧状石器	H-68-Ⅰb	41	33	14	22	石 英 安 山 岩	質 凝 灰 岩 (珪 化)
57	斧状石器	G-74-Ⅰb	64	47	17	48	珪 質	頁 岩
58	斧状石器	G-69-Ⅱ	40	33	20	20.4	珪 質	頁 岩
59	斧状石器	G-69-Ⅱ	(40.2)	37	15	20.3	珪 質	頁 岩

第34図 遺構以外堆積土出土遺物(8)





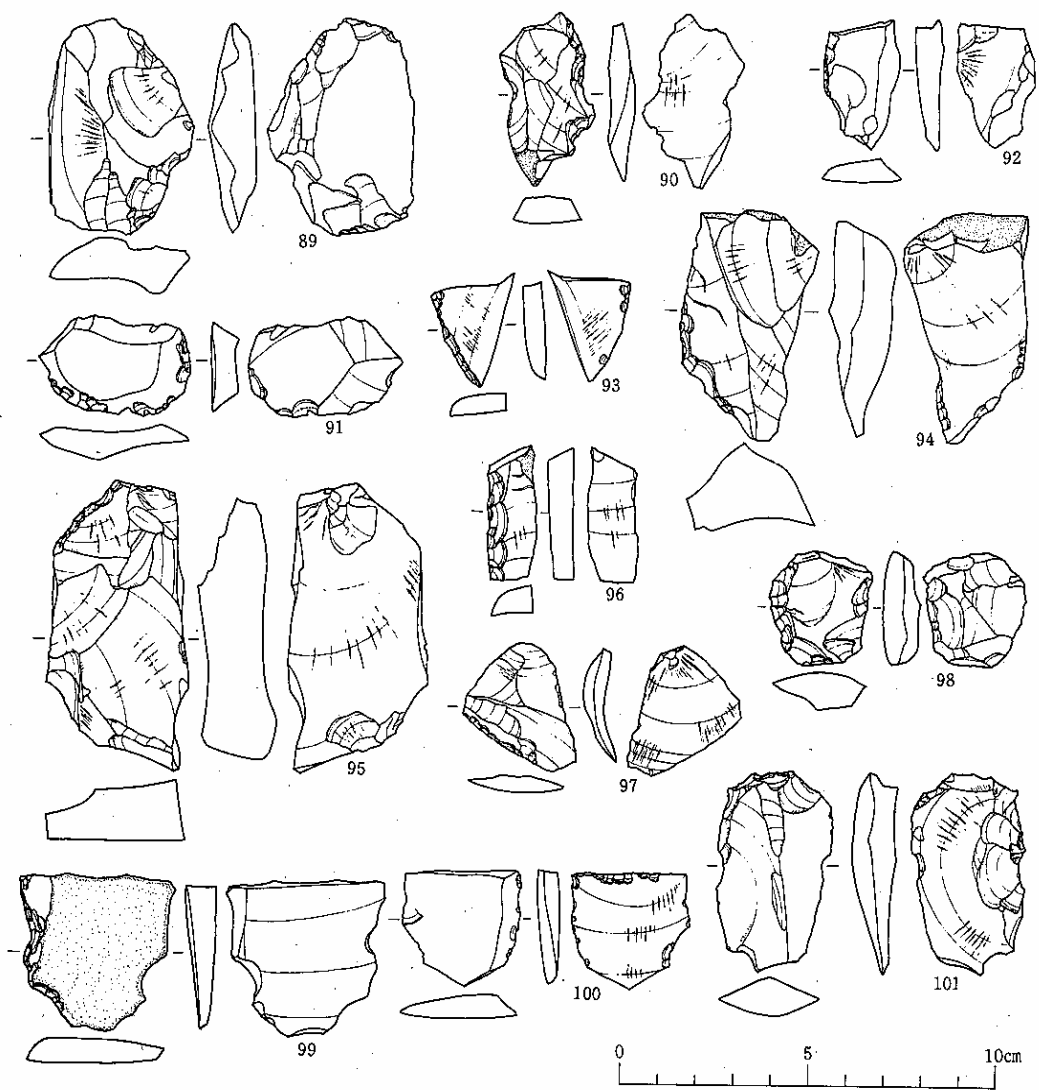
番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
60	腕状石器	H - 68 - I b	(41)	36	13	19.4	玉すい
61	腕状石器	I - 70 - III	(24)	41	9	7.8	珪質頁岩
62	腕状石器	P - 90 - I a	(26)	22	9	4.8	珪質頁岩
63	腕状石器	H - 68 - x	43	27	9	8.5	珪質頁岩
64	腕状石器	D - 72 - III	34	27	6	3.5	珪質頁岩
65	腕状石器	P - 90 - I b	36	25	8	7.0	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
66	腕状石器	F - G - 68 - III	29	26	6	3.6	珪質頁岩
67	円形播器	B - 67 - I a	37	38	19	21.1	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
68	円形播器	F - 70 - II	50	43	14	31.8	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
69	不定形石器	P - 63 - x	26	(16.5)	4	1.1	珪質頁岩
70	不定形石器	F - 68 - III	30	23	9	3.1	珪質頁岩
71	不定形石器	F ~ G - 68 ~ 70 - I b	56	19	7	4.1	珪質頁岩
72	不定形石器	G - 68 - II	34	31	11	6.9	珪質頁岩
73	不定形石器	F - 70 - III	(33)	32	10	7.8	珪質頁岩
74	不定形石器	E - 68 - III	(25)	32	7.4	3.8	珪質頁岩
75	不定形石器	F - G - 68 - 70 - I b	(18)	26	4	1.6	珪質頁岩
76	不定形石器	F - 69 - I b	30	21	7.5	4.1	珪質頁岩
77	不定形石器	H - 73 - III	(26)	36	8.7	7.6	珪質頁岩

第35図 遺構以外堆積土出土遺物(9)



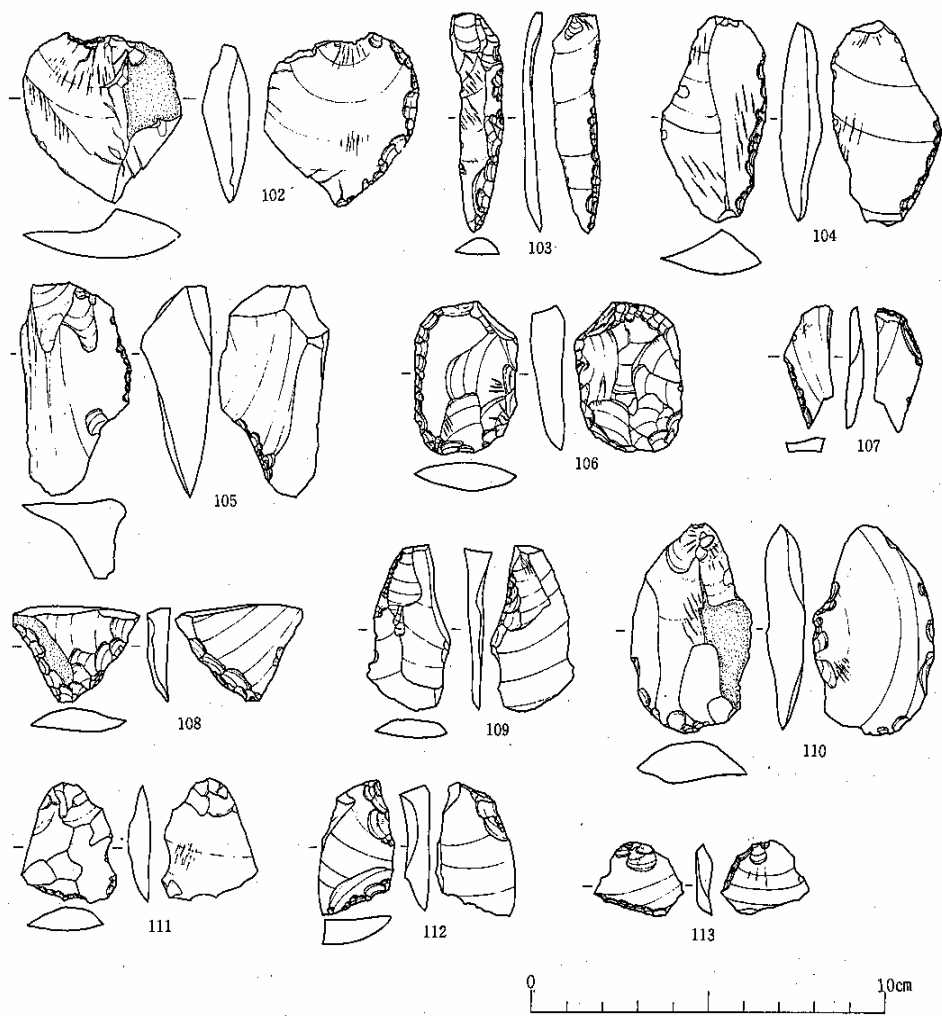
番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材
78	不定形石器	H-68-I b	51	43	9	14.1	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
79	不定形石器	E-68-III	(26)	26	8	4.2	珪質頁岩
80	不定形石器	E-48-III	45	35	12	10.7	珪質頁岩
81	不定形石器	H-68-I b	52	43	19	41.8	珪質頁岩
82	不定形石器	P-82-x	105	51	23	110.2	珪質頁岩
83	不定形石器	G-71-I b	41	20	7	4.7	珪質頁岩
84	不定形石器	D-68-III	(50)	(31)	9.2	11.0	珪質頁岩
85	不定形石器	G-71-I b	43	69	13	52.4	珪質頁岩
86	不定形石器	G-69-III	43	29	11	12.3	石英安山岩質凝灰岩(珪化)
87	不定形石器	E-68-III	29	45	11	12.7	珪質頁岩
88	不定形石器	F-70-I b	34	29	12	8.6	珪質頁岩

第36図 遺構以外堆積土出土遺物(10)



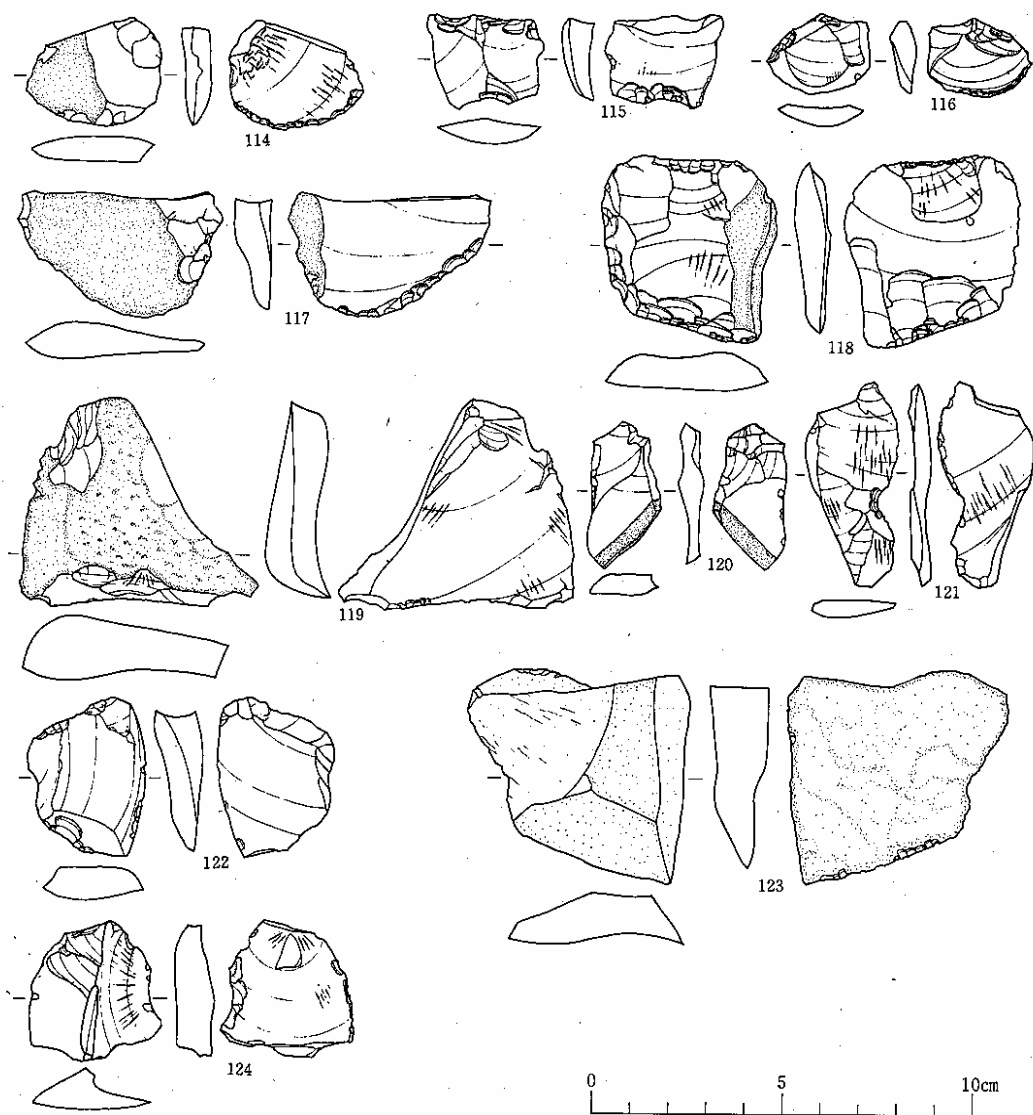
番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
89	不定形石器	G-71-I b	59	38	12	29.5	珧質頁岩
90	不定形石器	P-96-x	47	24	7	7.4	珧質頁岩
91	不定形石器	G-68-I b	(34)	21	8	4.1	珧質頁岩
92	不定形石器	H-69-I b	28	40	9	7.9	珧質頁岩
93	不定形石器	E-68-III	(31)	(22)	5.4	3.3	石英安山岩質凝灰岩
94	不定形石器	G-67-III	64	35	20	37.5	石英安山岩質凝灰岩 (珧化)
95	不定形石器	E-68-III	80	(34)	20	59.1	珧質頁岩
96	不定形石器	G-69-III	37	14	9	4.9	石英安山岩質凝灰岩 (珧化)
97	不定形石器	G-67-III	32	34	5	3.5	珧質頁岩
98	不定形石器	P-90-x	31	28	9	6.8	珧質頁岩
99	不定形石器	E-68-III	(42)	42	14	14.2	珧質頁岩
100	不定形石器	H-68-I b	31	31	6	6.1	珧質頁岩
101	不定形石器	P-96-x	(30)	30	11	16.6	石英安山岩質凝灰岩 (珧化)

第37図 遺構以外堆積土出土遺物(11)



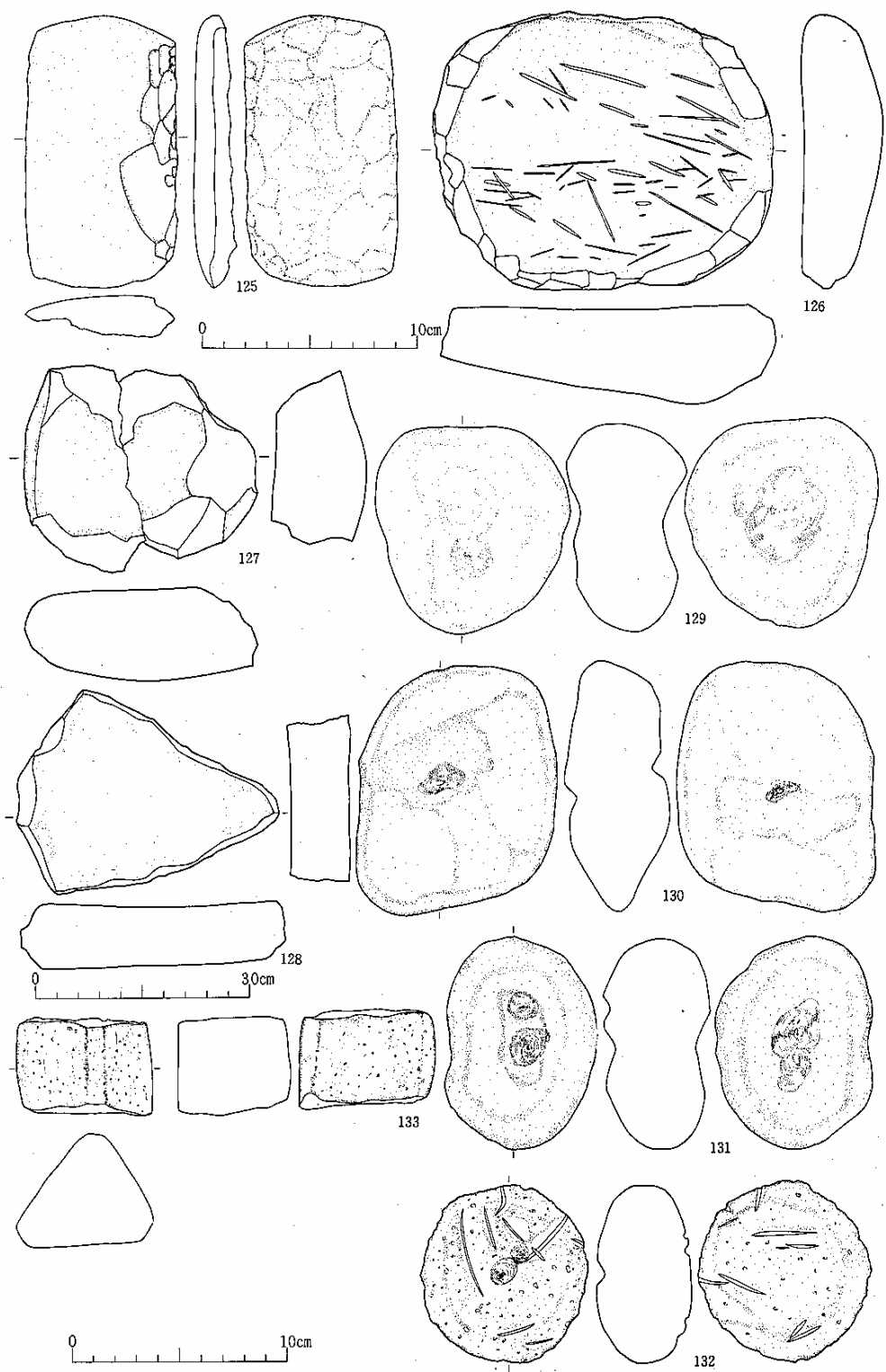
番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
102	不定形石器	H - 74 - III	48	43	12	17.3	珪質頁岩
103	不定形石器	G - 67 - III	60	19	5	2.9	珪質頁岩
104	不定形石器	G - 69 - II	56	29	12	14.4	珪質頁岩
105	不定形石器	H - 72 - II	57	34	20	24.9	石炭安山岩質凝灰岩
106	不定形石器	E - 68 - III	43	30	10	12.2	珪質頁岩
107	不定形石器	G, - 67 - III	34	8	4	1.7	珪質頁岩
108	不定形石器	E - 68 - III	(26)	36	6	4.7	珪質頁岩
109	不定形石器	FG - 68 - III	45	24	8	4.5	珪質頁岩
110	不定形石器	G - 68 - I b	57	34	11	21	珪質頁岩
111	不定形石器	FG - 68~70 - I b	32	27	6	3.5	珪質頁岩
112	不定形石器	H - 68 - II	39	21	9	5.2	珪質頁岩
113	不定形石器	G - 72・73 - I b	20	25	3.7	1.7	玉ずい

第38図 遺構以外堆積土出土遺物(12)



番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
114	不定形石器	G - 69 - III	32	56	7	7.9	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
115	不定形石器	F・G - 68~70 - II	25	30	8	3.8	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
116	不定形石器	P - 16 - x	20	23	6	2.7	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
117	不定形石器	H - 69 - I b	(32)	53	11	16.9	珪質頁岩
118	ピエス・エスキュー	G - 69 - I b	50	46	9	25.6	珪質頁岩
119	剝片	G - 67 - III	57	61	14	44.6	珪質頁岩
120	剝片	I - 70 - II	39	19	7	4.1	珪質頁岩
121	剝片	E - 48 - III	56	24	5	4.4	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
122	剝片	I - 68 - III	43	30	12	11.8	石英安山岩質凝灰岩 (珪化)
123	剝片	E - 68 - IV	59	58	16	46	石英安山岩
124	剝片	H - 61 - III	37	34	11	10.8	珪質頁岩

第39図 遺構以外堆積土出土遺物(13)



第40図 遺構以外堆積土出土遺物(14)

番号	種別	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
125	打製石斧	G-67-Ⅲ	125	71	20	300	輝石安山岩
126	石皿	x	468	378	132	28000	輝石安山岩
127	石皿	I-68-Ⅰb	(330)	(285)	126	2500	石英閃緑岩
128	石皿	E-68-Ⅲ	(369)	(282)	87	2320	輝石安山岩
129	凹石	G-71-Ⅰb	95	91	56	485	石英安山岩
130	凹石	FG-68~70-Ⅰb	115	94	50	550	石英安山岩
131	凹石	G-69-Ⅰb	97	72	50	410	石英安山岩
132	凹石	x	80	76	44	320	安山岩
133	磨石	D-69-Ⅲ	(44)	63	53	260	石英安山岩

### Ⅲ. 遺物と遺構に関する考察と問題点

#### 1. 遺物

出土した遺物には縄文土器、石製品およびその素材となる石核・剥片、須恵器、中世陶器、古銭とがある。そのうち、須恵器、中世陶器、古銭については前章でその位置づけについて記述を行なっている。ここでは縄文土器と石器を中心に考察を行ないたい。

#### (1) 遺構からの出土遺物

最初に各遺構から出土した土器について考えてみたい。土器は第1、2号住居跡が床面と堆積土から第1～3 堅穴状遺構が堆積土から出土している。(以下第1、2住、第1～3 堅とする。) 堆積土は各遺構とも2～3層認められる。量の多少はみられるが、各堆積層とも土器がみられる。しかし、各遺構ごとにみても、床面、各堆積層とも土器そのものや組成に大きな変化がみられない。このことから、これらは大きな時間差を示しているものとは考えられない。

		第1住		第2住		第1堅		第2堅		第3堅		計
		口縁部	体部	口縁部	体部	口縁部	体部	口縁部	体部	口縁部	体部	
縄文	縄文→沈線文		16		14		10		4		3	47
	縄文→沈線文		3	1	4	1	4	1	6			20
押型文	同一原体施文	重層山形文			5		12		15		6	58
		重層菱形文					6		9		3	20
		平行線状文	4	10		3	3	4	2	5	2	33
		その他の押型文		1					1		1	3
	二種の原体施文	重層山形文 または→平行線状文 重層菱形文		11		3		2		6		3
	押型文および縄文									2	2	
	重層山形文 または→沈線文 重層菱形文	4	7		4				12			27
	重文部		6 1(底部)		1		1					9
	無文			1				1		1		2
沈線文	平行(横型)	2	2				2		1		3	11
	斜位、格子状、または重層山形状など		7				1		5		1	14
	計	10	86	2	34	4	42	4	64	1	24	271

第1表

ここでは1つの遺構内から出土した土器は時間的差があまりないものとして捕えておきたい。なお、第2住出土沈線文土器、第1堅出土条痕文土器については、堆積土の一部にみられた攪乱部近くから出土しており、遺構内堆積土出土土器とは考えられない。また、土器そのものにも器厚、胎土、焼成、色調、繊維の有無等において遺構内堆積土出土土器とは著しい違いがみられ、遺構内堆積土出土土器とするには不確定要素が多いので、ここでははずしておく。したがって、各遺構でほぼ同時期と考えられる土器をまとめてみると次の様になる。(第1表)

まず、ここで最初に各遺構から出土した土器の器形について考えてみたい。各遺構とも全体の器形が判明する土器は出土していない。しかし、口縁部、体部、底部破片からある程度の器形を推察する事は可能である。口縁部破片は各遺構から出土しているが、器形はほとんどが大きく内外湾することなくほぼ外傾し、口唇部形態は多様で一定していない。口唇部には刻目のみられるものと、みられないものがあるが、前者が多い。器厚は口縁部から体部にかけて増している。体部破片はわずかに内湾ぎみに外傾しており、わずかに外反ぎみのもみられるが、大きな屈曲などはみられない。器厚は体部から底部にかけて増している。底部は第1住からただ1点だけ出土している。砲弾状の尖底で尖底部がわずかに膨らんでいる。その他の遺構からは底部が出土していないが、底部近くの破片、口縁部、体部破片が各遺構とも類似している事から、各遺構出土土器は大小の違いがみられても、器形にはそれほど大きな違いはなかったものと思われる。したがって、これらから推察される器形は口縁部ほぼ外傾、体部から底部にかけてわずかに内湾ぎみに外傾し、尖底部がわずかに膨らんだ砲弾状の尖底深鉢形と思われる。口唇部には大部分の土器に刻目がみられる。

次に文様についてみてみたい。文様には縄文、押型文、沈線文、無文(無文部かもしれない)とがある。縄文が施文されているのは原体が0段多条とそうでないものがある。(第1、2住、第1、2堅) 縄文施文の口縁部破片はすべて口縁部に横位に平行沈線が加えられている。(第2住、第1、2堅) 体部破片でも縄文施文の後横位に平行沈線が加えられているものもある(第1、2住、第1、2堅)が、これらは口縁部近くの破片である可能性も考えられる。

押型文の施文原体には重層山形文(全遺構)、重層菱形文(第1住、第1～3堅)、平行線状文(全遺構)、平行線状文内蔵重層菱形文(第1住)、菱形格子目文(第2堅)、矢羽状文(第3堅)とがある。さらに重層菱形文には菱形区内の内部を区画にあわせて菱形を重ねるものと、菱形の内部へ平行線を充填するものとがみられる。(いずれも第1住、第1～3堅)、また、平行線状文には横位に平行施文するもの(全遺構)と、横位に平行施文後、重ねて斜位に施文したもの(第1住)とがある。押型文施文の口縁部破片はすべて平行線状文が施文されたもの(第1住、第1、2堅)だけである。押型文には平行線状文と重層山形文または重層菱形文とが組み合わせられて施文されているものがある(全遺構)。重層山形文が2段にわたって、重層菱形文が4



段にわたって帯状にほとんど密接して施文されているものが存在する事、体部破片には無文部の破片がないことからすると、これらは器面全体に施文されていた可能性がある。ただし、底部および底部付近の破片が無文部になっている(第1、2住、第1 壜)事から、底部近くには施文されていなかったと思われる。ここで注目されるのは平行線状文の部位である。体部破片でみるかぎりでは、先に施文された重層山形文、重層菱形文の上位に位置している例が多い。しかし、器厚が口縁部から体部にかけて増すという特徴と土器の弯曲からすると、これらの下位に位置していたと考えざるを得ない土器もある。重層菱形文が4段にわたってみられる44では下位の4段目に施文されており、必ずしも口縁部に近い方に施文されていたとはいえない。しかし、口縁部破片では押型文が施文されている土器は平行線状文が口縁直下から施文されているものがすべてであること、平行線状文が重層山形文や重層菱形文が施文された後に施文される事、体部破片でも重層山形文や菱形文よりも上位に位置しているものが多いこと、平行線状文だけが密接して施文されているものが存在しないことなどから、平行線状文は同じ押型文でも重層山形文や重層菱形文が何段にもわたり、あたかも地文的に器面に施文されるのとは違い、ある程度部位を意識して施文された可能性が強く、文様のな要素をもった押型文として区別して考えるべきものと思われる。

沈線だけが施文されているのは口縁部破片では横位に平行施文されているもの(第1住)だけである。体部破片では横位に平行施文されているもの(第1住、第1～3 壜)、斜位に施文されているもの(第1住、第1～3 壜)、横位に平行施文された沈線と重層山形状のモチーフの沈線を重ねて施文しているもの、格子状に施文しているもの(以上第1住)等がある。

無文のものはすべて口縁部破片(第2住、第2 壜)である。小破片のため無文部の破片である可能性もあるが、ここでは無文としておく。

以上の文様についてまとめてみると、縄文施文のものは原体に0段多条のものともそうでないものがあり、各遺構から出土している。施文後加えられた沈線に著しい違いはみられない。押型文施文のものは平行線状文施文のものは全遺構から出土している。そのほかに第2住出土の押型文は山形を重層させたもの(重層山形文)だけが、その他の遺構では山形・菱形文を重層させたもののほかに菱形区画の内部を平行線で充填したものがみられる。また、平行線状文の施文は全遺構とも横位回転によるものだが、第1住のそれにはさらに斜位に重ねて施文し、格子状のモチーフを作り出しているものがある。沈線文だけ施文の土器は第2住出土土器にだけみられない。沈線は横位に平行施文されているものが多いが、第1住出土土器には横位に平行施文された沈線と重層山形状のモチーフの沈線を重ねて施文しているもの、格子状に施文されているものなどがみられる。

以上のことから、各遺構出土土器には次の様な違いがみられる。最も大きな違いは押型文施

文土器にみられる。第2住出土土器は平行線状文、重層するものだけで構成されているのに、第1住・第1～3堅出土土器は平行線状文、重層するもの他に区画の内部を充填するもので構成されている。また、縄文施文原体も第2住出土土器は0段多条のものが多く、第1住・第1～3堅のそれは少ないという傾向がみられ、第1住・第1～3堅には第2住にみられない沈線だけが施文されている土器が伴出している。したがって、ここでは土器そのもののあり方や構成等の違いから第2住出土土器と第1住・第1～3堅とに大きく分ける事ができる。ここでは仮に前者を第Ⅰ群土器、後者を第Ⅱ群土器とする。

さて、これらの構成をなす土器は日計式とされているものの範疇に属するものである。日計式は初期においては、早期初頭（佐藤、渡辺：1958）と早期末葉・前期初頭（笹津：1960）とに位置づける見解がみられたが、唐貝地貝塚（佐藤、渡辺：1958）、岩手県蛇王洞洞穴（芹沢、林：1965）、瓢箪穴遺跡（菊池：1969）の層位的発掘調査で貝殻沈線文土器より先行する事が確認され、現在では貝殻沈線文土器以前、縄文早期前葉の編年の位置が与えられている。

それでは、本遺跡における第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器とはどのような有り方を示しているのだろうか。ここで第Ⅱ群土器の中でも第1号住出土土器について注目したい。（以下第Ⅱ群土器（第1住）とする。）第Ⅱ群土器（第1住）には、平行線状文（押型文）が横位に平行施文されるだけでなく、それに斜位に施文したものを重ね格子状のモチーフを施文したものの、横位と斜位の沈線を重ね格子状のモチーフを施文したものなどがみられる。この様なモチーフは大平遺跡出土土器（竹島：1958）に類例を見出す事ができる。ここで表採資料である大平遺跡出土土器についてみると、器形は底部尖底で乳房状尖底が出土していない。口唇部形態は平坦なもの、丸頭状のもの、尖頭状のものもあるが、内削ぎ状のものがほとんどで口唇に刻目をもつ。文様は横位または斜位に施文された平行沈線、横位施文の平行沈線に斜位または直行する平行沈線が組み合わせられているもの、格子目文、帯状格子目文が施文されているのがみられる。

これを第Ⅱ群土器（第1住）と比較してみると、類似点としては、器形では（底部は鋭角またはそれに近いものもあるが）やや開いた砲弾状の尖底が存在しており、乳房状尖底土器が出土していないこと、口唇部に刻目を有すること、文様では横位または斜位に施文された平行沈線、横位施文の平行沈線に斜位の平行沈線を重ねたもの、格子文がみられることなどが上げられる。特に、第Ⅱ群土器（第1住）にみられる平行線状文を横位、斜位に施文して作り出された格子状のモチーフと同様のモチーフが大平遺跡出土土器にもみられること、それが押型文でなく、すべて沈線で施文されていることは、押型文が沈線化の傾向をたどったものと解釈すれば、大平遺跡に押型文が存在しない事が理解でき、上記の類似点を合わせ考えると、第Ⅱ群土器（第1住）を大平遺跡出土土器への過渡的なものとして捕える事が可能と思われるのである。なお、第Ⅱ群土器（第1～3堅）については、土器そのものの有り方や構成では第Ⅰ群土器（第

1住)と類似しているが、第Ⅱ群土器(第1住)のように大平遺跡出土土器への過渡的な土器がみられない事から、第Ⅱ群土器(第1住)と同じに位置づけられるかどうかは不明である。

また、第Ⅱ群土器(第1住)にしても、その傾向は十分指摘できるとしても、二者には次の様な相違点もみられる。大平遺跡出土土器は繊維をまったく含まないこと、口唇部形態が内削ぎ状のものが多いこと、胎土に長石を含むものが多いこと、器厚が厚くなること、押型文のなくなり方が急速であることなどである。第Ⅱ群土器(第1住)にも繊維の量が少ないもの、口唇部形態が内削ぎ状のもの、胎土に細礫をわずかに含むもの、器厚が10mmに近いものなども存在するが、その割合は少なく、特徴的なものとはなっていない。したがって、この相違点は大きいものといわなければならない。このことから第Ⅱ群土器→沈線文土器の間にはさらに過渡期にある土器群が存在することも考えられる。また、福島県では、竹の内遺跡(馬目:1981)で日計式押型文土器と山形文施文土器が同一遺跡から出土するなど、しばしば関東または関東以西の遺物の出土がみられる事がある。また関東でも千葉県東寺山石神遺跡(千葉文化財センター:1977)、埼玉県稲荷原遺跡(三友:1966)において断片的に日計式押型文土器が出土しており、これらの事から、土器の有り方には地域的なものも考慮する必要があるのかもしれない。しかし、たとえこれらの事が考えられるとしても、第Ⅱ群土器(第1住)が過渡期にあることは明らかな事であり、第Ⅱ群土器(第1住)を大平遺跡出土遺物の前段階に位置づける事については異論のない事と思われる。

また、第Ⅰ群土器(第Ⅱ群土器とは前述のように土器の有り方、構成等において違いがみられる。)の位置づけについては、第Ⅱ群土器(第1住)にみられた沈線文土器への過渡期のモチーフと考えられる横位と斜位に重ねて施文した平行線状文がみられないこと、流線だけ施文されているのがみられないなどのことから、沈線文土器とのつながりを見い出す事はできない。このことから、第Ⅰ群土器は第Ⅱ群土器(第1住)より古い要素をもつものと思われる。したがって、日計式は本遺跡において第Ⅰ群土器→第Ⅱ群土器(第1住)→(沈線文土器)の変遷をたどる事が可能と思われるのである。

なお、これを前回(1973)検出された住居跡に伴う土器(縄文と押型文施文土器とが出土している。)と比較してみると、縄文施文本体は0段多条がほとんどなく、押型文の施文本体は重層山形文だけで、沈線だけ施文のものがまったく出土しておらず、第Ⅰ、Ⅱ群土器とは土器そのものの有り方や構成等において違いがみられる。この土器群の位置づけについては、第Ⅱ群土器(第1住)で沈線文土器への過渡期的なモチーフを作り出していた平行線状文がまったく出土していない事から、過渡期的なモチーフはないが平行線状文が出土している第Ⅰ群土器より新しくなる可能性は少なく、むしろこれらの前段階にくる可能性が強いものと思われる。しかし、この事がいえるためには、これらの前段階に位置づけられる土器群のあり方の解明な

ど、多くの課題が存在している。ここではその可能性が指摘できる事だけにとどめておきたい。

今回の調査では、押型文から沈線文土器への過渡期にある土器群を明らかにする事ができたが、押型文土器起源の問題、さらに細分化の可能性、関東の撚糸土器との関連など、多くの課題が残されている。これらの課題解決のためにさらに良好な資料の増加が待たれる所である。

### 石器

第Ⅰ群土器に共伴するものとして筥状石器と不定形石器とがある。しかし、わずか6点だけの出土であり、うち5点が不定形石器のため、その詳細等については不明である。

第Ⅱ群土器に共伴するものとして石鏃、錐、筥状石器、不定形石器、石皿、凹石、磨石などがある。出土数も33点と比較的まとまっている。

	第1住	第2住	第1竪	第2竪	第3竪	計
石 鏃	1		1			
錐				3		
筥 状 石 器	2	1	2			
円 形 搔 器						
不 定 形 石 器	8	5	6	2	2	
ピース・エスキーユ						
石 核	1					
剥 片核	3 (72)	(21)	2 (112)	(117)	(40)	
打 製 石 斧						
石 皿	3					
敲 石						
凹 石	3		1			
磨 石	1					
計	22	6	12	5	2	

(( ) は図示遺物以外の数である)

第Ⅱ群土器に伴出した石器について、それぞれの特徴についてまとめてみると次の様になる。石鏃は第1号住居跡、第1竪穴状遺構から各1点ずつ出土している。すべて凹基であり、抉りは比較的深く、器厚はうすいものと厚いものがある。第1号住居跡から出土した石鏃は基部の一部が欠損しているため不明であるが、基部の一方が斜めに切り取られた様な形態のものであった可能性もある。

錐は第2竪穴状遺構から2点出土している。一端を尖頭状にするものと、両端尖頭状にするものがある。いずれも錐部先端には磨耗がみられる。

筥状石器は第1号住居跡、第1竪穴状遺構から各2点ずつ出土している。大形のものと小形のものとがあり、撥形、台形状、長形状のものがある。刃部は直線的なものと弧状を呈するものがあり、刃角は60°～80°で、断面形は蒲鋒形と凸レンズ形に近いものがある。刃角

は約60°のものがほとんどであるが、形態は多様である。

不定形石器は第1号住居跡、第1～3竪から計17点出土している。両面加工のものもあるがほとんどは片面加工により刃部が作り出されているものである。

石皿は第1号住居跡から3点出土している。無縁で、くぼみがわずかであり、磨面以外はすべて自然面である。このような石皿は前回検出された住居跡からも検出されている。

凹石は第1号住居跡から3点、第1竪穴状遺構から1点出土している。くぼみが上下両面にみられるものと上面にだけみられるものがある。くぼみは1～2個であり深くない。

磨石は第1号住居跡から1点だけ出土している。一面にだけ磨面がみられるものである。

以上、第Ⅲ群土器に共伴する石器の特徴についてみてきたが、これらの石器は上記の様な特徴を有しており、磨製石器がみられず、剥片石器と礫石器との組み合わせを示している。

## (2) 表土および堆積層からの出土遺物

### 縄文土器

出土した縄文土器には縄文、押型文、無文、沈線文、刺突文、細隆起線文、条痕が施文されている土器がある。

そのうち、縄文が施文されており繊維を含んでいるもの(280～307、325～340)、押型文施文のもの(341～563)、無文のもの(564～566)、横位に沈線が平行施文されており繊維を含んでいるもの(567～572、574～582)、沈線が斜位または格子状に施文されており繊維を含んでいるもの(603～608、612～625)は各遺構出土のそれらと類似しており、早期前葉に位置づけられるものと思われる。沈線が施文され繊維を含んでいないもの(573、583～602、609～611、626～631)については、文様的には前者の沈線施文土器と類似するものもあるが、繊維を含んでいないことから、これよりは後出のものと思われる。縄文が施文され繊維を含んでいない土器(308～324)については不明である。

さて、ここでは表土および堆積層から出土した土器の中で、施文された沈線に特色があり、量的に比較的まとまって出土した632～657の土器を中心に考察を加えてみたい。ここでこの土器の特徴をまとめてみると次のようになる。口縁部の器形はほぼ外傾する。底部は出土していないので底部の形状については不明である。口唇部形態は角度が急なものと同様なものがあるが、すべて内削ぎ状となっている。ほとんどが口唇部外面に縦長の断面が鋭い刻目を有する。口縁は平縁である。器厚は6～8mmのものもあるが1cm以上のものがほとんどである。胎土は細礫を多く含んでいる。焼成は良好であり、色調は赤色、赤橙色、橙色、黄褐色、浅黄橙、灰褐色とがあるが、前三者が多い。繊維は含んでいない。裏面に口縁部は横方向、体部は縦方向のミガキがみられる。文様はすべて沈線による文様である。口縁部の文様は口縁に平行、斜行

またはそれらが交錯するもので縦走するものはない。沈線の幅は3～4mmの太いものと、1mm前後の細いものがある。体部文様は斜線どうしが交わって格子状文となっているもの、数条の平行沈線内に短沈線を充填して帯状の格子目をしているものがある。このような特徴を有する土器は表採資料ではあるが、福島県大平遺跡（竹島：1958）に見出すことができ、縄文早期中葉に位置づけられるものと思われる。そのほか、沈線だけが施文されている土器には幅広い沈線が右上がりに施文されているもの（658～673）がある。第2住居跡出土の沈線施文土器（101～132）もこれに含まれるものと思われる。これが上記の土器に伴ったかどうかは不明であるが、器厚、胎土等に類似点もみられる事から、これも縄文早期中葉に位置づけられるものと思われる。

刺突が施文されている土器（674～680）も保原平遺跡（後藤：1976）に類例を見る事ができ、縄文早期中葉に位置づけられるものと思われる。

細隆起線文の施文されている土器（681～683）は大綱遺跡に類例を見る事ができ、縄文早期末葉に位置づけられるものと思われる。

条痕が施文されている土器（684～715）は縄文早期末葉に位置づけられるものと思われる。なお、条痕施文土器は第1堅穴状遺構から出土（183、184）しているが、施文されている条痕、胎土、器厚等にこれらとは違いがみられ、時期については不明である。

## 石器

出土した剥片石器、礫石器の大部分は基本層位第Ⅱ～Ⅲ層上面から出土している。この堆積土からは早期初頭～末葉にかけての縄文土器が出土しており、早期末葉以降と思われる土器がほとんど出土していない事から、これらの石器は早期初頭～末葉の土器に共伴している可能性がある。

## 2. 遺構

本遺跡から発見された遺構には住居跡2軒、堅穴状遺構3基がある。これらの遺構は出土遺物から縄文早期前葉に位置づけられ、住居跡については、第2住居跡→第1号住居跡の変遷が考えられた。遺構はいずれも第Ⅲ層上面で確認されたが、住居跡と堅穴状遺構とは壁の状況と堆積土とに大きな違いが認められる。住居跡の壁は比較的急角度で立ち上がり安定しているが、堅穴状遺構の壁は立ち上がりが緩やかで、壁が一部確認されなかったものもある。堆積土では前者が非常に堅く、壁の堅さとほとんど変わらないほどしまりがみられたのに対し、後者は非常にやわらかくしまりがあまりみられなかった事などである。しかし、形状では第1、2住居跡、第2堅穴状遺構とがいずれも方形を基調としており、規模もほぼ同じである事から、住

居跡である可能性も否定できない。しかし、壁の状況等を考えると積極的に肯定する事もできず、ここではその可能性だけを指摘しておきたい。他の二つの竪穴状遺構については前記の事および規模・形状等から住居跡である可能性は非常に少ない。その性格については現段階では不明であるが、出土遺物等から考えれば、当時の何らかの遺構であったものと考えられる。

本遺跡の住居跡はいずれも比較的形の整った方形を基調としている。これは前回検出された住居跡にも共通する事で、この様に本遺跡の住居跡の住居跡のあり方には一つの規則性がみられるのである。

以上のように、本遺跡からは前回検出された住居跡と合わせていずれも早期前葉に位置する3軒の住居跡と3基の竪穴状遺構とが検出されたが、検出場所はいずれも西側から東側にかけて張り出した緩やかな傾斜地の南側に位置しており、ここからまとまって検出されていることから、縄文早期初頭にはこの辺が生活の場として使用されていたものと思われる。

破片集計表

		1 住	2 住	1 竪	2 竪	3 竪	堆積土	計
縄文	不明→沈線	2	1					3
	不明		1	3				4
押型文	平行線状文				1	2	1	4
	不明→平行線状文	1			2		2	5
	不明→沈線	2						2
	不明→沈線	10	5	3	4	1	16	39
部	沈線文			1	2		7	10
	無文部	19	12	9			41	81
	不明	30	14	10	23	2	215	294
計		64	33	26	32	5	282	442

## IV. まとめ

1. 松田遺跡は、白石川によって形成された河岸段丘上に立地している。
2. 調査の結果、遺構として縄文時代早期初頭の住居跡2軒、竪穴状遺構3基が検出され、遺構からは縄文時代早期初頭の縄文土器と石器が、遺構以外からは縄文時代早期初頭～末葉の縄文土器・石器、須恵器、中世陶器、古銭等が出土した。
3. 縄文時代早期初頭の土器は日計式と呼ばれるもので、本遺跡において2群に分ける事ができ、第Ⅰ群土器→第Ⅱ群土器（第1住）の変遷が考えられ、第Ⅱ群土器は沈線文土器群へ継続するものである。
4. 遺構外からは今まで県内でも断片的に出土していた早期中葉の土器が比較的まとまって出土している。

名 称	内 容	原体模式図	基 本 形	モチーフの変化
重層山形文	山形の印刻線の内外部に山形のモチーフを重層させたもの			略
重層菱形文	菱形の印刻線によって区画し、外部には山形のモチーフを重層させ、内部には区画にあわせて菱形を重ねるか、または平行線を充填したもの			
平行線状文	印刻線が回転方向と平行に連続してみられるもの			略
菱形格子目文	四本の印刻線によって囲まれる部分が菱形になるもの			
矢羽状文	矢羽状の印刻線が横に連続してみられるもの			
平行線状文内蔵重層菱形文	平行線状文と重層菱形文が同一原体に印刻されているもの			

第41図



## 〈引用・参考文献〉

- 赤星直忠(1936)：「古式土器の一形式としての三戸式土器について」『考古学』7-9
- 相原淳一(1978)：「東北地方押型文文化に関する考察(一)」山麓文化 第2号  
：「宮城県南部発見の菱形格子目押型文土器」山麓文化 創刊号
- 石岡憲雄(1974)：「東北地方早期縄文時代型式編年に関して」『遮光器』8
- 伊藤 某・伊藤玄三(1977)：「福島県田島町石橋遺跡の押型文土器」法政考古学 1
- 上野佳也(1968)：「押型文文化の前半における発展過程についての研究—長野県菅平遺跡等の文化を中心として—」史学雑誌 77-7
- 岡本 勇(1953)：「相模平坂貝塚」『駿台史学』3
- 岡本 勇・加藤晋平(1963)：「青森県野口貝塚の発掘」
- 岡本孝之(1972)：「稻荷台文化の展(1)(2)」古代文化第二十四卷 第一号
- 雄勝町教育委員会(1963)：「青森県野口貝塚の発掘」『ムゼイオン』9 85-88  
(1977)：『岩井堂岩陰遺跡発掘調査概報—第8次—』
- 大類 誠(1979)：「森岡北遺跡発掘調査概報」さあべい第3巻第2号 さあべい同人会
- 岡本東三(1980)：「神宮寺・大川式押型紋土器について」藤井裕介君追悼記念考古学論集
- 大類誠・山口博之(1981)：「山形県尾花沢市森岡北遺跡出土の回転押型文土器について」  
さあべい第3巻・第3号 さあべい同人会
- 神村 透(1968)：「立野式土器の編年的位置について(一) — (七) 戦前の学史の中で—」信濃 20-10
- 会田 進(1971)：「押型文土器編年の再検討—特に施文法・文様構成を中心として—」
- 菊池強一(1969)：『瓢箪穴遺跡第3次発掘調査報告』  
(1971)：『竜泉洞新洞遺跡発掘調査報告』
- 草間俊一・吉田義昭・成田良夫(1967)：「盛岡市一本松熊の沢遺跡調査報告」郷土資料写真集第10集  
後藤勝彦(1970)：『下窪遺跡』
- 国学院大学考古学研究室(1980)：「壬遺跡」国学院大学文学部考古学実習報告
- 笹津備洋(1960)：「青森県八戸市日計遺跡」史学第三十三巻 第一号
- 白石市史編纂委員会(1976)：『白石市史考古資料篇』
- 杉原荘介・芹沢長介(1957)：「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告考古学第  
二冊 東京明治大学
- 芹沢長介・林 謙作(1965)：「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代 第7号
- 石器文化談話会編(1978)：『座散乱木遺跡発掘調査報告書I』
- 武田良夫・吉田義昭(1970)：「盛岡市大新遺跡」奥羽史談第54号 奥羽史談会
- 中村五郎(1969)：「(-)土器」『福島県史通史編I』52-69
- 中村五郎・生江芳徳(1976)：『磐梯町の縄文土器』
- 榎葉町教育委員会(1972)：『北向遺跡・北向横穴群』
- 西川博孝(1980)：「三戸式土器の研究—千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として—」『古代採叢』1-16
- 丹羽 茂(1973)：「松田遺跡」宮城県文化財調査報告書第 集
- 材 謙作(1962)：「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』9-2、20-31

- 林 謙作(1965)：「11 縄文文化の発展と地域性2 東北」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』64-96
- 原川虎夫・原川雄二(1971)：「いわき市金山中平遺跡について」『福島考古』12. 22-28
- (1974)：「東北地方押型文土器の諸問題—特に福島県いわき市周辺の遺跡を中心に—」  
『遮光器』8. 42-59
- 橋本 正(1974)：「回転押型文土器の基礎的研究」『大境』5
- 原川雄二(1977)：「いわき市小川町江田遺跡の押型文土器」
- 馬目順一・山田廣・原川雄二(1981)：「廣谷地B遺跡調査報告」南奥考古学研究叢刊 第四冊
- 馬目順一(1981)：「竹之内遺跡の概要」財団法人 いわき市教育文化事業団
- 三友国五郎他(1966)：「稻荷原」大宮市教育委員会
- 山内清男(1929)：「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1-2 117-126
- (1935)：「古代縄文土器研究最近の情勢」『ドルメン』4-1
- (1979)：『日本先史土器の縄紋』
- 山下孫述(1970)：「岩井洞岩陰館四洞穴第七次調査報告書」
- 八幡一郎(1972)：「日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究」
- 吉田 格(1951)：「青森県発見の押捺文土器」『考古学ノート』4

図版1

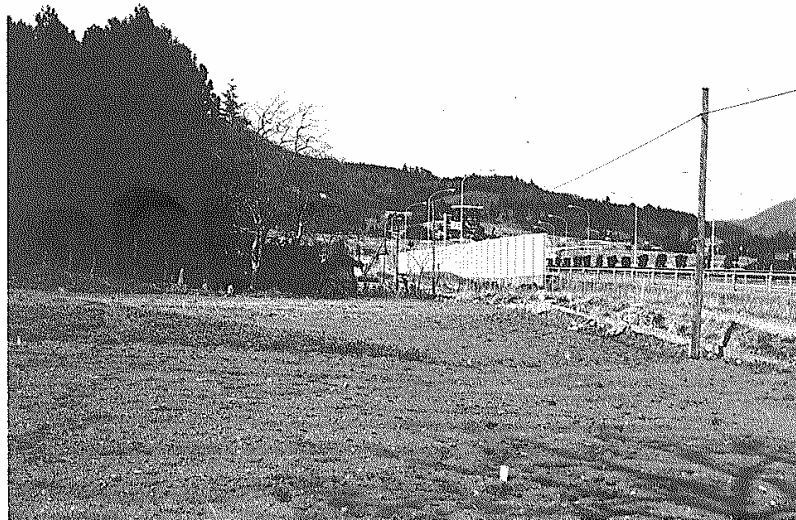
遺跡遠景 (北面より)



遺跡近景  
(発掘前南側から)

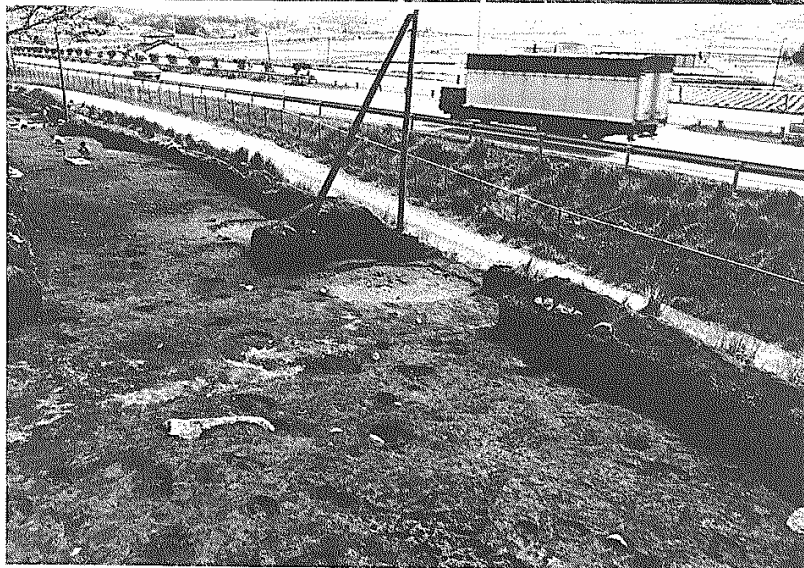


遺跡近景  
(発掘前南側から)

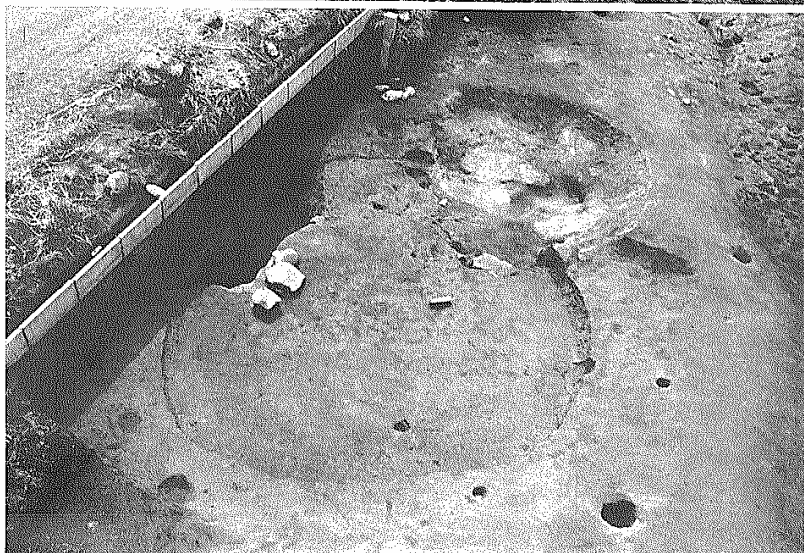




遺跡近景 (南側から)



遺跡近景 (南側から)



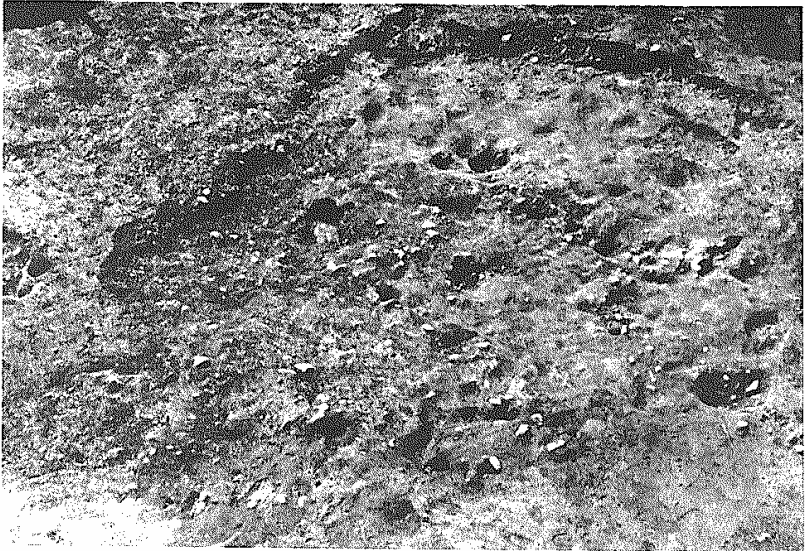
第1号住居跡

図版3

第2号住居跡

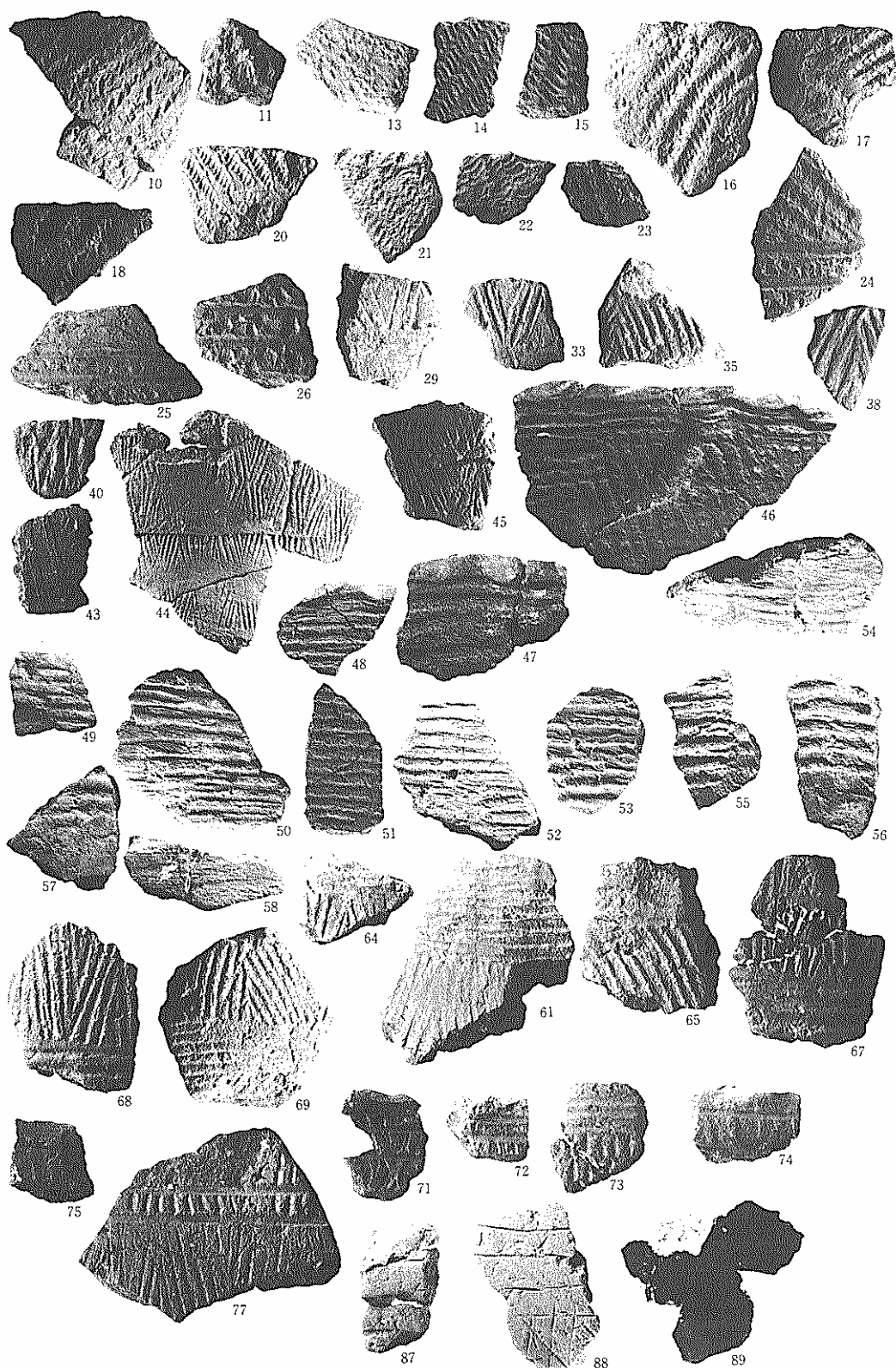


第1号竪穴状遺構

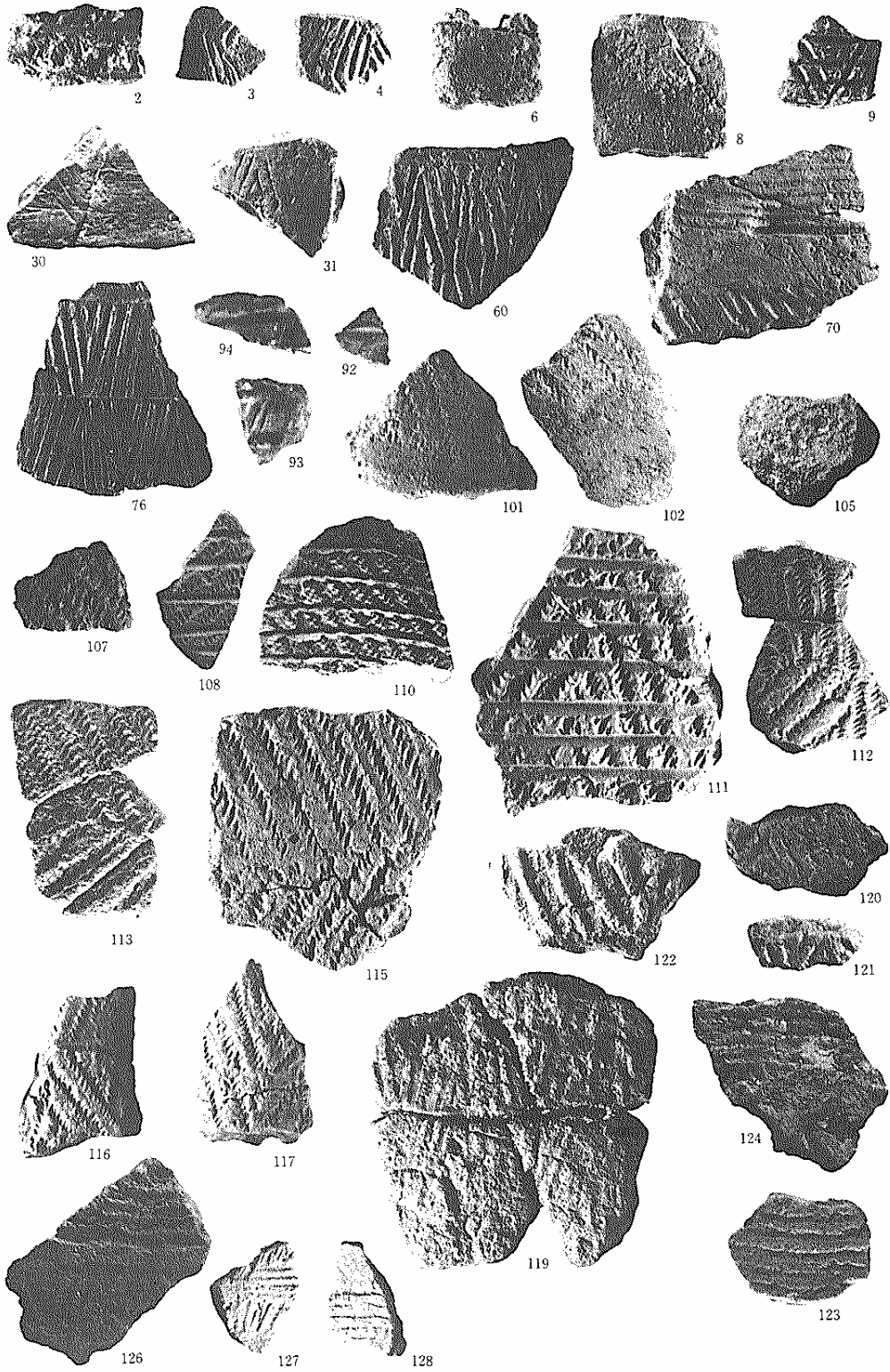


第2号竪穴状遺構

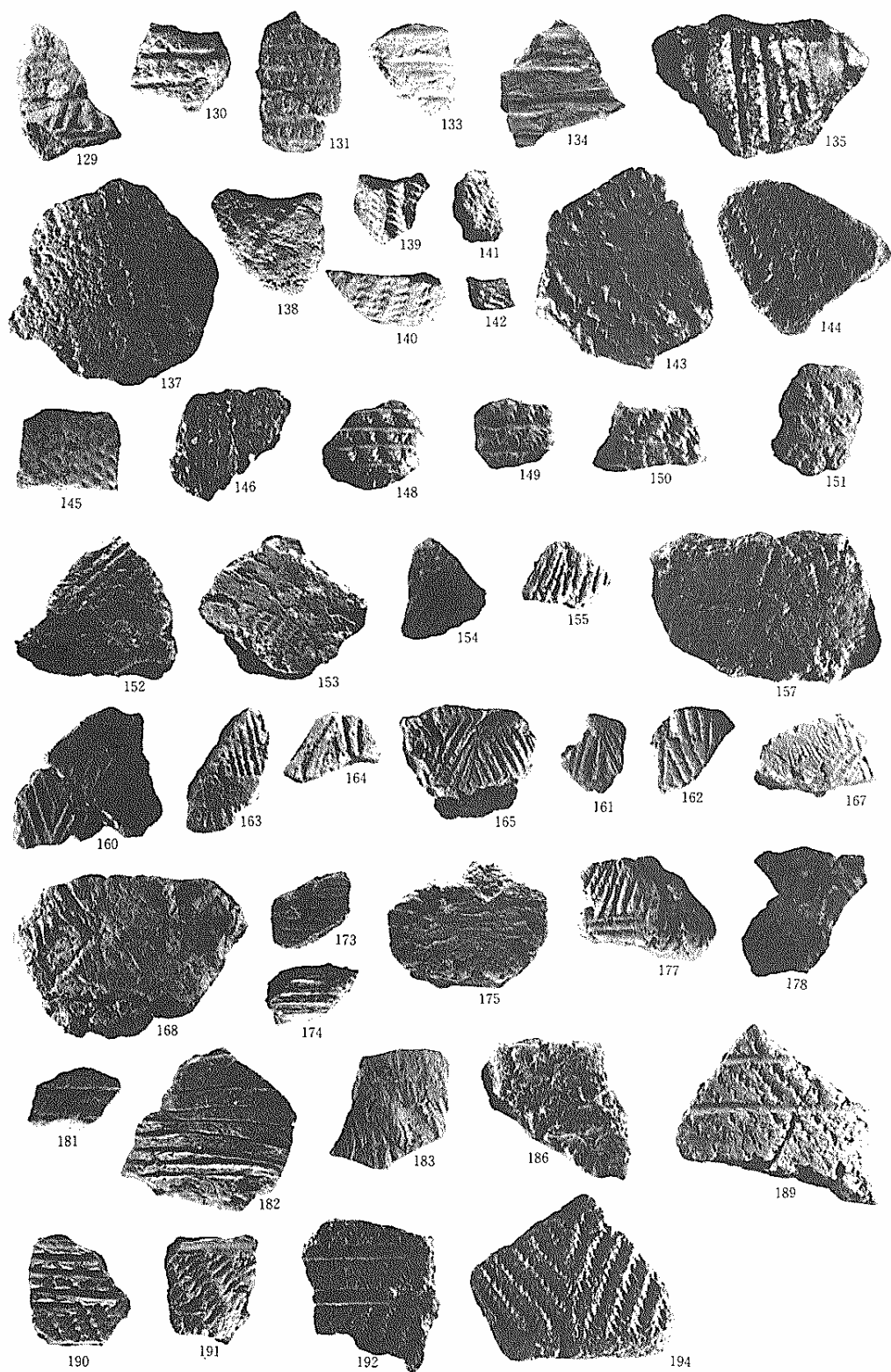




图版 4 第 1 号住居跡出土遺物

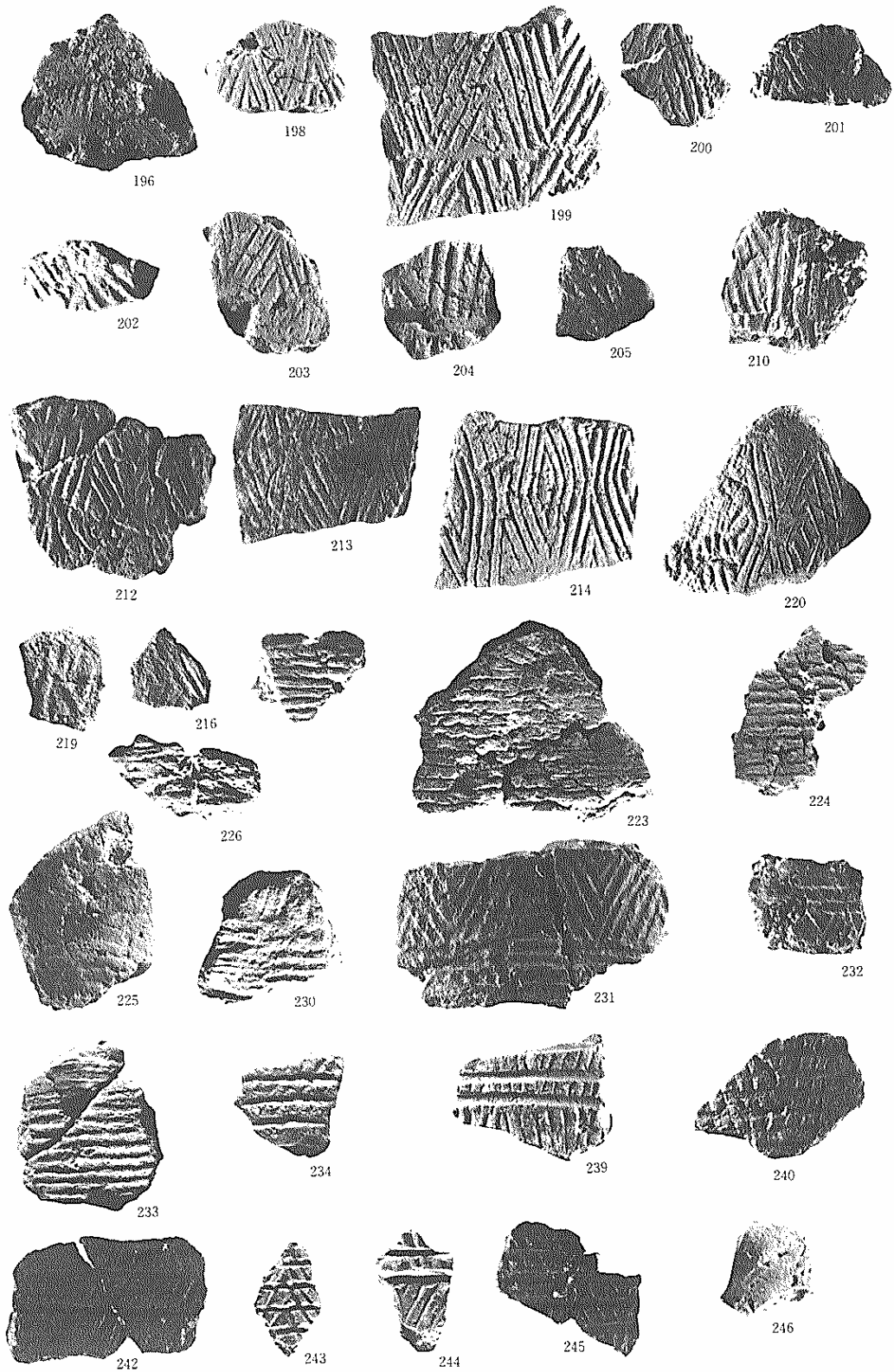


图版5 第1・2号住居跡出土遺物

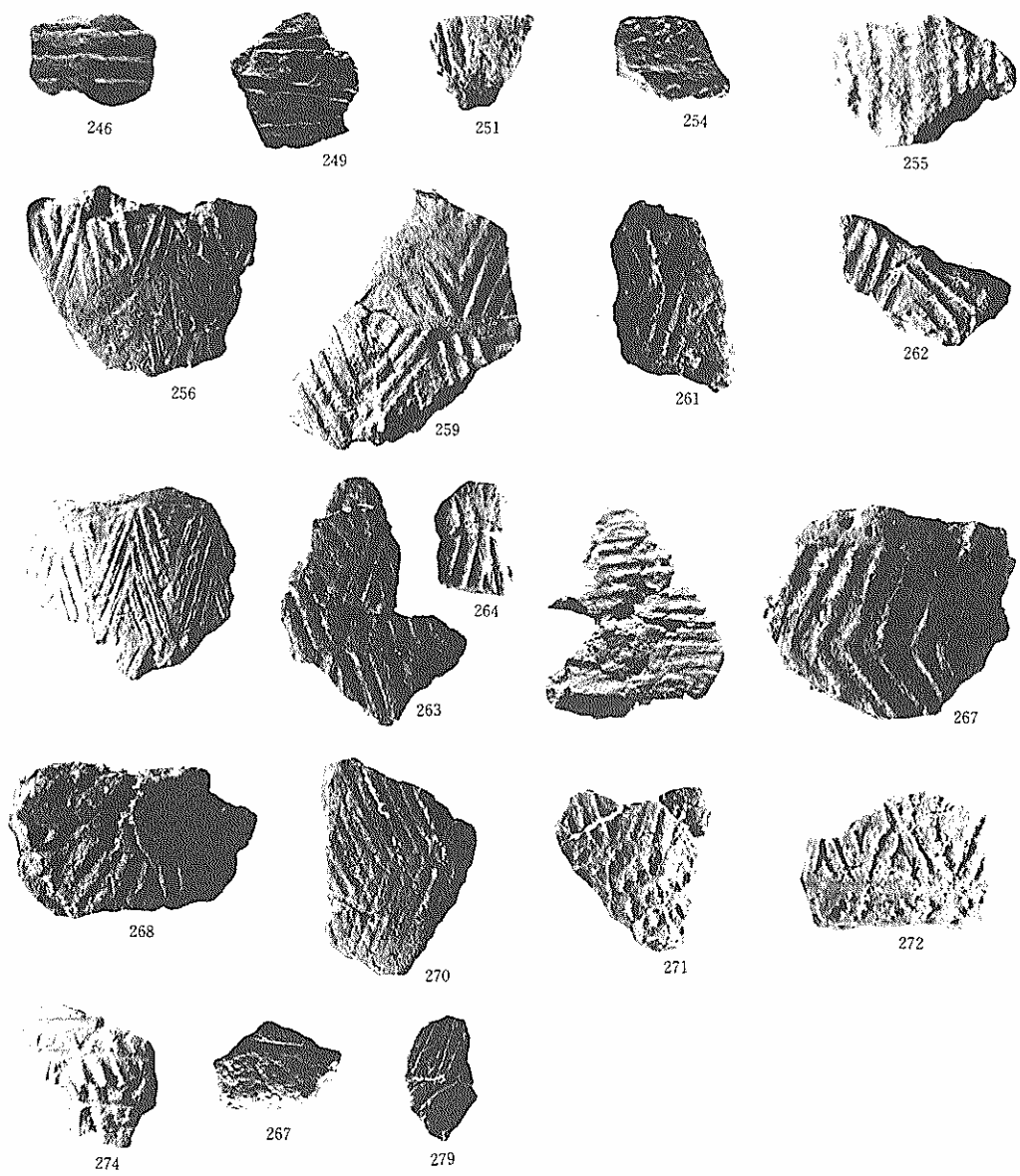


图版6 第2号住居跡、第1・2号竪穴状遺構出土遺物

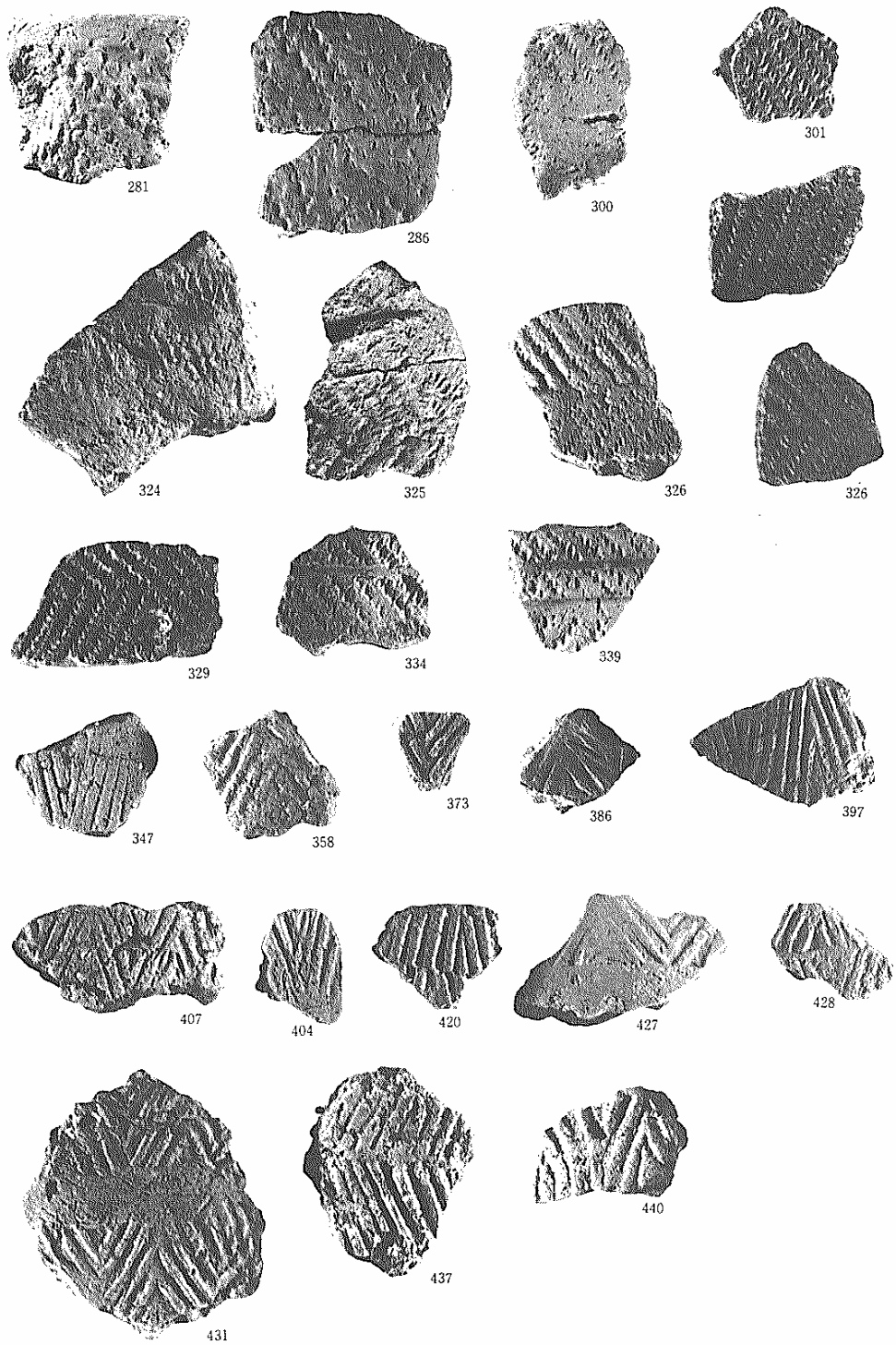




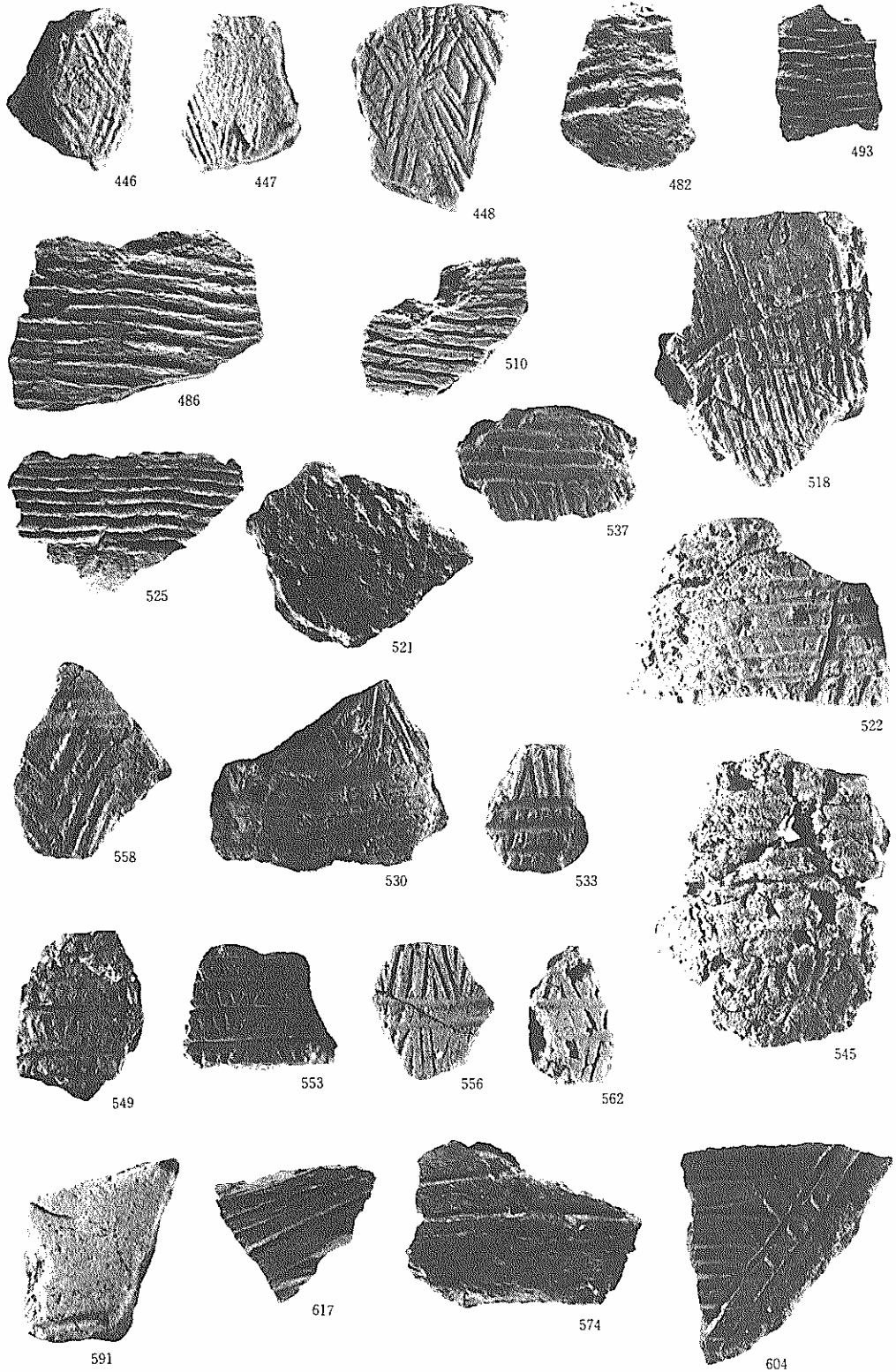
图版 7 第 2 竖穴状遺構出土遺物



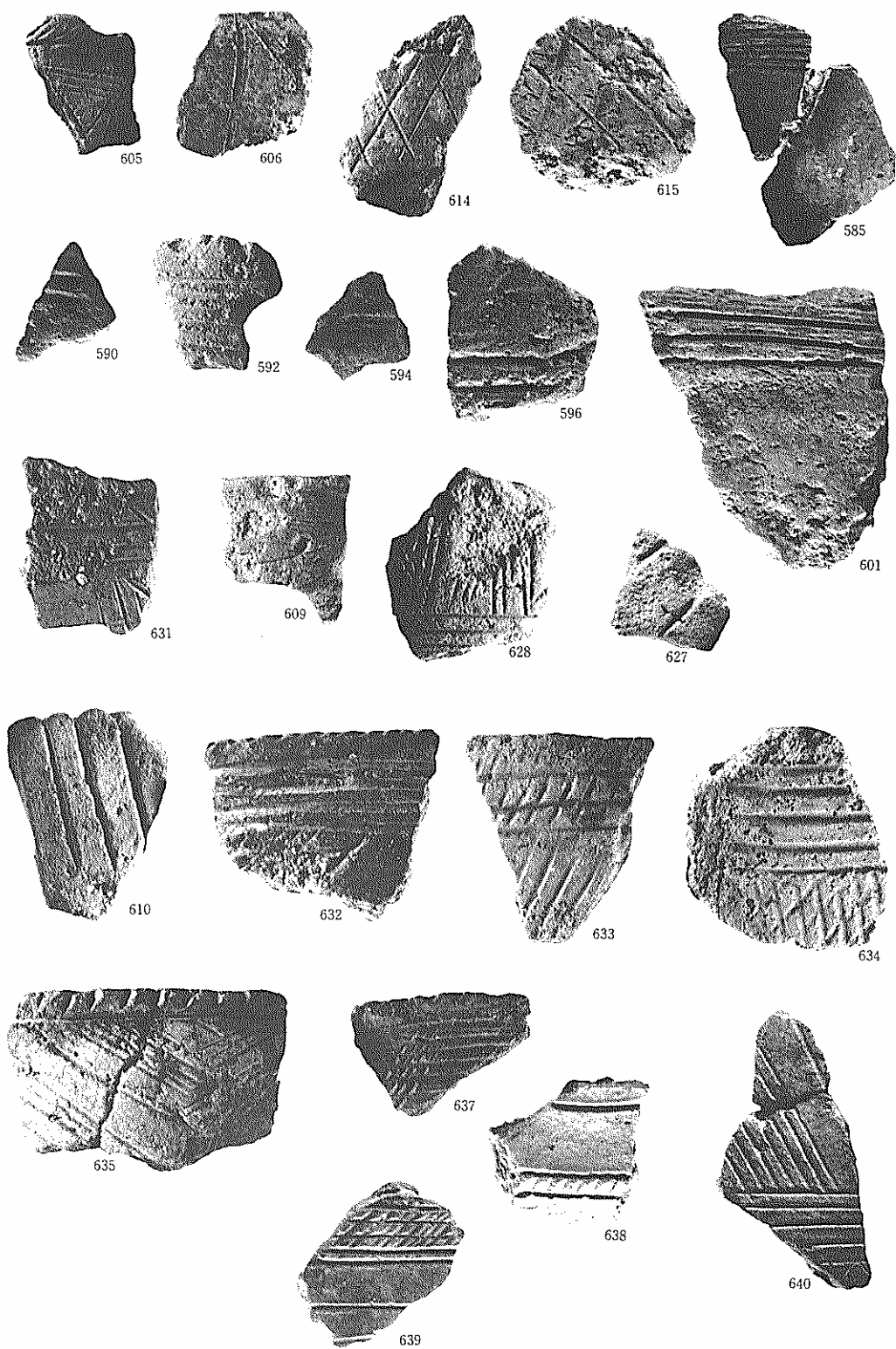
图版8 第2·3 豎穴状遺構出土遺物



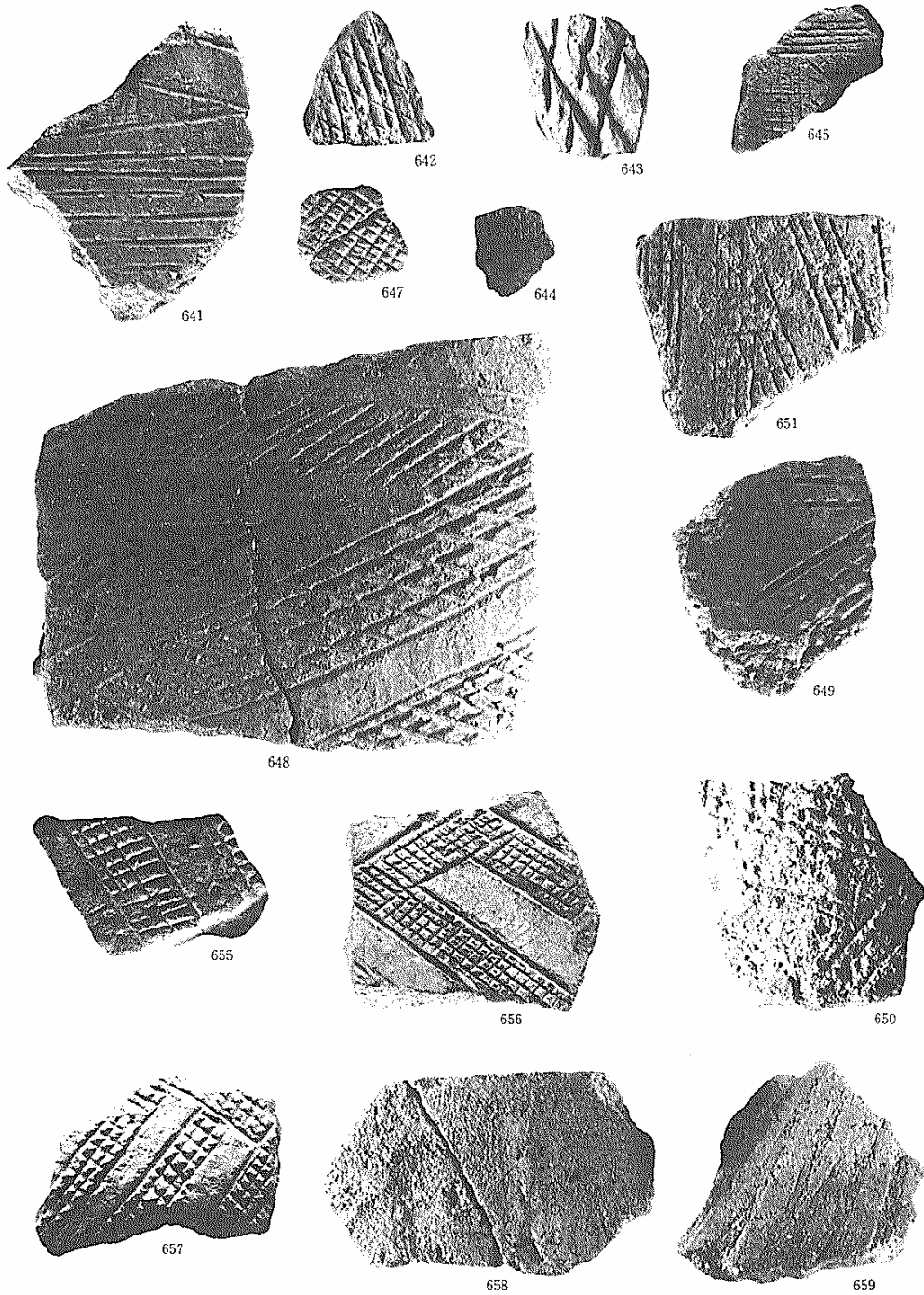
圖版9 遺構以外出土遺物(1)



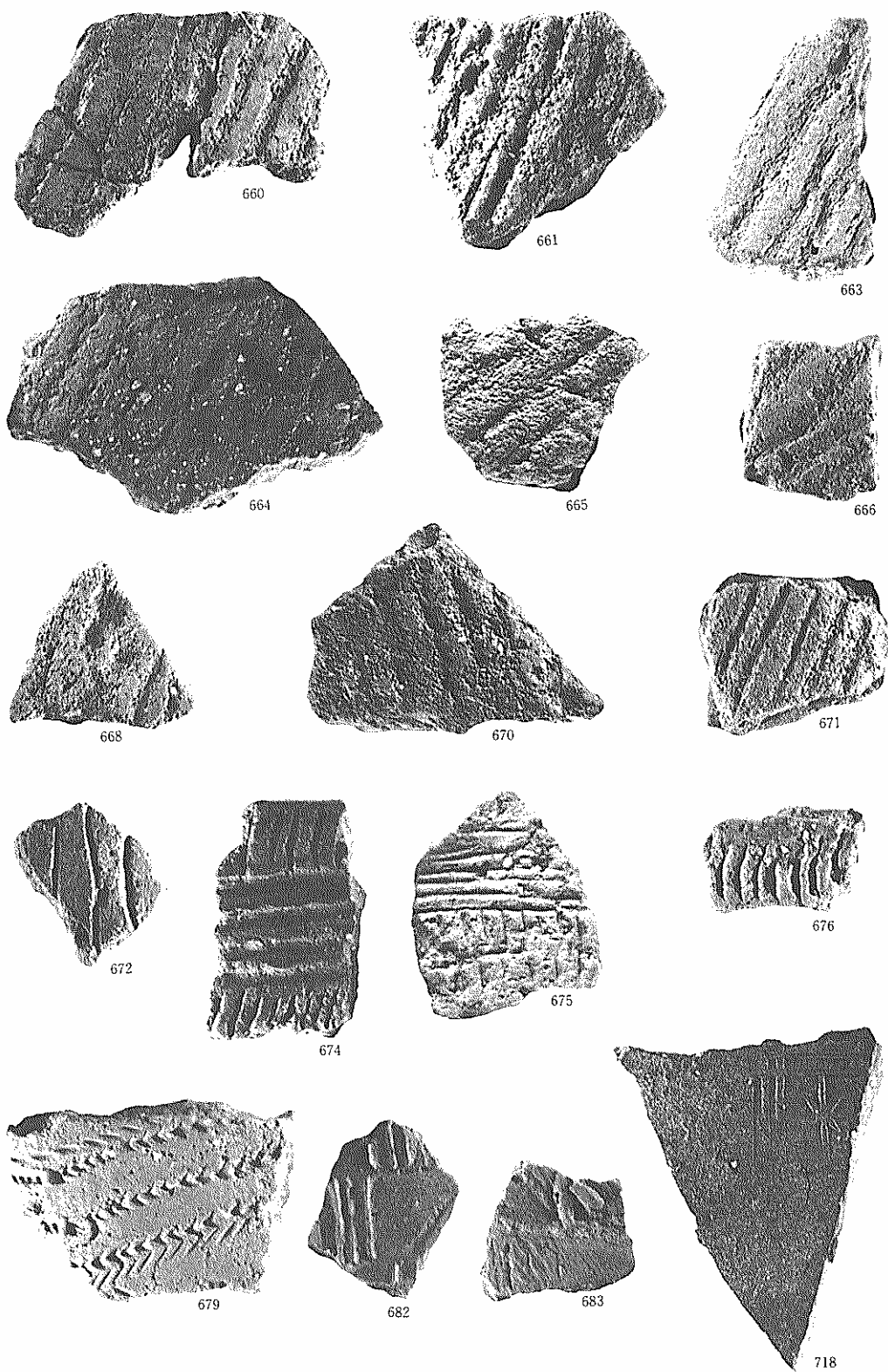
図版10 遺構以外出土遺物(2)



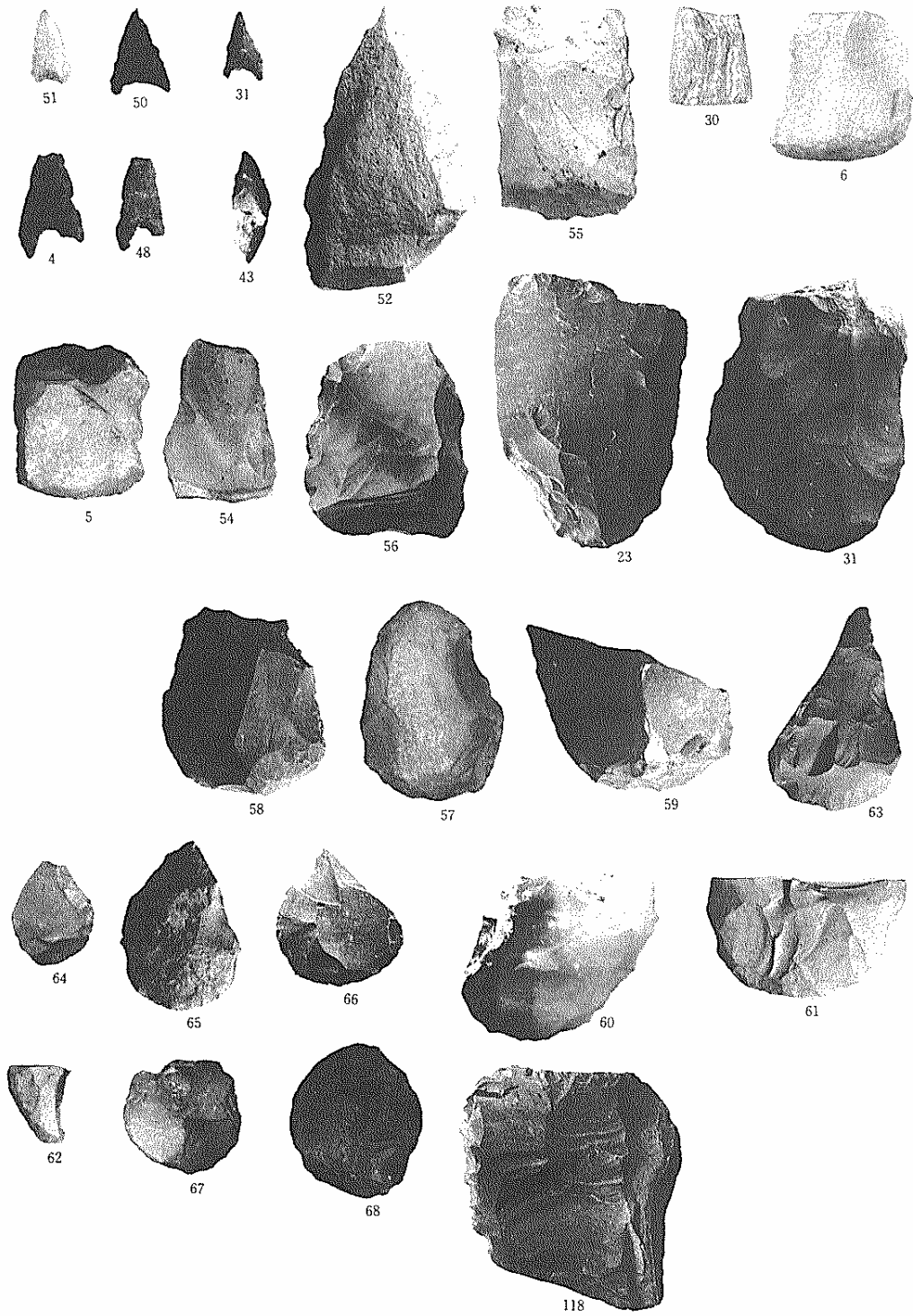
図版11 遺構以外からの出土遺物(3)



図版12 遺構以外からの出土遺物(4)

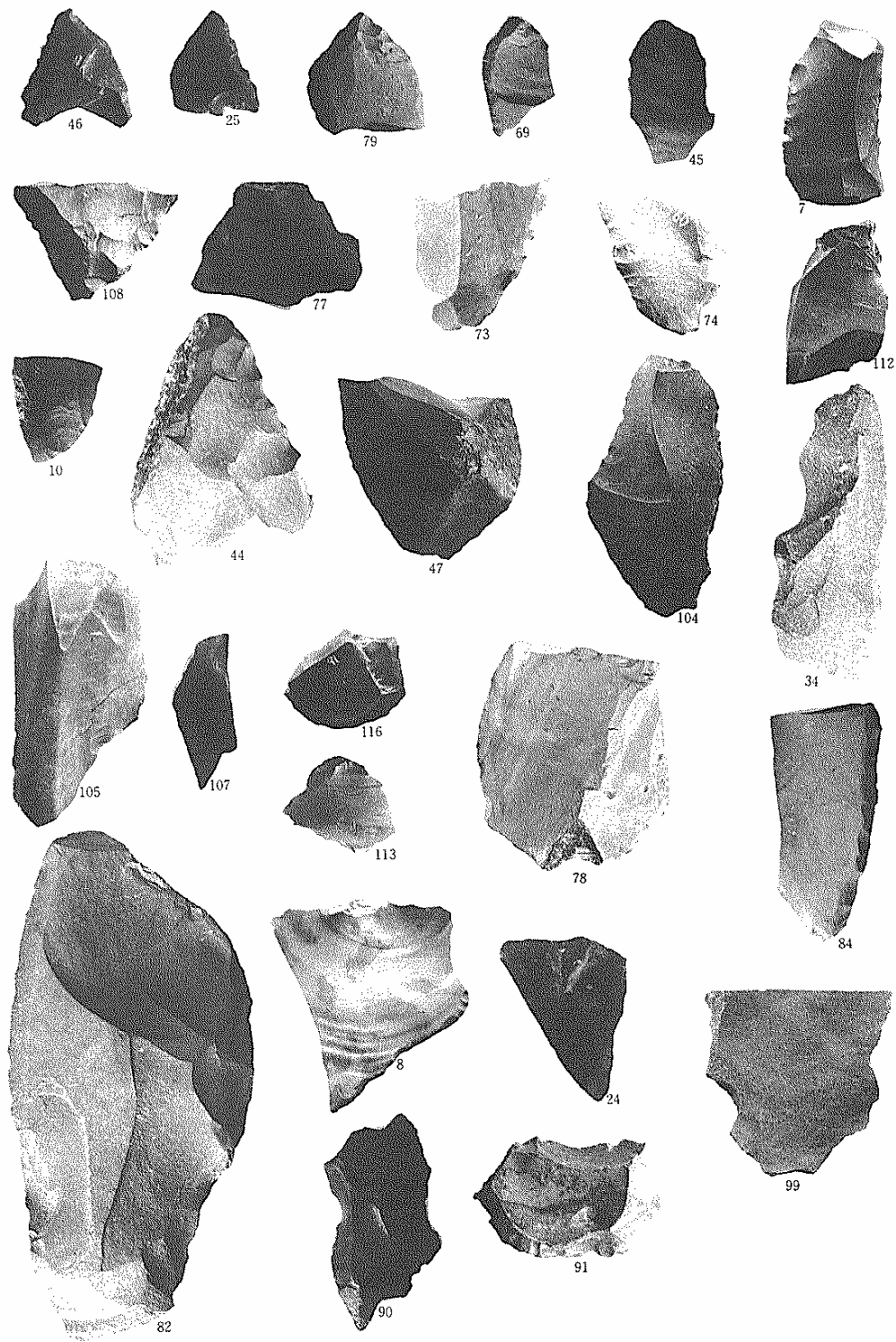


図版13 遺構以外からの出土遺物(5)

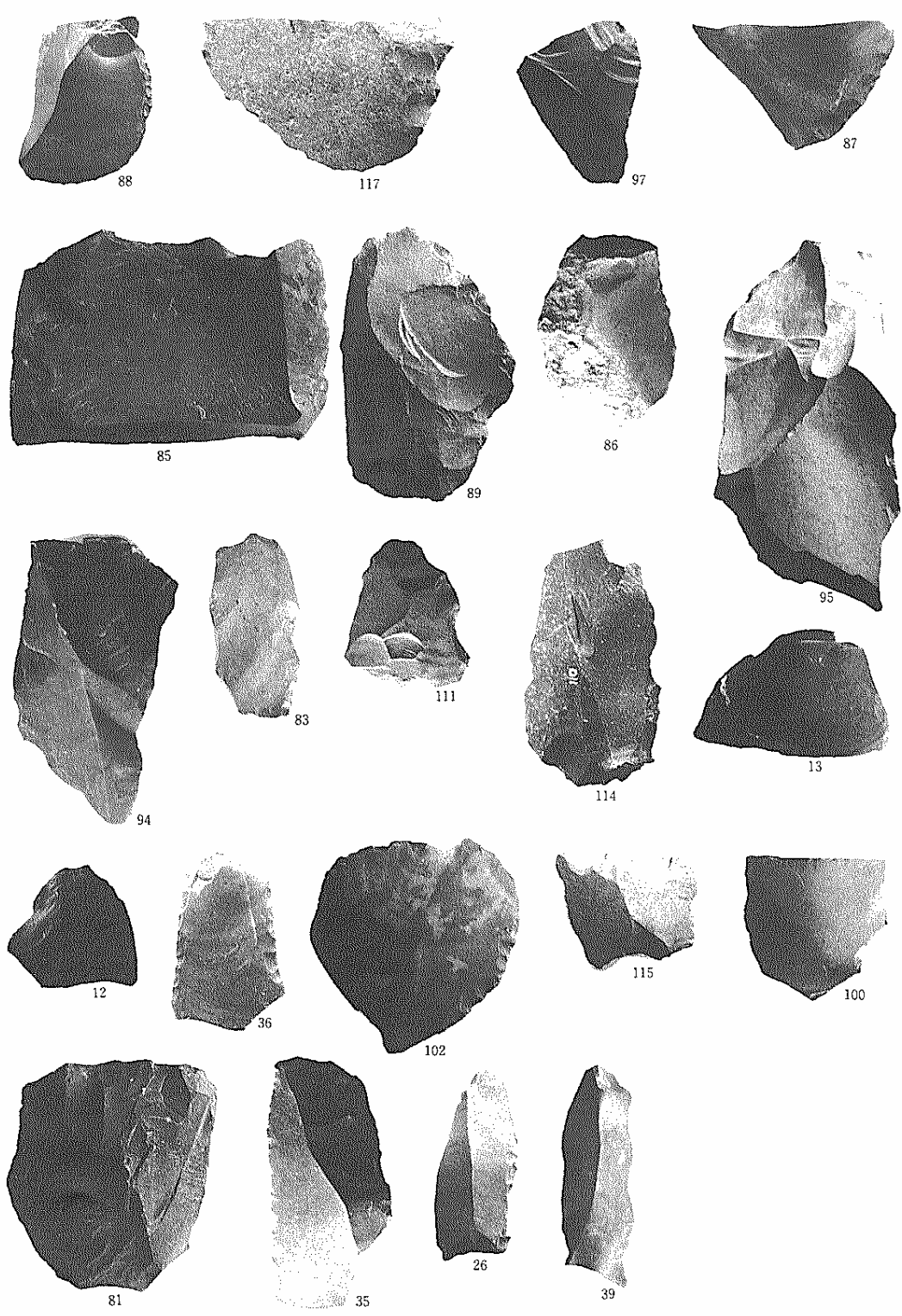


図版14 石器 (石鏃・錐・籠状石器・ラウンド・スクレーパー・ピース・エスキュー)





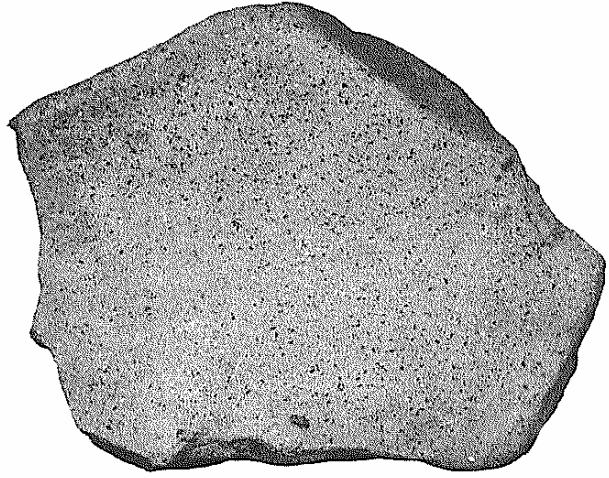
图版15 不定形石器(1)



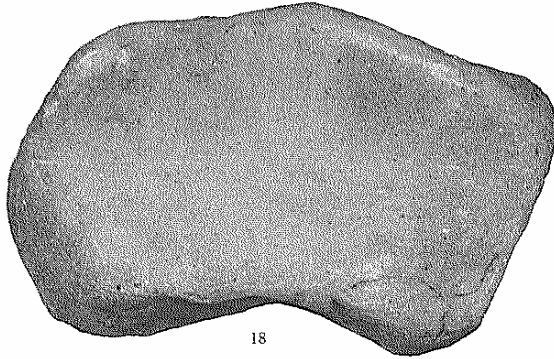
图版16 不定形石器(2) 剥片



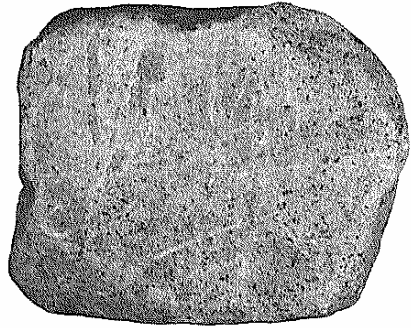
125



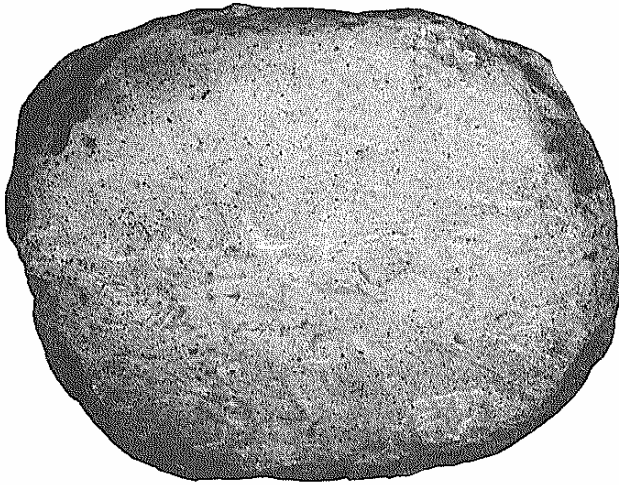
16



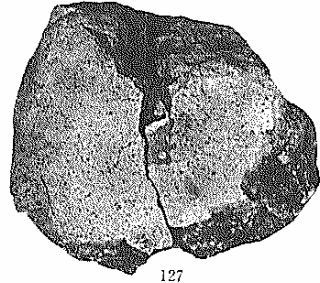
18



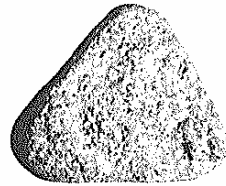
17



126

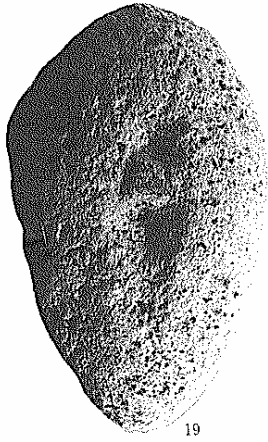


127

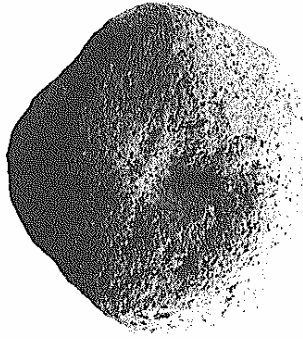


133

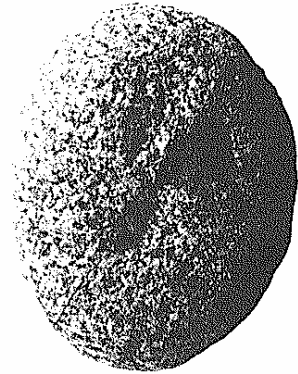
圖版17 打製石斧・石皿・磨石



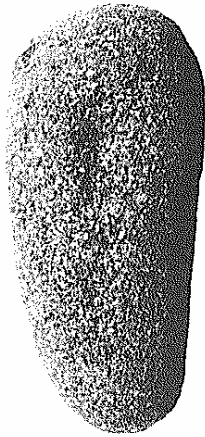
19



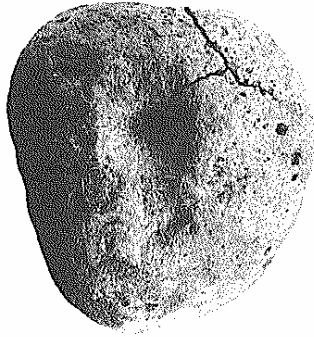
21



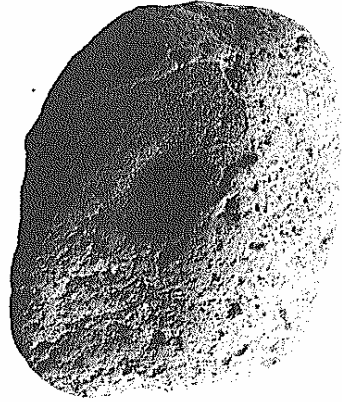
20



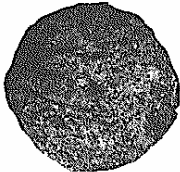
40



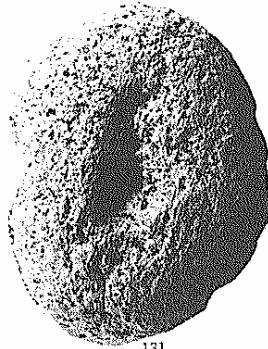
129



130



132



131

图版18 凹 石

### Ⅲ. <sup>あお</sup>青 <sup>き</sup>木 遺 跡

# 目 次

I 調査の方法と経過	101
II 基本層位	102
III 発見された遺構と出土遺物	103
① 竪穴住居跡と出土遺物	103
② 土壌と出土遺物	107
③ 溝状遺構と出土遺物	108
④ 遺構以外の出土遺物	108
IV 考 察	109
① 出土土器の検討	109
② 遺構の年代	110
V ま と め	110

## 調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県白石市福岡大字深谷字青木脇、後

遺跡記号：AO（宮城県遺跡地名表登載番号：02306）

調査期間：昭和56年4月8日～6月3日

調査面積：約600 m<sup>2</sup>

発掘面積：544 m<sup>2</sup>

調査員：技術主査 狩野正明

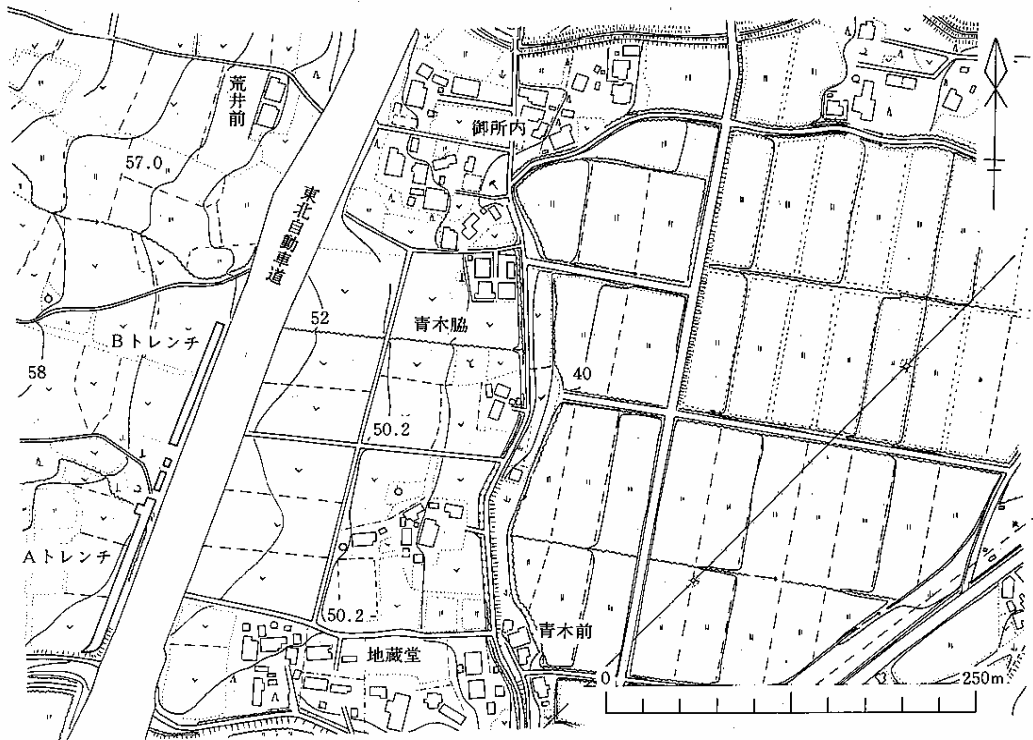
技師 土岐山武、澁谷正三、菊地逸夫、古川一明

## I. 調査の方法と経過 (第1図・第2図)

水道管理設予定地は、東北自動車道の西側沿いであり、遺跡を南北に縦断する。調査対象地は、ほぼ平坦で、現状は、畑地、水田で一部に宅地、墓地がみられる。

調査区は、任意の基準線を大部分が自動車とほぼ平行にとり、それに直交する線を設け、3×3mのグリッドを全体に配した。範囲は、東西約3m、南北約260mであり、中央部の宅地、墓地等で調査不可能な部分を境に、南側をAトレンチ、北側をBトレンチとした。

調査は、4月8日より開始した。その結果Aトレンチからは、竪穴住居跡3軒、土壇2基、溝状遺構2本が検出された。Bトレンチからは、遺構は検出されず、遺物が少量出土したのみである。各遺構の精査、図面作成等を行ない調査が終了したのは6月3日である。



第1図 調査区と周辺の地形

## II. 基本層位 (第2図)

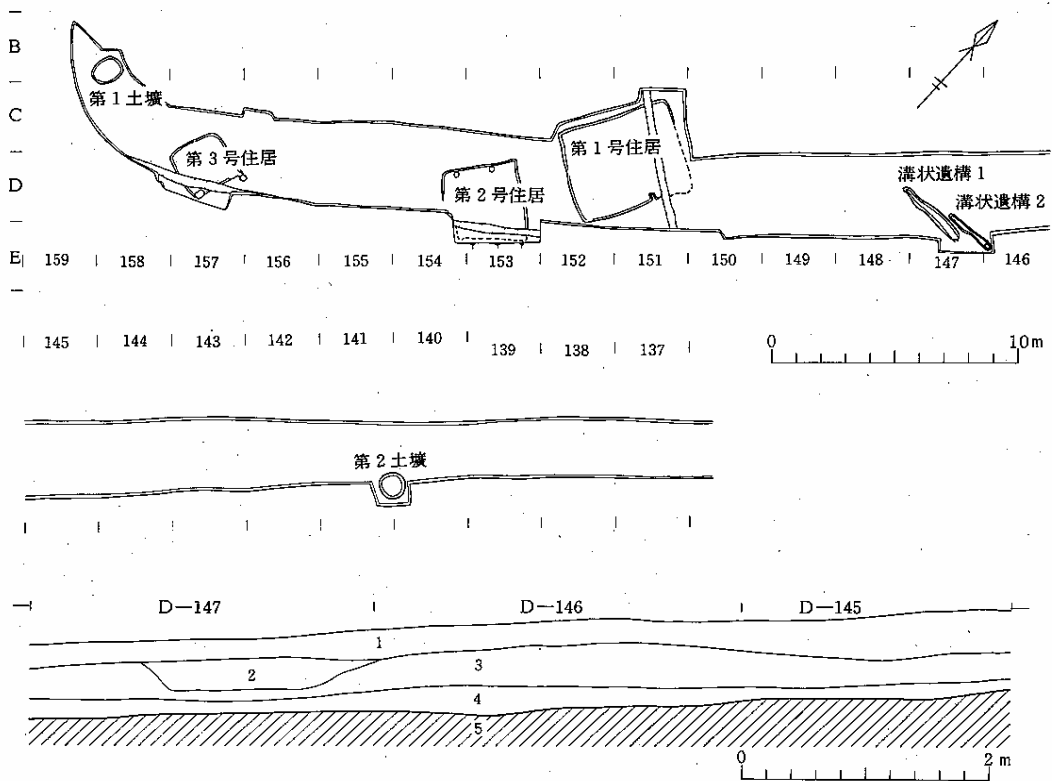
堆積状況は、調査区内の地点での相違はない。

第I層—黒褐色土層、耕作土、厚さは15~20cmである。

第II層—黒色火山灰層である。厚さは10~50cm あるが、Aトレンチ南側とBトレンチ全域は薄く、Aトレンチ北側は、比較的厚く、粘性はない。

第III層—黒褐色土層、地山漸移層である。

第IV層—褐色土層、地山ロームである。Aトレンチ北側では多くの礫を含む。遺構の確認はすべてこの上面で行なった。



層位	層No	土色	土性	備考
I	1	10YR $\frac{2}{5}$ 黒褐色	シルト	耕作土
	2	10YR $\frac{2}{5}$ 黒褐色	シルト	落ち込み堆積土
II	3	10YR $\frac{2}{5}$ 黒色	火山灰	黒ボク土
III	4	10YR $\frac{2}{5}$ 黒褐色	シルト	地山移層
IV	5	10YR $\frac{2}{5}$ 褐色	シルト	地山ローム

第2図 遺構配置図・基本層位



### Ⅲ. 発見された遺構と出土遺物

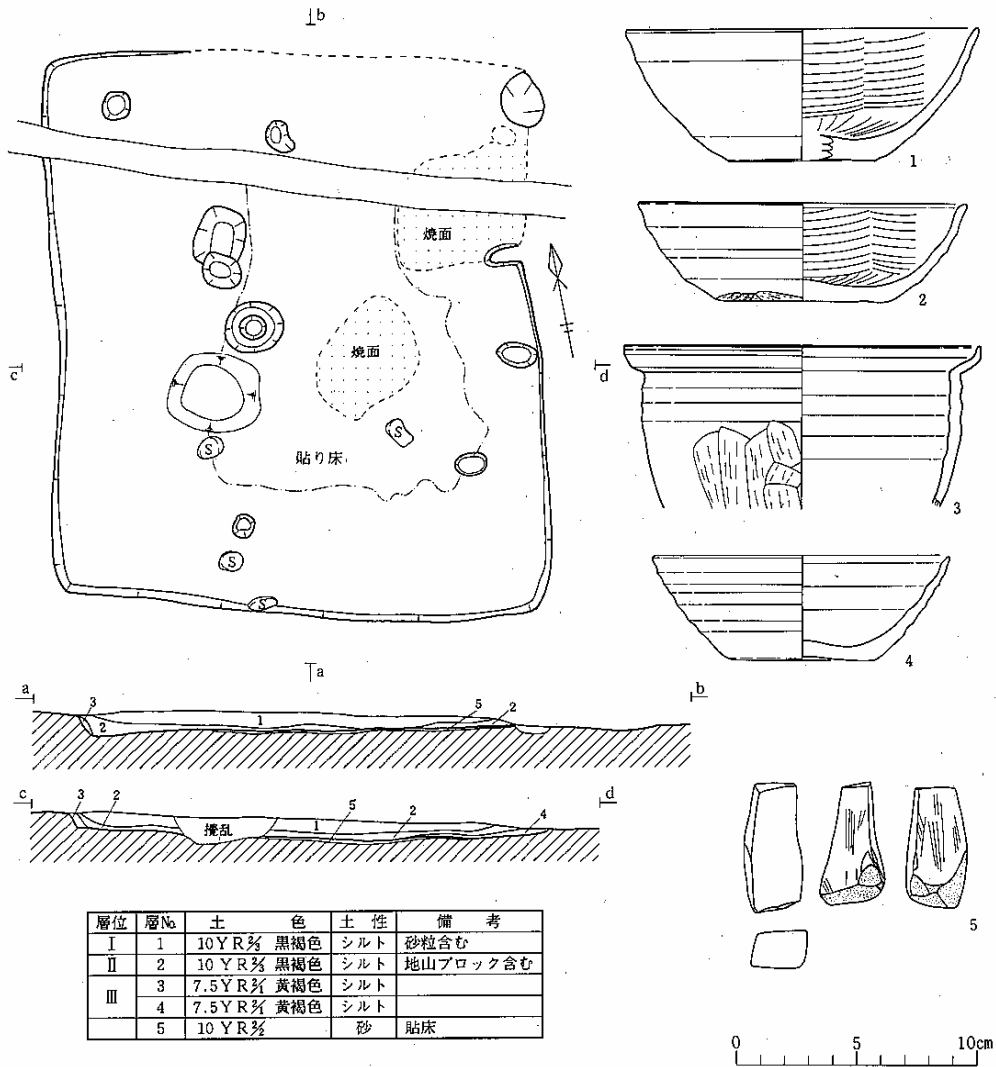
#### 竪穴住居跡と出土遺物

Aトレンチから3軒検出された。いずれも耕作等により削平を受けている。

#### 第1号住居跡 (第3図)

〔確認〕 C・D-151、152 グリッド周辺の地山面で確認された。

〔平面形、規模〕 西壁、南壁と東壁の一部が残存する。平面形は、残存部から長方形を呈する



第3図 第1号住居跡と出土遺物

と考えられる。規模は、4.0×4.5mある。

〔堆積土〕 3層認められた。第Ⅰ層は、住居のほぼ全域に堆積しており、第Ⅰ層は、床面上に堆積している。第Ⅲ層は、南、西壁沿いに堆積している。

〔壁〕 地山を壁としている。残存している壁は、南壁で約16cmでその他は地5cmほどである。床面からの立ち上りは、緩やかである。

〔床〕 住居のほぼ中央部約2.6m×2.0mの範囲に厚さ約2cmの貼り床がされ、その上面を床としている。その他の部分は、地山をそのまま床としている。ほぼ平坦であり、貼り床の部分は固くしめられている。

〔カマド〕 住居東壁北寄りのに付設されていると考えられる。焼面及び、燃焼部側壁の一部が残存しているにすぎない。

〔柱穴〕 床面から10個のピットが検出された。これらは、全て、柱痕跡が認められず、配置の規則性も見られない事から、柱穴は不明である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器、砥石が出土している。その中で図示できたものは全て堆積土中のものである。

#### 堆積土中出土遺物

〔土師器〕 土師器には坏、甕がある。

〔坏〕 (第3図-1・2) いずれも製作にロクロを使用している。1・2ともに体部から口縁部にかけて、丸味をもって外傾する。1は2に比して器高が大きい。1の底部には、回転糸切りの痕跡が残り一部に手持ちヘラケズリがみられる。1は、底部全面に手持ちヘラケズリがみられ、切り離し技法は不明である。1の体部には〔中?〕の墨書が認められる。

〔甕〕 (第3図-3) 口縁部から体部の一部のみが残存する。製作にロクロを使用している。口縁部は外反し、端部は、上方に突き出している。

〔須恵器〕 須恵器には坏、甕がある。

〔坏〕 (第3図-4) 体部から口縁部にかけて、やや丸味をもっと外傾する。底部には回転糸切りの痕跡と「メ」のヘラ書きが認められる。

〔砥石〕 (第3図5) 欠損品である。断面形は長方形を呈す。使用面は、表裏、両側面の4面で3面に擦痕が認められる。

#### 第2号住居跡 (第4図)

〔確認〕 D・E-153・154 グリッド周辺の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 西壁、北壁と南壁の一部が残存する。平面形は長方形を呈し規模は西壁3.0m、北壁3.5mある。

〔堆積土〕 2層認められる。第Ⅰ層は住居のほぼ全域に、第Ⅱ層は住居の北から西壁沿いに

堆積している。

〔壁〕 地山を壁としている。残存部の壁高は西壁、北壁で約7～8cmである。床面からの立ち上りは緩やかである。

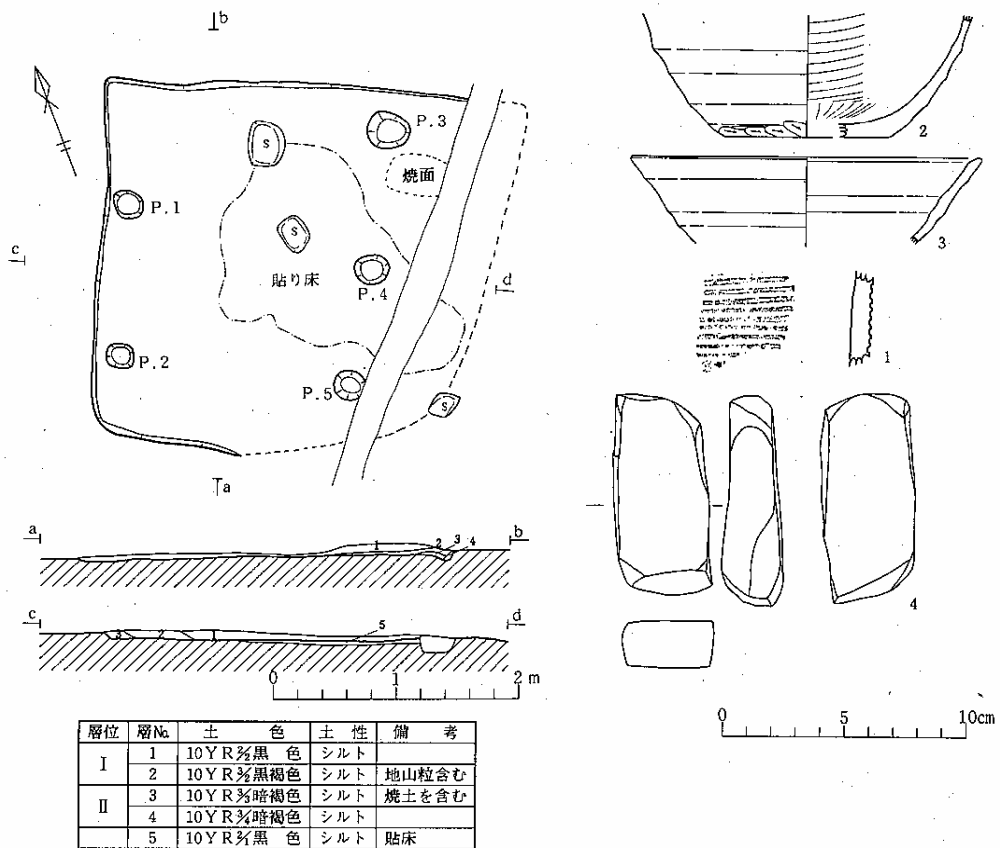
〔床〕 住居中央部約1.5×2.0mの範囲に厚さ1～4cmの貼り床がされ、その上面を床面としている。その他の部分は地山をそのまま床面としている。ほぼ平坦で貼床部分は固くしまっている。

〔柱穴〕 床面から5個のピットが検出された。いずれのピットからも柱痕跡は認められなかったが、ピット1・2は配置から柱穴である可能性がある。

〔カマド〕 住居北東隅近くに焼面がみられ、カマド燃焼部の痕跡である可飽性がある。

〔出土遺物〕 縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器、砥石が出土している。その中で図示できたものは全て堆積土中のものである。

〔縄文土器〕 (第4図-1) 体部の小破片である。文様は横位の沈線である。早期中葉の



第4図 第2号住居跡と出土遺物

ものと考えられる。

〔土師器〕（第4図-7） 坏がある。製作にロクロを使用している。体部、底部の一部のみが残存している。底部には回転糸切り痕跡がみられ、底部周縁から体部下端に手持ちヘラケズリの調整がみられる。

〔赤焼土器〕（第4図-3） 坏がある。体部から口縁の一部のみが残存しており、底部から口縁にかけて直線的に外傾する。

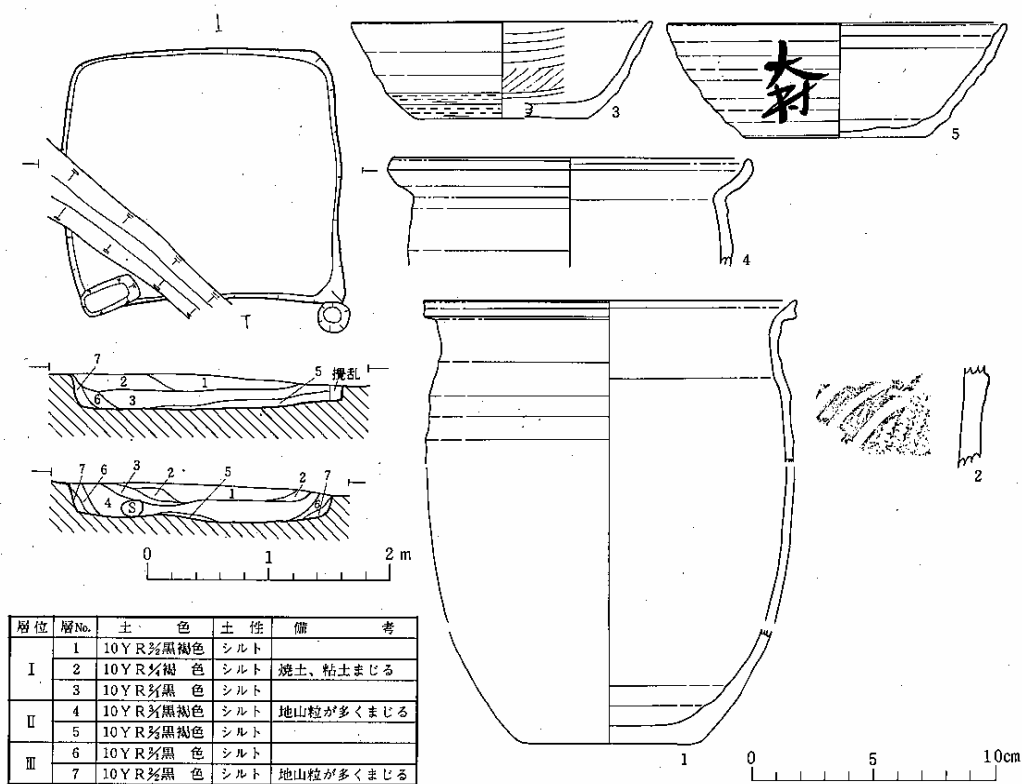
〔砥石〕（第4図-4） 欠損品である。使用面は上下、両側面の4面で、研磨溝が見られる。

### 第3号住居跡（第5図）

〔遺溝の確認〕 C・D-157 グリッド周辺の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 西壁2.2m、北壁2.2mの正方形を呈する。

〔堆積土〕 3層認められた。Ⅰ層は住居中央部に、Ⅱ層は床面上に、Ⅲ層は壁沿いに堆積している。



第5図 第3号住居跡と出土遺物

〔壁〕 地山を壁としている。壁高は量も保存のよい西壁で約 25cm ある。床面からの立ち上りは比較的急である。

〔床〕 地山をそのまま床面としている。ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 縄文土器、土師器、須恵器が出土しており、その中で住居に伴うと考えられるのは床面出土のものである。

○住居に伴う遺物

〔土師器〕 (第5図-1) 甕がある。製作にロクロを使用している。体部の一部を欠損しているが、同一個体である。体部はややふくらみ、口縁部は小さく外反し、端部は上方に突き出ている。底部には回転糸切りの痕跡がみられる。

○堆積土中出土遺物

〔縄文土器〕 (第5図-2) 体部破片である。縄文部(RL)と磨消部からなり、前者には盲孔があり、そこから後者に曲線的な沈線が3本施されている。縄文後期初頭頃のものと考えられる。

〔土師器〕 坏と甕とがある。

坏(第5図-3) 製作にロクロを使用している。器高が小さく、口縁・体部はやや丸味をもって外傾する。体部下端から底部全域に回転ヘラケズリの再調整が加えられ、切り離し技法は不明である。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

甕(第5図-4) 口縁部から体部の一部のみが残存する。口縁部は外反し、端部は上方に突き出している。

〔須恵器〕 (第5図-5) 坏がある。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾する。底部には回転糸切り痕跡が認められる。体部外面には「大村」の墨書がある。

## 土壌と出土遺物

第1号土壌(第6図-1) B-157 グリッド周辺の地山面で確認された。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸130cm、短軸110cm、深さは確認面から約30cmある。堆積土は1層である。出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、円盤状土製品があるが、いずれも小破片である。円盤状土製品は、縄文土器の体部破片を利用しているもので、形状は隅の丸い方形を呈する。周縁は敲打調整し、さらに、若干の研磨が加えられている(第6図-3)。

第2号土壌(第6図-2) C-140-141 グリッド周辺の地山面で確認された。平面形は径約110cmの円形を呈し、確認面からの深さは約30cmある。出土遺物はない。

## 溝状遺構と出土遺物 (第6図)

第1号溝 長さ310cm、巾45cm、深さ約50cmある。底面からの立ち上りは急である。堆積土は3層認められた。出土遺物はない。

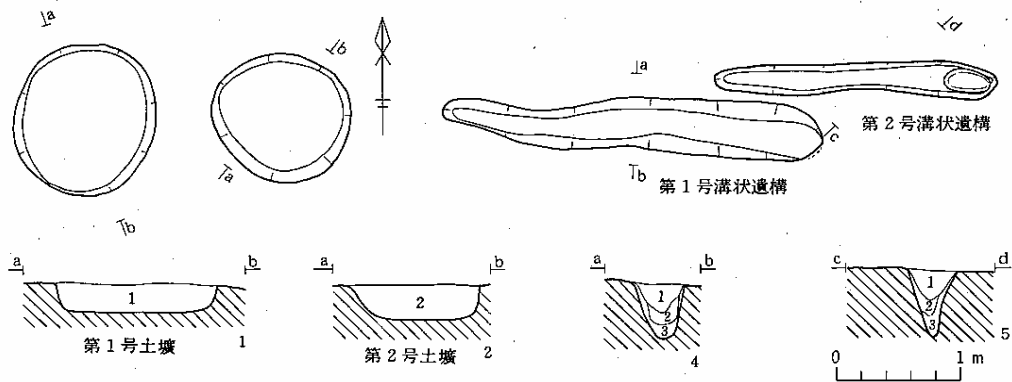
第2号溝 長さ230cm、巾25cm、深さ約60cmある。底面からの立ち上りは急である。堆積土は3層認められた。出土遺物はない。

## 遺構以外の出土遺物 (第7図)

縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。これらは基本層位I層、II層からのものである。

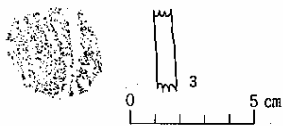
〔縄文土器〕 (第7図1~4) 1・2は口縁部の破片である。1は波状口縁を呈する。縄文(不明)を地文とし、横位に直線的な沈線と曲線的な沈線文が併用されて施されている。2は平縁を呈する。無文帯には盲孔が1個あり、そこから隆起線と沈線文とが曲線的に下に延びている。3~4は体部の破片である。いずれも、縄文部(RL)と磨消部からなり、その間には沈線文が施されている。2は縄文時代後期初頭のものと思われる。その他は不明である。

〔土師器〕 坏・甕がある。小破片のため図示できるものはない。両者とも製作にロクロを使



層No	土色	土性	備考
1	10YR 7/2 黒色	シルト	第1号土壇堆積土
2	10YR 7/3 黒褐色	シルト	第2号土壇堆積土

層No	土色	土性	備考
1	10YR 7/2 黒褐色	シルト	粘性あり、しまりなし
2	10YR 7/3 暗黄褐色	シルト	地山ブロック含む
3	10YR 7/4 黄褐色	シルト	



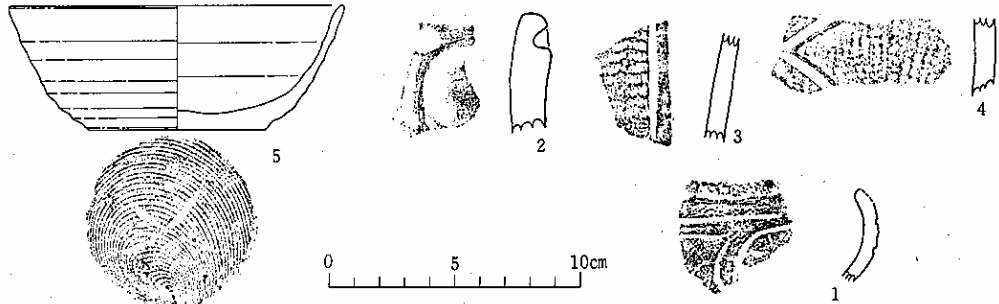
層No	土色	土性	備考
1	10YR 7/2 黒色	シルト	粘性有、しまりなし
2	10YR 7/3 暗黄褐色	シルト	粘性有、しまりやや有
3	10YR 7/4 黄褐色	シルト	粘性有、しまり有

第6図 土壇・溝状遺構と出土遺物

用しており、坯の内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〔須恵器〕 坯・甕がある。図示できるものには坯がある。

坯（第7図-5） 口縁、体部は丸みをもって外傾する。底部には回転糸切りの痕跡と「メ」のヘラ書きが認められる。



第7図 遺構以外の出土遺物

## IV. 考 察

### 出土土器の検討

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。ここでは、土師器、須恵器、赤焼土器について述べる。

#### ○土師器坯

図示できたものは4点ある。すべて製作にロクロが使用され、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底部の状況、器形の相違から次の2つに分けられる。

A：底部切り離し技法は回転糸切りによるもので、底部及び体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が施されている。口径に対し器高の大きいものである（第3図-1、第4図-2）。

B：底部切り離し技法は再調整のため不明なものである。再調整には手持ちヘラケズリによるもの（第3図-2）と回転ヘラケズリによるもの（第5図-3）とがある。口径に対し器高の小さいものである。

#### ○土師器甕

図示できたものは3個体ある。いずれも製作にロクロを使用している。すべて欠損部分が多く、全体の形態については不明である。

#### ○須恵器坯

図示できたものは3個体ある。いずれも口径に対し底径の占める割合が大きく、口縁、体部はやや丸味をもって外傾し、その傾き具合は小さいものである。底部にはいずれも回転糸切りの痕跡がみられる。なお、（第5図5）の体部外面には「大村」の墨書がある。

## ○赤焼土器坏

製作にロクロを使用しており、内面の調整の加えられていないものである。底部が欠損しており詳細については不明である。

これらの土器は、いずれの遺構内での共伴関係を示すものではないため、各器種間毎の構成、遺構内での土器組成等は不明である。土師器坏は製作にロクロを使用しており、東北地方南部の土師器編年で表杉ノ入式（平安時代）（氏家：1957）のものである。表杉ノ入式は設定以来細分が試みられ、本遺跡出土にみられる底部状況、器形的特徴を示す土器は平安時代の中でも比較的古い段階のものと考えられている。その他の土器も同様の年代と思われる。また、須恵器坏にみられた「大村」の墨書文字は、前回の調査（小川：1980）でも土師器坏（表杉ノ入式）の体部外面にみられている。

## 遺構の年代

今回の調査で発見された遺構は前述したように堅穴住居跡3軒、土壇2基、溝状遺構2本である。堅穴住居跡は削平が激しく残存する部分が全体的に少なく、構造等は不明な点が多い。3軒の住居のうち、遺構に伴うと考えられる遺物としては第3号住居跡床面からの土師器甕のみである。他の2軒は堆積土中出土の遺物のみで、正確な年代を示す事はできない。しかし、堆積土中出土の遺物は全て床面近くのものであり、住居の年代に近いものと考えられる。したがって各住居の年代は前項で検討した土師器坏の年代とほぼ同様のことが言える。

土壇、溝状遺構は性格、年代その他詳細は不明である。

## V. まとめ

- 青木遺跡は、白石市福岡深谷青木に所在し、白石川によって形成された河岸段丘上にあり、遺跡の立地する深谷地区は、児捨川、三本木川、大太郎川等によって扇状地性の地形となっている。
- 今回の調査で発見された遺構は、堅穴住居跡3軒（平安時代前半）、土壇2基、溝状遺構2本である。
- 出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器があるが後三者が主体を占める。
- 遺跡はさらに東西に広がると考えられ、今回発見された3軒の住居も前回の調査で明らかにされた集落の一部をなすと考えられる。



## 〈参 考 文 献〉

- 氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯  
小川淳一（1980）：「青木遺跡」『東北自動車道遺跡報告書VI』宮城県文化財調査報告書71集

青木遺跡破片集計表

		器面調整		1住		2住	3住		土城	74	134	136	137	145	146	147	150	153	153	156	表探	不明	計			
		内面-外面		床	壇	壇	床	壇	壇	1厨	1厨	×	1	1	1	1	1	1	1	1				1	1	1
上	口縁部	口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1	6	2	4	6	2														
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1	6	2	4	6	2														
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1	6	2	4	6	2														
	体部	口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	7	2	3	7	3	6	1													
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	7	2	3	7	3	6	1													
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	7	2	3	7	3	6	1													
	底部	口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1		2		1															
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1		2		1															
		口ケ	クズ	ローミ	ガズ	(器)	1		2		1															
	高環部	口ケ	クズ	ローミ	ガズ	キ																				
計						2	16	6	8	25	9	0	2	0	12	5	3	3	34	27	12	36	2	71	271	
器	口縁部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	3	3																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	3	3																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	3	3																		
	体部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
	底部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	2	11																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	2	11																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	2	11																		
	底部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	2	1																		
計						10	22	5	3	11	14	2	0	9	10	7	1	4	95	63	16	44	4	120	442	
須	口縁部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2	4	0	3	22
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2	4	0	3	22
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2	4	0	3	22
	体部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	4																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	4																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	4																		
	底部	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
		口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ	1	1																		
	計						2	5	0	0	2	1	0	0	0	9	1	0	0	6	5	4	4	0	9	50
壹・並	口ケ	クズ	ローミ	クナ	ロ																					
中世						1																				
縄文						3	1	2	5	1																
土器上層																										
計						17	44	13	13	43	28	4	2	9	32	13	4	9	143	112	35	92	6	298	828	

遺跡近景

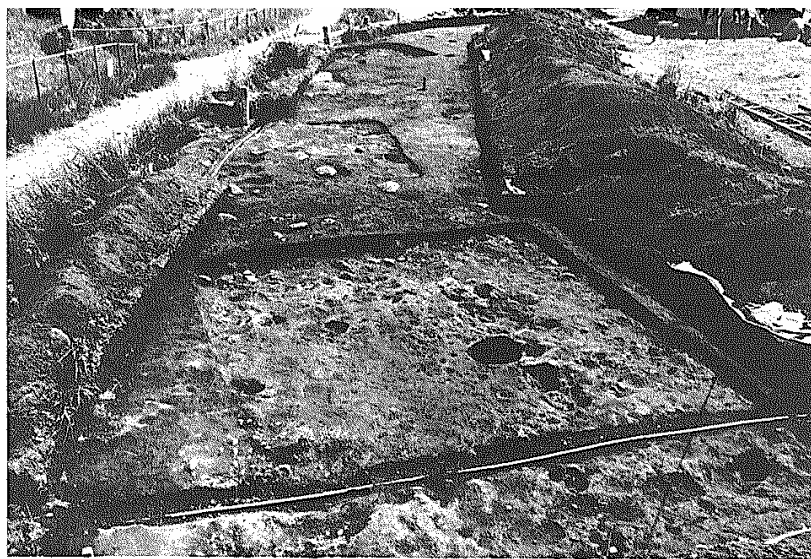


基本層位



Bトレンチ全景





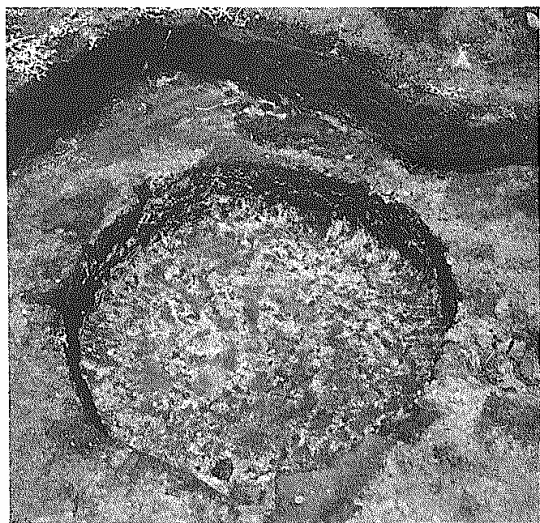
第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡



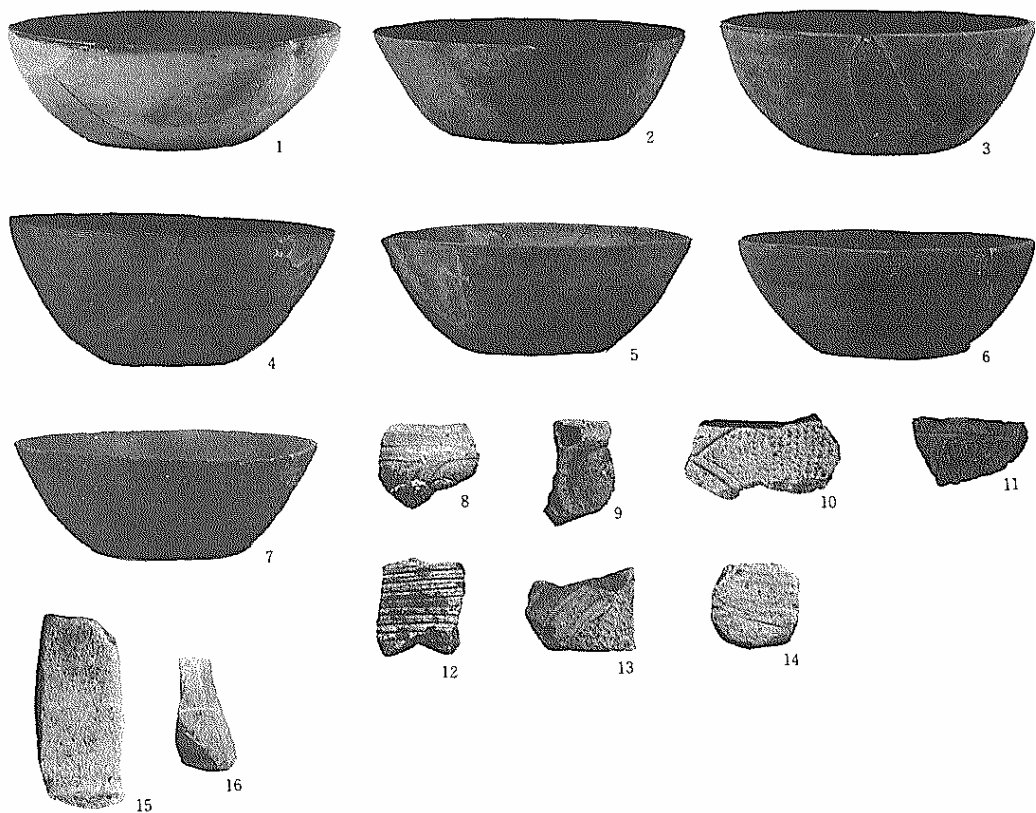
第 1 号土坑



第 1 号土坑



沟状遗构



- |        |         |         |
|--------|---------|---------|
| 1 第3图2 | 8 第7图1  | 15 第4图4 |
| 2 第5图3 | 9 第7图2  | 16 第3图5 |
| 3 第4图2 | 10 第7图4 |         |
| 4 第3图1 | 11 第7图3 |         |
| 5 第5图5 | 12 第4图1 |         |
| 6 第3图4 | 13 第5图2 |         |
| 7 第7图5 | 14 第6图3 |         |

图版4 出土遗物